

史料研究・成果公開

共同利用・共同研究拠点による研究・成果

特定共同研究

〔古代史料領域〕

研究課題 史料編纂所「正倉院文書調査関係資料」の整理と研究資源化

研究経費 一三五万円

研究組織

研究代表者 稲田奈津子

所内共同研究者 遠藤基郎 新井重行 黒須友里江 小塩慶

所外共同研究員 飯田剛彦（宮内庁正倉院事務所） 小倉慈司（国立歴史

民俗博物館） 佐々田悠（宮内庁正倉院事務所） 杉本一

樹（宮内庁正倉院事務所） 田島公（東京大学名誉教授）

三野拓也（宮内庁正倉院事務所） 矢越葉子（明治大学）

山口英男（東京大学名誉教授）

研究の概要

（１）課題の概要

正倉院文書は、約一万点にも及ぶ八世紀の原文書群であり、世界的にも貴重な存在として、宮内庁正倉院事務所による細心の維持管理が行われている。史料編纂所は一二〇年以上にわたり継続的に貴重な調査の機会を与えられ、その成果を『正倉院文書目録』等の刊行物により公表してきた。一方で、原本調査時の調書類が、刊行物には反映しきれなかった様々な情報を含みつつ、未整理のまま数多く残されている。本計画ではこれら調書類を整理・データ化することで、今後の編纂や研究に活用できるよう整備することを目的としている。

正倉院文書は、原本調査の機会が限られる上に、現状ではマイクロフィルム画像しか利用できず、特に形態的情報について調書類のもつ価値は計り知れない。整理・公開に際しては、正倉院文書に深く関わってこられた関係機関・調査機関や専門研究者の意見をふまえ、より良い方法を模索することが求められる。また、調書類を活用した新しい研究の方向性について議論することで、本所編纂物の質の向上や正倉院文書を用いた研究の新展開も期待できる。

（２）研究の成果

第一回研究会で本研究課題が対象とする資料群の状況をメンバー全体で共有した上で、今後の整理・公開の方策について意見交換をおこなった。その議論をふまえて所内で資料整理作業を進め、第二回研究会でその中間報告をおこない議論を深め、おおよその方針を確立した。この方針にもとづき、謝金による整理補助も得つつ作業を進めた結果、年度末の段階で続々修調書（一六帙まで）については大方のスキヤニング作業を終了し、正集・塵芥の調書類についても所在確認がおおよそできた状況にある。次年度は謝金や外注も含めた迅速化をはかりつつ、スキヤニングデータの公開に向けた整理を進めるなど、作業を継続する予定である。

第三回研究会では、今後の編纂物・DBの利便性の促進と、調査・調書作成における学界の要望を確認するため、ゲストスピーカーを含む専門研究者に意見を出してもらい、共同研究員である所蔵機関・調査機関の側からの見解とあわせて、実りある議論をすることができた。次年度は本所以外の調査機関での取り組みなどを共有し、より良い調査や情報公開の方向性を探っていく予定である。また正倉院事務所や関連機関における調査・うちあわせを計画的に実施していく予定である。

【中世史料領域】

研究課題 賀茂別雷神社文書・社家文書の調査・研究

研究経費 一五五万円

研究組織

研究代表者

金子拓

所内共同研究者

遠藤基郎

遠藤珠紀

木下竜馬

川本慎白

林晃弘

石

津裕之

所外共同研究員

伊藤真昭（京都西山短期大学）

宇野日出生（同志社大学）

加藤直弥（國學院大学）

久留島典子（総合研究大学院大学）

五島邦治（京都芸術大学）

志賀節子 高橋敏子

竹田和夫（新潟大学）

辰田芳雄（岡山県立岡山朝日高校）

谷徹也（立命館大学）

谷口央（東京都立大学）

中川学

（東北大学）

野田泰三（京都橘大学）

東昇（京都府立大学）

藤田恒春（賀茂別雷神社史料編纂会）

藤本仁文（京都府立大学）

三枝暁子（東京大学人文社会系研究科）

山本宗尚（宇宙航空研究開発機構）

横井靖仁（関西大学）

研究の概要

（１）課題の概要

これまで史料編纂所では、賀茂別雷神社文書（京都府賀茂別雷神社所蔵）について継続的な調査・撮影をおこない、画像やデータの蓄積とその公開を進めてきた。賀茂別雷神社文書は、近年の京都府による調査で約一四、〇〇〇点に整理されたが、史料編纂所ではこのうち六、三三二点（三四、四三六コマ）のデジタル化を終えている（二〇二三年度までのデータ）。

同社文書については、文明八年（一四七六）の賀茂一社争乱といわれる祠官と氏人との争い以前のものは少なく、これ以後、江戸時代前期の寛文五年（二六六五）頃までの文書を非常に多く残している。本研究においては、この期間の文書約八、〇〇〇点のうち、中世を中心に調査・撮影をさらに継続し、デジタル化・データベースからの公開（研究資源化）を進めるとともに、これらを用いた賀茂別雷神社、同社の文書 および同社の神事、組織、所領について、また、同社の文書を用いた中近世の政治史、文化史などの研究をお

こなう。さらに今期は、社司家・氏人家所蔵文書へも調査を広げて研究を行なう。

（２）研究の成果

共同研究員それぞれが、賀茂社に関する関心に基づき、賀茂別雷神社・史料編纂所ほか史料所蔵機関において調査を進め、研究会にてその成果を報告することにより、日本史（中世・近世）・神社神道史など多様な立場から参加する共同研究参加者の意見交換がなされ、研究成果の共有が進んだ。今年度はオンライン研究会を一度開催し、最終年度にあたるため年度末の三月に対面・オンライン併用の研究集会を開催して研究成果の報告を行なった。

賀茂別雷神社文書は、金子が研究代表者を務める科研「神社文書・社家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究」による業者委託分含め五九〇点五、二四五コマを撮影した。また同科研と合同で、賀茂別雷神社に関わる収集文書として知られる座田文書（鶴岡八幡宮所蔵）の調査に着手した。

【近世史料領域】

研究課題 近世大名家臣史料の「読み直し」と研究資源化

研究経費 一二〇万円

研究組織

研究代表者

小宮木代良

所内共同研究者

及川亘

石津裕之

所外共同研究員

阿部大地（佐賀県立図書館）

伊藤昭弘（佐賀大学教授）

大平直子（佐賀市文化財課）

佐藤孝之（國學院大学大学院・東京大学名誉教授）

清水雅代（佐賀県立図書館）

田久保佳寛（小城市教育委員会）

田畑春香（佐賀県立名護屋城博物館）

野下俊樹（佐賀県立図書館）

本多美穂（佐賀県立図書館）

松田和子（佐賀県立図書館）

研究の概要

（１）課題の概要

佐賀藩家臣坊所鍋島家史料（佐賀県立図書館所蔵）のうちの近世初期の部分を対象とし、多久家史料と密接な関係を持つ当該史料群一点毎の「読み直

し」を行う。これまで、代表者および本所近世第一室のメンバーは、佐賀県立図書館等、主に佐賀県内の自治体・機関等において県内近世史料の調査・研究に関わってきた複数の研究者とともに、特定共同研究近世史料領域（二〇一四年度～二〇一五年度に代表者小宮「佐賀藩家臣多久家史料の研究」、二〇一六年度～二〇一七年度に代表者小宮「近世初期大名家における大身家臣史料群の研究資源化」）において、佐賀藩家臣多久家文書の近世前期分約七五〇点の「読み直し」と研究資源化のプロジェクトを進めてきた。これは、二〇一七年度から二〇二二年度にかけて科学研究費（基盤研究C）、二〇一七年度～二〇二二年度 課題番号一七K〇三〇九五 代表小宮木代良「近世大名家臣家史料の共同分析」に引き継がれ、その成果は、二〇二二年一月に報告書『多久家文書の「読みなおし」』（多久家文書研究会編、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―）としてまとめられた。以上の経験や人的ネットワークを前提として、多久家文書と密接な関係を持つ佐賀藩家臣坊所鍋島家史料（佐賀県立図書館所蔵）のうちの近世初期の部分を対象とし、史料一点毎の「読み直し」を行うことをめざし、二〇二二年一月に坊所鍋島家文書研究会を結成、そのメンバーが中心となって本共同研究に参加している。また、小宮が代表、及川・石津・伊藤が分担者である科学研究費補助金基盤研究C「近世初期大名発給無年号文書の研究資源化―佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として―」（二〇二三年度～二〇二五年度）とも連動させつつ、プロジェクト全体を完成させる。

（2）研究の成果

今年度は、鍋島勝茂書状一六二点の検討を終えた。これで、坊所鍋島家文書中にあわせて約五〇〇点伝来している鍋島直茂文書および同勝茂文書全体の内の、三九六点を検討したことになる。同時に直茂・勝茂の花押の分析が深まり、多数の無年号文書の年次比定が加速的に進むようになった。特定共同研究としての作業は、本年度で終わることとなるが、引き続き、来年度までの科研費による研究会の継続で、坊所鍋島家文書中の直茂・勝茂発給文書全点を分析し終える見通しである。

【海外史料領域】

研究課題 本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究
研究経費 二六五万円
研究組織

研究代表者 松方冬子

所内共同研究者 岡美穂子 大東敬典

所外共同研究員 大野晃嗣（東北大学） イサベル・田中・ファンダーレ

ン 野澤丈二（早稲田大学） フォステイヌ・ペイセ

レ（翻訳家） 森田由紀（翻訳家） 久礼克季（川村学園

女子大学） 富田暁（岡山大学） 中砂明徳（京都大学）

野澤丈二（早稲田大学） 真下裕之（神戸大学）

研究の概要

（1）課題の概要

本研究では、本所に所蔵される一六～一九世紀の欧文史料が、刊行・未刊行を問わずその史料価値に応じた十分な活用がなされていない現状に鑑み、その翻訳を通じて、ひろく学界に還元し、多角的な利用を可能にすることを目的とする。扱うのは、ポルトガル領インディア、オランダ東インド会社（VOC）という、広域的な組織の史料である。これらの史料群は、当時の世界を見る際に、貴重かつ豊富な情報を提供するが、今まではおもに日本の対外関係という限られた目的のために翻訳され、利用されてきた。本研究により、本所所蔵欧文史料を利用する研究者が増え、実際に利用されている史料の幅が広がるのが期待される。

（2）研究の成果

①オランダ語・フランス語翻訳と中国史の知見を総合することにより、地名や人名等の正確な同定が可能となった。

②昨年度同様、定期的に史料翻訳を進め、オランダ東インド会社がアジアの支配者たちとの契約をどのように認識していたのかという問題に取り組んだ。とくに日本に関係する契約を対象に研究を行い、成果の一部を『東京大学史料編纂所研究紀要』第三五号で発表した。Lopez氏を招いて、スペイン・マニラ政庁旧蔵ジャワイ文書に関する国際研究集会を開催した。

③二〇二五年三月にÉcole Pratique des Hautes Études Section des Sciences Historiques et Philologiques (France) からロウトの年代記の専門家であるDejanirah Couto博士を招聘してセミナーを開催し、アジア史研究におけるポルトガル古典籍の有益性について講演頂いた。このセミナーは対面で実施され、約二〇名の参加者があった。またCouto氏と同じくヨーロッパの史料を用いてインド洋を研究する本所の大東敬典氏がコメントーターを務め、ポルトガル語史料とオランダ語史料の性格の相違や両者の情報を比較・補完することの有益性について論じた。

【複合史料領域】

研究課題 荘園絵図調査方法論の高度化と調査関連情報の学術資源化に関する研究

研究経費 一八〇万円

研究組織

研究代表者 井上聡

所内共同研究者 藤原重雄 黒嶋敏 小瀬玄士 畑山周平 中村覚 海上貴彦

所外共同研究員 海野聡(東京大学) 守田逸人(香川大学) 清水亮(埼玉大学) 高橋傑(慶應義塾普通科) 坂本亮太(和歌山県立博物館) 高田祐一(奈良文化財研究所) 大邑潤三(東京大学) 額田雅裕(関西大学) 田中水萌(神戸大学)

榎原雅治(地震予知総合研究振興会・東京大学名誉教授)
堀本一繁(福岡市博物館)

研究の概要

(1) 課題の概要

史料編纂所では、四〇年以上にわたって古代・中世荘園絵図の調査を実践し、その成果を『日本荘園絵図聚影』(本編・釈文編)として刊行してきた。現在、釈文編が完結するという段階にあって、これまでに果たせなかった絵図原本調査・現地調査等の完遂が目指されている。あわせて従前に収集した膨大な調査情報のうち、『聚影』に未収載の各種情報(調査記録・各種地図・

航空写真ほか)を整理・総括し、今後の研究進展にむけた学術基盤を整備することが求められている。本研究においては、西日本地域を中心に、これまで調査未完であった絵図を対象として、現地状況に精通した共同研究員と共に調査の実践を進め、研究の精緻化・高度化を図ってゆく。また膨大に蓄積された調査関連情報の整理・統合を進め、これらが学界共有の学術資源となるよう整備を行う。情報共有にあたっては、各種デジタル技術を援用しつつ、既存の「史料編纂所蔵荘園絵図模本データベース」や「地理情報蓄積システム」に収載するとともに、様々な機関から発信されている人文地理情報との双方向性を確立することで、分野を超えた諸研究の基盤となるよう意図している。

(2) 研究の成果

調査対象とした「薩摩国日置北郷中分絵図」は、史料編纂所蔵島津家文書のうちにあり、鎌倉時代を代表する荘園絵図の一つとして著名である。鎌倉末期に地頭と領家で土地を分割した様を描いたもので、多くの先行研究が発表されているが、その境界を示す中分線については諸説あつていまだ定説を得ていない。そこで再度検証のため、関連史料の調査とあわせて現地踏査を実践した。まず鹿児島県歴史・美術センター黎明館が収蔵する「薩摩国日置郡吉利郷惣図」(日置市所蔵)を熟覧し、近世前期段階における日置北郷故地の状況を確認したのち、同地の文化財行政に携わる関係者の協力も仰いで、踏査による検証を進めた。あわせて同市吹上歴史民俗資料館が所有する近世土地台帳ほかの史料群について確認調査を実施した。調査にあたっては、共同研究員の知見を仰ぐのみならず、鹿児島大学や東大デジタル空間社会連携研究機構(CSIS)からの参加も得て、歴史学・地理学的な分析にとどまらず、空間科学など文理融合的な視点からの分析も実践することができた。かかる実証成果については、今後史料編纂所から発信する媒体・データベースに反映させるのみならず、CSISによる研究報告・授業実践といったなかでも展開する予定である。

かかる調査データや『日本荘園絵図聚影』編纂過程で集積した諸データについては、「史料編纂所蔵荘園絵図模本DB」および「地理情報システム」に収載しつつあるが、本研究では特に「地理情報システム」を対象に、より

汎用的な利用環境の整備に努めた。「地理情報システム」は、絵図のみならず文書や記録に現れる歴史的地名情報を集約する構造となっているが、当年度、当該システムとSHIPSDB群を結ぶAPIを構築したことで、荘園絵図の関連情報を他DBデータからも活用しうる環境が整った。今後実験環境で試行を重ね、二〇二五年以降に公開環境へと移行することを予定している。

一般共同研究

研究課題 史料編纂所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 渡辺美季（東京大学）

所内共同研究者 黒嶋敏 須田牧子 岡本真

所外共同研究員 荒木和憲（九州大学） 辻大和（横浜国立大学） 劉序楓（台湾・中央研究院） 林慶俊（韓国・東国大学校）

研究の概要

（１）課題の概要

東京大学史料編纂所には、明清時代中国の公文書ならびにその関連文書が複数所蔵されている。それらは中近世東アジアの国際関係を読み解く際の貴重な史料であり、中近世日本における中国公文書の社会的価値を具体的に検討し得る好素材でもある。すでにある程度、基礎的データの作成や国内の類似文書のデータ集成が進められているが、これらの文書を古文書学的に位置付けるためには、明清国内における様式・形態や作成・発給過程についての制度的研究と、実際に発給された同類文書との比較検討が不可欠である。

そこで本研究ではこれらの文書について、二〇一九～二〇二三年度一般共同研究「史料編纂所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究」に引き続き、①形式・作成・発給に関わる中国側の諸規定の調査を進め、②それらの規定と編纂所の所蔵史料とを対照した上で、③二〇二三年度に韓国にて実施した明清中国から朝鮮に発給された同類文書（原本）との比較調査の追加調査と

成果分析を行う。これにより、規定と実態の両面からそれらの文書の古文書学的的位置付けを明らかにし、東アジア地域で共有し得るレベルでの「史料の研究資源化」を目指したい。

（２）研究の成果

報告書掲載の諸史料については、当初予定していたよりも広い視点から多くの論点を掘り下げることができ、調査対象とした明清公文書について原本の様態から発給・受容の状況に迫るとともに、あわせて編纂所蔵文書の史料学的的位置づけを明確にすることができた。これには日本・琉球・朝鮮史を専門とするメンバーに加え、海外の共同研究員である林慶俊氏（韓国・東国大学）、劉序楓氏（台湾・中央研究院）の多大な協力を得たことが奏功し、同時代東アジア諸国の発給文書をより複眼的な視野で見通すことができたことが大きい。

カラー版の鮮明な図版を伴う成果報告書は、これまで韓国に残存する明清公文書を集めた書物が作成されてこなかったこともあって、幸いにも好評を博している。また、国際的な成果発信の一助とすべく英語・中国語・韓国語の要旨を付しており、東京大学学術機関リポジトリからのオンライン公開を通じて、世界中どこからもアクセスできるようになる。これにより本研究成果の国際的な活用が期待される。

研究課題 智感版大般若経の研究資源化を通じた中世後期東国宗教文化の研究

究…慶珊寺本を中心に

研究経費 三三万円

研究組織

研究代表者 梅沢恵（共立女子大学）

所内共同研究者 川本慎自 林遼 堀川康史 山家浩樹

所外共同研究員 近藤祐介（鶴見大学） 櫻井唯（神奈川県立金沢文庫）

白川宗源（広福寺） 西尾知己（関東学院大学） 貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫） 三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

(1) 課題の概要

横浜市金沢区慶珊寺が所蔵する大般若経全六〇〇巻は混成経で、正中二年(一二三二)の安達貞泰の奥書を持つ一群と、観応三年(一二三二)、足利尊氏の発願により、勧進僧智感とその後継者が刊行した一群(智感版大般若経)とが大きな割合を占めている。

後者の智感版大般若経は関東各地に同版経が残存しており、助成した鎌倉府関係者の名前が多数刻まれていることから、中世後期東国の宗教・文化・政治史研究上、注目される史料である。しかし大部の史料であることから、智感版大般若経は十分な研究資源化がなされているとはいいがたく、慶珊寺本についても一九六一年の調査概報があるにとどまっている。

本共同研究では、二〇二一～二〇二二年度にかけて東京大学史料編纂所と共同で実施した全点の撮影を踏まえ、調査・目録の作成と画像の全点公開を通じて研究資源化を図る。また、他機関・他寺院が所蔵する智感版大般若経や関連史料の調査・撮影を実施し、慶珊寺所蔵大般若経を起点に当該東国の宗教文化を検討する。

(2) 研究の成果

前年度に引き続き、慶珊寺本『大般若経』の調書作成を進めるとともに、版本の種別の確定作業、他本との比較検討を行った。寿福寺(川崎市多摩区)の『大般若経』のなかに慶珊寺本と同一の奥書が見出されたことは、慶珊寺本の伝来を考えるうえで重要な発見となった。全帖の調書作成は未完了であるので、今後も共同研究メンバーを中心に調査を継続し、目録・解説・研究編からなる報告書を刊行する予定である。

他本の比較検討の一環としては、常楽寺美術館(長野県上田市)が所蔵する安房大山寺旧蔵の『智感版大般若経』の補充調査を実施し、昨年度作成した全帖の目録データのブラッシュアップ、調査用写真の撮影を行った。調査の成果は、前述の報告書に合わせて掲載予定である。

本共同研究の成果お披露目展として、神奈川県立金沢文庫において特別展『慶珊寺と富岡八幡宮の名宝』『大般若経』が語る中世東国史を開催した(二〇二五年二月七日～三月二三日、観覧者数四六・一三名(一日平均二二四・六名))。共同研究メンバーは図録の執筆、講演・講座を担当した。

研究課題 泉涌寺所蔵の近世後期史料に関する基礎的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 佐藤雄介(学習院大学)

所内共同研究者 山口和夫 林晃弘

所外共同研究員 西谷功(花園大学) 佐藤一希(日本学術振興会特別研究員(PD)) 桑原優子(泉涌寺) 高山結衣(泉涌寺) 池上有昭(今熊野観音寺)

研究の概要

(1) 課題の概要

近世の泉涌寺は歴代天皇及び皇子女・女院の葬送を担い、寺内に陵所も有した菩提所として知られる。

幾度の火災を経ながらも、現在確認されている文書史料はおよそ一、七〇〇件、さらには未整理のものもあり、その内容は法会関係、公武との折衝関係、金融関係、その他多岐にわたる。中でも近世後期は数的多数を占めるのみならず、泉涌寺に関する出来事を包括的に記した『日並記』がまとまって伝存し、個々の史料を『日並記』と結びつけることで、天皇・皇子女・女院の葬送および供養、それらをめぐる公武関係、泉涌寺における国家安寧を祈る儀式(修正会など)、経済面や組織としての寺院運営の実態などを多面的に復元できると考えられる。

しかしながら『泉涌寺史』(法蔵館、一九八四年)をはじめ同寺所蔵史料を公刊したものに当該期の史料はほとんど掲載されておらず、その存在すら周知されていない。よって本共同研究では、泉涌寺所蔵の未紹介史料の調査・研究を行い、デジタル撮影及び目録の整備を進めることで今後の活用の基礎とし、広く研究に寄与したい。撮影画像は史料編纂所の図書室で公開し、泉涌寺では宝物館での展示を通して広く成果を発信する予定である。

(2) 研究の成果

本共同研究では、泉涌寺にて同寺所蔵史料の調査・撮影を実施するとともに、東京大学史料編纂所等の史料所蔵機関にて関連史料の調査を行った。

泉涌寺における調査では、前年度に引きつづき近世後期の『日並記』の撮

影を行った。今年度は慶応元年（三年分の八冊（F二五〇―六八）、『享保・文化他諸事書留』（F二五〇―六九）、享保十一年『宝物国師尊像御照覧之日記』（F三一九）を撮影した（計二、三〇六コマ）。これにより当初の目標であった近世分の『日並記』のデジタル撮影を完了することができた。

史料編纂所では、貴重書のうち『九条尚忠関白在職中日記』、『一乗院門跡入道真敬親王日記』、『実種公記』（徳大寺家本）等について共同で調査をおこなった。また、「泉山陵仙図」（維新史料引継本―一―一五二三）など、泉涌寺に関係する史料の把握に努めた。その他、他機関所蔵の公家日記等の複製を利用した。

以上の史料調査を踏まえ、二〇二五年三月一八日にオンラインにて共同研究内部での成果報告会を行った。佐藤雄介が近世後期の泉涌寺の経済活動について、佐藤一希が天皇の葬送儀礼について、林晃弘が寺宝の伝来について報告し、意見交換を行った。これらの報告内容を含む研究成果は、二〇二六年刊行の論集に収録される予定である。また、泉涌寺宝物館心照殿の展示にも共同研究による調査・研究の成果を組み込んだ。

研究課題 近江国惣村文書を対象とした横断的原本研究の試み

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 宇佐見隆之（滋賀大学）

所内共同研究者 末柄豊 井上聡 高島晶彦 渋谷綾子

所外共同研究員 青柳周一（滋賀大学） 水野章二（滋賀県立大学名誉教授）

大河内勇介（福井県立歴史博物館） 松井直人（京都大学）

研究の概要

（１）課題の概要

滋賀大学経済学部附属史料館（以下、史料館）寄託菅浦文書について、申請者等は再校訂にもとづく史料集『菅浦文書集成（仮）』の刊行作業を進めている。その過程で、真偽判定を含めたモノとしての検討の必要性を痛感し、二〇二二年までの二年間、料紙の紙質や使用法、筆跡・花押を検討する共同研究を実施した。その結果、偽作を疑われる文書の真正さ、あるいは近世の

偽作と指摘される文書が中世段階の作成と考えて問題のないことを明確にするなど、大きな成果をあげた。一方、在地支配のために領主が発給した文書について、紙質や料紙の使用法などが年代・領主の別といかなる相関を示すのか、という課題が浮上してきた。

惣村文書に関する原本研究の蓄積は非常に薄く、如上の課題の解明には、実物に就いた他の文書群との比較検討が必須である。そこで二〇二三年度は、史料館保管大嶋奥津嶋神社文書を対象に菅浦文書との比較検討に着手した。二〇二四年度には、史料館保管今堀日吉神社文書などに対象を広げ、近江の惣村文書を横断的に、文書類型に即しつつ、これまで行ってきた原本研究の手法を用いた総合的な分析を進めたい。これにより、惣村文書の史料学につなげることを目指している。

（２）研究の成果

調査目的の明確化および対象史料の選定などの事前調整をふまえたのち、一月に滋賀大学経済学部附属史料館において、「菅浦文書」「今堀日吉神社文書」原本の調査を実施した。

「菅浦文書」については、これまで調査対象に含めることができなかった織豊期史料に重点を置いて、顕微鏡など専用機器を用いた料紙分析および筆跡検討を行った。同文書中には、織豊期に発令された諸法令について多くの写が遺されているが、これらの作成年代など不明確なものが多いことから、集中して分析を加えたところである。結果として、依然として不明なものが残るものの、少なくとも近世初頭に遡るものが一定数あることを確認することができた。また前年度からの継続課題として、年貢・公事等の請取状について発給領主ごとの特徴・傾向析出のための調査を推進した。当年度は特に竹生嶋花王坊と浅井井伴の請取状を取り上げて検討を行い、その特徴を把握することができた。

「今堀日吉神社文書」については、「菅浦文書」と同じ近江国内の惣村文書であることから、同文書との比較検討という観点から史料を選定して調査を進めた。具体的には、鎌倉・南北朝に遡る時期の文書、惣が定めた置文、延暦寺発給文書を主題として、比較分析を行ったところである。結果、共通する要素が多分にあるものの、傾向に差のあるものも検出され、地域差などを

検討すべき点を確認した。

なお以上の成果は、現在刊行準備を進めている『菅浦文書集成』（仮題、吉川弘文館より上下巻で刊行予定）に適宜反映させる予定である。

研究課題 紅葉山文庫旧蔵「国書」の復元的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 木土博成（九州大学）

所内共同研究者 岡本真

所外共同研究員 木村可奈子（東北大学） 古川祐貴（弘前大学）

研究の概要

（１）課題の概要

「紅葉山文庫旧蔵「国書」」は、かつて江戸幕府の紅葉山文庫にあった諸外国からの「国書」群を指し、一一〇点ほどからなる。そのうち、大部分を占める朝鮮、琉球のものに限れば、現在、東京国立博物館、宮内庁書陵部、外務省外交史料館、京都大学総合博物館、藤井斉成会有鄰館、九州国立博物館において所蔵が確認でき、近代に入ってコレクションが複数機関に散らばったことがうかがえる。

東京大学史料編纂所には、こうした「紅葉山文庫旧蔵「国書」」と密接に関わる写本や写真資料など、豊富な研究資源が蓄積されている。本研究では、こうした編纂所の持つ研究資源と、上記の国書原本とを複合的に考察し、近世東アジアにおける文書を介した外交の特質に迫る。

具体的には、各機関に散らばる史料の原本調査、高精細カメラによる撮影を行うとともに、「紅葉山文庫旧蔵国書」のかつてのまとまりを一覧化する。その上で、そこに何が含まれ、何が含まれないかを整理し、「紅葉山文庫旧蔵国書」の伝存状態の特質を明らかにする。

本年度は、前年度に予算・時間の都合で十分に調査できなかった藤井斉成会有鄰館、および九州国立博物館の「国書」を重点的に調査する。

（２）研究の成果

藤井斉成会有鄰館所蔵史料は、これまで撮影がほとんど許可されておらず、

研究者が閲覧することさえむずかしかったが、昨年度に引き続き、本研究共同研究者の粘り強い交渉により、明宣徳帝勅諭一通、徳川綱吉国書控一通、同別幅控一通、徳川徳松別幅控一通、徳川家重別幅控一通、徳川家治国書控一通、同別幅控一通、朝鮮国王李焞国書一通、同別幅一通、朝鮮国礼曹参議李省身書契二通、同別幅一通、朝鮮東萊府使鄭良弼書契一通、および上記諸文書の付属品（包紙・箱など）一式を撮影することができた。また、九州国立博物館が管理する琉球関係史料（天和三年癸亥閏五月十三日中山王尚貞書状ほか、計二七点）についても、同様に撮影することができた。これらの撮影データをEICAT Plusで公開することについて、所蔵者の内諾を得ている。すでにデジタル公開されている京都大学総合博物館所蔵の国書もあわせて、こうしたデータが東京大学史料編纂所で確認できるようになったことで、これまで個別に知られていた史料群を通覧し、たとえばどれがどれの写しであるかといった、文書同士の関連性が見出せ、紅葉山文庫旧蔵「国書」群を構造的に把握することが可能となった。

とりわけ、撮影にあたっては、単に撮影するだけでなく、異なる専門分野の者が熟覧し、たとえば、料紙の確認や、作成過程の物証となる針孔の確認を一部行い、国書の作成の背景にある幕府の外交姿勢などについて考察するための足がかりを構築した。

研究課題 熊本藩士上田久兵衛の総合的研究と関係史料の学術資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 今村直樹（熊本大学）

所内共同研究者 箱石大

所外共同研究員 白石烈（宮内庁）

研究の概要

（１）課題の概要

本研究は、幕末維新期における熊本藩士上田久兵衛の諸活動を総合的に研究するとともに、東京大学史料編纂所所蔵「上田久兵衛関係文書」を中心とする関係史料の研究資源化を図るものである。

当該文書に関しては、上田久兵衛が熊本藩京都留守居を務めていた幕末期の一部史料が活字化されており、政治史研究で注目されている(宮地正人編・解説『幕末京都の政局と朝廷』名著刊行会、二〇〇二年)。しかし、史料群の全体像は不明なままである。また、上田の活躍は幕末期の京都にとどまらず、明治十年の西南戦争では中立的立場の鎮撫隊を組織し、戦時下の地域社会の治安維持に努めるなど、維新期の熊本でも重要な足跡を残している。

そのため本研究では、上田久兵衛の史料群の全体像を解明し、ひろく公開するために、当該文書の目録作成やデジタル撮影を推進する。さらに、幕末期の京都留守居および維新期の熊本時代に焦点をあてた政治社会史研究を行い、その成果を学界や社会に発信する。

(2) 研究の成果

目録の作成…東京大学史料編纂所所蔵「上田久兵衛関係文書」の目録作成を共同で進めた結果、数量は書状や日記を中心に全九三九点となった。これにより、史料群の全体像を把握し、現秩序の形成過程を解明する手掛かりも得ることができた。三月末には、目録データを史料編纂所図書部に引き渡し、「所蔵史料目録データベース(HiCAT)」からの公開に向けた準備作業を開始した。

史料の撮影…「上田久兵衛関係文書」のうち、久兵衛の自筆日記類三六点について、デジタル撮影が完了した。

関係史料の調査・分析…上田久兵衛の京都留守居時代における活動や西南戦争時の動向、国許における政治勢力との関係、廃藩後の旧藩主細川家との関係などを明らかにし、成果の一端を久兵衛の地元である熊本で開催した講演会で発表した。

講演会の開催…二〇二五年三月八日、本一般共同研究と、熊本大学水青文庫研究センター・東京大学史料編纂所の主催により、講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」を熊本大学にて開催し、箱石「上田久兵衛関係文書と幕末維新史研究」、白石「肥後藩京都留守居上田久兵衛の国事周旋活動」の二回、日本を立て直しようすべし、今村「明治維新後の上田休庵藩置県・細川家・西南戦争」の三講演を行なった。参加者は一三六人(現地参加者五八人、オンライン参加者七八人)であった。

研究課題 「中井家文書」を用いた大工組織の業務復元に関する基礎的研究
研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 角田真弓(東京大学)

所内共同研究者 新井重行

所外共同研究員 藤井恵介(東京大学名誉教授) 海野聡(東京大学)

登谷伸宏(京都工芸繊維大学) 岸泰子(京都府立大学)

野村玄(大阪大学) 佐藤一希(京都大学)

研究の概要

(1) 課題の概要

主たる研究対象とする「中井家文書」(宮内庁書陵部所蔵)は、江戸時代の京都大工頭中井家で作成された史料群の一部である。史料編纂所においては、宮内庁の協力を得て、帳簿類のデジタル化およびHiCAT Plusを利用した画像公開が進められている。

申請者らは、建築史的見地から、帳簿類の読解・翻刻を進めてきており、帳簿に記された部材名や寸法などから建造物の構造を復元する手法によって成果を着実に蓄積している。これについてはさらに検討を継続するが、新たな課題として、江戸時代後期における大工組織の研究が極めて少なく、不明な点が多いことが明らかとなった。これは史料に乏しいことにも因るが、幸いなことに「中井家文書」のうちに、御所の造営に関する業務日誌とおぼしいものがあり、これを検討することによって、大工家における日々の文書処理業務の一端が判明することが見込まれる。これは従来の研究では検討のなされていない分野であることから、大工組織とその上部機関である朝廷・幕府との関わりについての基礎史料を分析し、研究資源化することを課題とする。

(2) 研究の成果

本研究は「中井家文書」を主たる対象とし、日本史分野、建築史分野の研究者、大学院生が共同で精読する研究会を重ね、建築技術を解明する手法を提示している。業務記録や帳簿類の読解には歴史学だけでなく、建築史的視点からの専門知識が必須であり、本共同研究によって基礎的な研究資源を蓄

積することができている。また同時に資料調査、建築調査等も行ってきたが、これらの成果は、国際研究集会『御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地（5）』（共催）や、シンポジウム「京都大工頭中井家と江戸幕府・朝廷」（共催）における報告として結実している。後者は共同研究者である岸氏を中心として開催されたもので、日本史と建築史の分野から多面的な検討を行うことができた。今後は、蓄積した研究手法や知見を応用することとできる展開を目指したいと考えている。

また、「中井家文書」に含まれる数点の業務日誌については、幕府方によって作成された記録と考えられ、京都大学附属図書館に所蔵される「中井家絵図・書類」のうちに関係する書状類の写しがあることも確認できた。

研究課題 古代・中世法制史料の英訳とグロッサリー研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 David Eason（関西外国語大学）

所内共同研究者 遠藤基郎 小塩慶 菊地大樹 西田友広 堀川康史

所外共同研究者 Christoffer Bojbjerg（カルフォルニア州立大学サンタバー

バラ校） Joan Piggott（南カリフォルニア大学） Matthieu

Felt（フロリダ大学） Nadia Kanagawa（ファーマン大学）

Polina Barducci（立教大学、九月よりレント大学） 黄霄

龍（東京大学） 佐藤雄基（立教大学） 山口えり（広島市

立大学）

研究の概要

（1）課題の概要

日本史研究の国際化、とりわけ外国語による発信は喫緊の課題である。東京大学史料編纂所では、過去二回にわたって日本史料の翻訳に関する共同研究を実施し、その成果を日本史用語翻訳グロッサリー・データベース等から公開することにより、外国語による日本史研究に貢献してきた。本データベースは、外国語で研究成果を発信しようとする際にまず参照すべき研究支援ツールとして、国内外で高い評価を得ている。本共同研究では、①鎌倉幕

府法関係史料を扱った過去の共同研究の蓄積を踏まえ、新たに同時期の公家法（『裁判至要抄』）の英訳研究に取り組みとともに、②既存の著作物から史料用語・研究概念の英訳を抽出し、グロッサリーDBに搭載する。①・②を通じて、外国語による日本史研究のさらなる基盤整備を目指す。

（2）研究の成果

今年度は二回の翻訳ワークショップを開催し、『裁判至要抄』全条文の英訳を一通り完成させた。翻訳作業は、共同研究メンバーが現代日本語・英訳を分担し、ワークショップ当日に全員で議論する形式を採用した。この共同作業を通じて、より精度の高い日本語訳・英訳を作ることができたと考えている。

また外国語訳の収集・入力作業では、前述の著作物などから英語約五、〇〇〇件、フランス語八七〇件のデータを抽出・入力した。著作物の選定や許諾の取得にあたっては、共同研究員の知見・人的ネットワークを活用した。

研究課題 東日本の中近世文書の形態・料紙に関する科学研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 柳原敏昭（東北大学）

所内共同研究者 金子拓 尾上陽介 山田太造 小瀬玄士 渋谷綾子 高

島晶彦

所外共同研究者

天野真志（国立歴史民俗博物館） 野村朋弘（京都芸術大学） 高橋修（茨城大学） 阿部哲人（米沢市上杉博物館） 高橋和孝（奥州市教育委員会） 泉田邦彦（石巻市博物館） 名和知彦（公益財団法人陽明文庫）

研究の概要

（1）課題の概要

東日本、特に東北の中近世文書は、従来、料紙の科学情報に関する詳細な分析がほとんど行われておらず、関東およびその以西地方の文書料紙との相違を比較的に検討する必要がある。本研究は、東日本の中近世文書の形態と料紙について科学的な調査を実施し、地域的・時代的特性や歴史の変遷に関

する検討を行う。

研究では、複数種類のデジタルマイクロスコープを用いて、東北大学保管「結城白河家文書」、上杉博物館所蔵「上杉家文書」、茂木町教育委員会所蔵「茂木文書」等を主な対象とし、料紙の形態・構造を非破壊的に調査する。これまでの調査成果において、切紙（堅切紙）の形態や、繊維材料の三桎利用など、東国における文書料紙の特徴が確認されており、西日本とは料紙の製法や使い方が異なる。これらの特質を科学的に検証するため、陽明文庫や松尾大社の所蔵史料、調査データの蓄積のある史料編纂所所蔵「島津家文書」など西日本の文書料紙との比較分析を行い、東日本の文書の地域的・時代的特性について検討を行う。

（2）研究の成果

今年度は、AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業や科研費等と連携し、史料編纂所所蔵「島津家文書」をはじめ、東北大学保管「結城白河家文書」、上杉博物館所蔵「上杉家文書」、奥州市教育委員会所蔵「留守家文書」、茨城県立歴史館所蔵関沢家紙見本等の調査を実施した。「結城白河家文書」・「留守家文書」・「上杉家文書」の調査では、切紙（堅切紙）の形態や繊維材料の三桎利用、楮紙の史料において素材繊維が細いなどの結果を得た。これは、科研費等で調査してきている西日本の料紙（松尾大社所蔵史料や陽明文庫所蔵史料、史料編纂所所蔵「島津家文書」等）の製法や使い方と異なっており、東北の文書料紙の特徴と考えられる。関沢家紙見本の調査では、見本紙が米粉入り楮紙であることが判明したため、西ノ内紙の製法について改めて検討を行う必要がある。

以上の成果をふまえ、次年度は分析結果の再検証と史料調査の拡充を行うとともに、西日本の史料との比較分析を進める予定である。

研究課題 中世神道資料を中心とした高野山子院伝来資料の研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 藤本孝一（龍谷大学）

所内共同研究者 渡邊正男 高橋慎一朗

所外共同研究員 伊藤聡（茨城大学） 岡田莊司（國學院大學名誉教授）

桐田貴史（石水博物館） 小林雄一（京都先端科学大学）

坂口太郎（高野山大学） 大東敬明（國學院大學） 高橋

悠介（慶應義塾大学） 土居夏樹（高野山大学） 花田卓

司（帝塚山大学） 船田淳一（金城学院大学） 山本みな

み（鎌倉歴史文化交流館）

研究の概要

（1）課題の概要

本研究では、高野山西南院に伝来した中世神道資料（神道印信・神道書）について、歴史学・神道学・思想史・密教学・国語学などの多分野にまたがった共同調査・研究を行なう。

西南院の中世神道資料は、昭和十三年（一九三八）の段階で、西岡虎之助・桃裕行両氏による探訪がなされ、密教聖教と異なる独自の歴史的価値がすでに認識されていた。しかし、この成果は、戦後の中世神道研究に継承されておらず、本格的な調査・研究が必要である。

そこで、本研究では、御流神道の印信について、現段階の学的水準に立脚した目録を調製し、従来未解明であった中世後期の神道灌頂について究明する。また、両部神道や山王神道に関係する重要な神道書の古写本を選び、厳密な校訂を加えて本文を提供する。あわせて、西南院の神道資料と密接な関係を持つ、金剛三昧院の古文書・聖教奥書にも検討を加える。

以上の作業を通して、高野山の子院に伝来した多彩な資料の研究資源化につとめたい。

（2）研究の成果

西南院では、室町期の宥長・良任・秀雅にかかわる神道印信の目録化に取り組み、翻刻も進めた。とくに、西南院院主の仙海に関係する永正年間（一五〇四～一五二二）の神道印信は、御流神道の古い段階の内容を伝えるもので、神道書に集成される以前の個別の切紙の形態を通して、「八十通印信」（御流神道の印信類聚）の原初形態をうかがうことができる見通しが得られた。

また、西南院の神道書を目録化する中で、近世中期の雲伝神道書が確認できた。これらは、近世高野山における神道思想の展開を考察する上で、貴重

な手がかりとなる。さらに、神名帳を素材として、高野山麓の村々の「おこない」(村落共同体の年頭行事)についても検討した。

さらに、前年度に引き続き『重要文化財 西南院文書』の翻刻に取り組み、第七巻の釈文を公表するほか、ヲコト点の記入された訓点資料約六〇点を調査した。

金剛三昧院では、神道書を含めた同院の中核的聖教を書写・整理した、室町時代の院主良恩の院家議状を発見できた。また、古辞書『類聚名義抄』を同院経蔵に納めた寄進状を検討した。以前より、金剛三昧院所蔵の典籍に『名義抄』からの書き入れがあることが指摘されており、本寄進状は金剛三昧院と『類聚名義抄』とを結びつける史料として、国語学的に貴重である。

このように、本共同研究に神道学・思想史・密教学・国語学の研究者も参加したことで、神道印信・神道書・訓点資料といった特殊な性格を持つ資料を研究資源化する道筋が付けられた。

研究課題 吉野地域中世史料の調査と研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 坂本亮太(和歌山県立博物館)

所内共同研究者 海上貴彦 堀川康史 高島晶彦

所外共同研究員

榎原雅治(地震予知総合研究振興会・東京大学名誉教授)
服部光真(元興寺文化財研究所) 松田度(大淀町教育

委員会) 三宅徹誠(元興寺文化財研究所)

研究の概要

(1) 課題の概要

大和国吉野郡に所在する吉野山(金峯山寺)は、山岳信仰・修験道の聖地であり、戦前の南朝顕彰に関わる史料調査以来、重厚な成果が蓄積され、政治史・宗教史・寺院史研究では全国的にみても重要なフィールドといえる。

この地域では中世史料が豊富に伝来していることが早くから認識されていたが、なお未翻刻・未公開の史料も少なからずあり、研究資源化が不十分な状況にある。関連する文書が寺院・個人など分散的に所在していることも背

景にあつてか、一九八〇年代の調査以来、史料原本が確認できていない例もあり、現況確認と記録化は喫緊の課題となっている。

本共同研究では、中世吉野地域を検討するうえで重要な吉野山の諸寺や個人の家に伝来してきた文書群、具体的には金峯山寺、東南院、如意輪寺、平木家で未採訪の中世文書の調査・撮影を行い、その成果を史料編纂所図書室での画像公開、紀要や学術雑誌等での史料翻刻等(出版)によって研究資源化を目指すものである。また、吉野山の櫻本坊所蔵『大般若経』について、年代比定のために料紙分析を行い、さらなる活用を図れるよう、史料としての性格をより明確化・充実化させることも目的とする。

(2) 研究の成果

櫻本坊所蔵『大般若経』を軸に、中世吉野山関連史料の調査・撮影を進めた。

櫻本坊所蔵『大般若経』調査は、二〇二三度までに写経・版経合わせて全八二〇帖の調書作成(法量・識語等の記録)を一通り完了したが、複雑な構成の混合経であり、識語の無い帖については年代や性格の判断を保留せざるをえないところがあった。今年度の調査では、紀年銘の無い帖の年次比定・グループ化を課題として、新たに料紙分析に着手し、同時に筆跡分析等の見直しを行った。料紙分析の結果、平安後期に遡る一群の存在を確認し、さらに鎌倉期、室町期の写経についてもサンプル的に料紙についてのデータを得た。こうした料紙分析の成果を踏まえ、識語・筆跡と合わせた検討によって紀年銘のない帖をグループ化していく目途を立てることができた。

関連して、東京大学史料編纂所所蔵の『古写経断片雑』(貴四四一四)中に、櫻本坊伝来の一日頓写『大般若経』の僚卷であったと考えられる写経断簡の存在が複数判明した。前年度に見出された久安三年(一一四七)写『大般若経』(貴三二二四)と同じく小杉楳邨旧蔵であり、史料群伝来過程の解明のヒントとなることが考えられる。また、櫻本坊伝来の豊臣秀頼寄進『大般若経』の僚卷と考えられる版経(卷一三八)がヤフーオークションで出品されているのを発見し、史料編纂所として購入した。二〇一八・二〇一九年度一般共同研究「プリンストン大学図書館所蔵吉野山修験関係史料の保存・利用のための研究」におけるプリンストン大学所蔵「桜本坊文書」の調査で確

認められた『大般若経』僚卷の位置付けも含めて、櫻本坊に伝来していた『大般若経』の全体像が明らかとなりつつある。

櫻本坊所蔵『大般若経』以外にも、同寺、金峯山寺、東南院、如意輪寺、平木家に所蔵される中世・近世初頭の古文書・古記録類についても調査・撮影を行った。

櫻本坊所蔵文書の調査は、宝聚堂（宝物殿）に収蔵される古文書の調査を行った。これらは元興寺文化財研究所や首藤善樹氏の過去の調査で把握されていたものではあるが、内容の精査の結果、大給松平乗寿関係の中世末期・近世初頭の文書写しなどが確認された。一方で、過去の調査で把握されていた一部史料については所在確認が必要なものもあり、また別の一群が吉野歴史民俗資料館に寄託されていることも判明したため、プリンスストン大学所蔵文書の位置付けとの関連において櫻本坊文書の全体像を把握することはなお課題として残している。

金峯山寺所蔵文書は昨年度に引き続き調査・撮影を行い、中世・近世初頭の年紀が登場する近世文書七点を対象とした。その他、東南院所蔵文書は正平二年（一三四七）『金峯山秘密伝』など八点、如意輪寺文書は正平十四年（一三五九）後村上天皇綸旨など五点、平木家文書は応永九年（一四〇二）道仙等山地壳渡状など一一点の調査・撮影を行った。これにより、中世吉野山の一山組織を構成した諸寺・諸院・神職・地下衆など様々な立場の史料に基づく複眼的な検討が可能となったほか、吉野山の中世史に関わる基本史料の再調査・画像公開により、地域史研究のためのいっそうの基盤整備を進めることができている。

研究課題 陽明文庫所蔵「一般文書目録」史料の調査・研究

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者

名和知彦（公益財団法人陽明文庫）

所内共同研究者

尾上陽介 林晃弘 遠藤珠紀

所外共同研究員

藤井讓治（石川県立歴史博物館・京都大学名誉教授）

研究の概要

（１）課題の概要

摂関家の一つ近衛家の文庫である陽明文庫には、古代以来近代に至るまで約一〇万点に及ぶ膨大な史料が伝来しており、これまで歴史学・国文学をはじめ様々な研究分野で参照されている。史料編纂所との関係では、古くから調査・撮影が行われており、写真帳などの複本、近年では大型科研の成果によるデジタルデータ公開がなされている。これによって新たに価値が見いだされた史料もある。しかし所蔵史料の規模が大きいため、全貌が明らかになっていない史料がまだまだ多数存在する。そこで本研究課題では、陽明文庫所蔵史料のさらなる研究資源化を進めていきたい。特に、これまで充分には調査がされていない「一般文書目録」掲載史料の中世から近世の歴代当主の発給文書、特に「家門」「仏教」「神祇」に含まれる文書に注目し、政治的活動のみならず、文化的側面、地方や寺社との関わりなども明らかにしていきたい。これらの調査成果は、日本史のみならず国文学・美術史等の研究者にも広く研究資源として利用されると期待される。

（２）研究の成果

本年度は八月・十二月・一月の計四回、公益財団法人陽明文庫において史料調査を実施した。陽明文庫には多数の史料が所蔵されるが、調査では、主に一般文書目録「家門」「仏教」に記される史料を対象とした。この区分の史料は多数に上り、また他の区分に関連史料が見られることもあるので、引き続き悉皆調査を行う予定である。七月には史料編纂所において、関係史料の調査および今後の研究課題遂行のための意見交換を行った。

本研究課題での調査により、所蔵史料の研究による豊臣期政治史の深化、歴代当主の日記に関する発見など、一定の成果を収めた。これは共同研究として、所蔵者である陽明文庫のご教示を得つつ、専門を異にする複数名で検討したことによって得られたものである。今後、研究資源として広く利用可能となるよう紹介していきたい。

成果の一部は、藤井讓治「所司代」石田三成・増田長盛と前田玄以』『東京大学史料編纂所研究紀要』三五、同「天正二十年五月十八日山中長俊書状」『古文書研究』九八、尾上陽介「近衛篤磨日記」『陽明文庫講座図録』六、遠藤珠紀「羽柴秀俊の小早川入嗣について」『古文書研究』九八、同「新

出近衛信尹「三藐院記」の紹介」「日本歴史」九二三、同「近衛信尹書状案」加藤清正の病氣見舞」「陽明文庫講座図録」六などで公表した。今後も検討、成果の公表を進めていきたい。

研究課題 幕末外交研究の高度化と関連史料の資源化および展示公開

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 福岡万里子（国立歴史民俗博物館）

所内共同研究者 小野将 立石了 水上たかね

所外共同研究員 吉崎雅規（横浜開港資料館）

研究の概要

（１）課題の概要

幕末期の幕府外交について、東京大学史料編纂所（東大史料）所蔵の維新関係貴重史料群を中軸として、横浜開港資料館（横開）や国立歴史民俗博物館（歴博）など他機関に所蔵・寄託される幕末外交関係史料とも比較照合させつつ、幕末期の外交機構と幕府遣外使節団の実態解明および関連史料の研究資源化を実施する。本研究は横開で準備中の特別展「外国奉行・神奈川奉行」、歴博で実施中の「外交と日本コレクション」プロジェクト、東大史料維新史料室で推進する幕末外国関係文書編纂事業とも密接に関連している。三機関が連携して幕末外交関係史料の資源化と研究成果の展示公開を実施することによって、幕末外交研究の深化・高度化を図るとともに、一般向けへの成果普及をおこないたい。

（２）研究の成果

米欧諸国に持ちわたられた幕府の実際の贈答品の調査を中心に進めている歴博「外交と日本コレクション」プロジェクトの基盤となる調査として、外務省引継書類中、西洋条約諸国との贈答品の準備や授受に関する史料の調査を進めた。具体的には、昨年度までに撮影調査を進めた、万延元年遣米使節団と文久元年竹内遣欧使節団の「並行御用留」「英仏御用留」の該当冊等）に加えて、今年度は、竹内使節団の未調査史料及び文治元年池田鎖港使節団の関係史料（「池田ほか仏国行御用留」等）、そして幕府と諸外国の

贈答品授受関係史料（「物品贈答雑件」各国之部）等に調査範囲を広げた。本調査に当たっては小野・立石がサポートし、検討を進めることで、一連の重要史料についての知見が増大した。

その結果、池田使節団は、同使節団としての各国宛て贈答品の他、竹内使節団時の厚遇に謝する各国宛て贈答品を準備しており、横浜鎖港交渉の中断により前者の大部分は贈られずじまいになった一方、後者は各国に贈られたこと、前者のうち英国宛てのものがエジプト国主宛て贈答品に流用されたこと等、一連の新事実が明らかになった。

また「物品贈答雑件蘭国之部」の調査からは、一八六七年にオランダ国王から將軍へ、オランダ国王の肖像画や各種の地図・地理書・学術書、ガラス製品等から成る豪華な贈答品が贈られていることが分かった。幕末日蘭関係史の研究では管見の限り知られていない事実関係であり、幕府遣外使節の贈答品との関係の有無を含め、前後関係の調査が今後待たれる。

歴博「外交と日本コレクション」プロジェクトでは二〇二四年度、ポルトガルでの竹内・池田使節団贈答品の調査、米国スミソニアン研究機構・ホワイトハウスコレクションでのベリール遠征時の幕府贈答品調査を実施した。二〇二五年度に各種史料調査の成果にもとづくシンポジウムを開催予定で、本研究に関連して、幕末の贈答品外交に関する知見の深化が期待される。

従来外国方・神奈川奉行に関連する史料群がどの程度存在するのか、という点については総覧がなされていなかったが、今回の共同研究により関連史料群の所在とその内容について全体的な把握が進行した。史料群ごとの概説は吉崎雅規「外国方と神奈川奉行所―その研究と史料」でおこない、代表的な個別史料は「外国奉行と神奈川奉行」に掲載することにより、関連史料資源化の一助とした。

外国方・神奈川奉行というふたつの組織の実態解明は遅れていたが、①東大史料の外務省引継書類に含まれる外国方の「本庁」の史料、②歴博の柴田家文書に含まれる外国奉行（個人）の史料、③横開その他機関が所蔵する外国方属僚、関連部局（別手組等）、神奈川奉行属僚の記録、という性格の異なる史料群を総合的に検討することによって、組織の全体像が把握できるようになった。

外国方・神奈川奉行の共同研究の成果を開港の特別展で公開し、七、九五五名の観覧を得た。これにより最新の研究成果を、専門の研究者のみならず一般にひろく普及できたことは特筆すべき成果と言えよう。

研究課題 対馬の外交僧による日朝通交システム関係文書の基礎研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 顧明源（九州大学）

所内共同研究者 川本慎自 須田牧子 岡本真

所外共同研究員 伊藤幸司（九州大学） 柳原敏昭（東北大学） 程永超（東北大学） 山口華代（長崎県対馬歴史研究センター）

研究の概要

（1）課題の概要

「西山寺文書」（対馬西山寺所蔵）および「森潤三郎氏旧蔵史料」（東京大学史料編纂所・東北大学附属図書館所蔵）の調査を行い、近世対馬の外交実務文書の構造を検討する。

近世の日朝関係は二元的外交（二重構造）とされ、外交権は江戸幕府が掌握し、日常的な外交の実務は対馬藩に任されていた。外交実務を担当する外交僧については、近年の研究進展により、周知の以酹庵輪番制のみならず、対馬藩の外交僧系統の存在も判明している。

・公儀を代表する外交僧系統…（幕府の寺社奉行―金地院―）五山碩学―以酹庵輪番僧

・対馬藩の外交僧系統…（藩の寺社奉行―西山寺―清書役僧・東向寺僧

この二つの外交僧系統の運営実態や相互関係を説明することで、対外関係史のみならず、幕藩関係史・近世仏教史にも寄与できると思われる。二〇二三年度共同研究では、対馬藩の外交機構であった西山寺に収蔵された文書（以下「西」）をめぐって、史料調査を行った。進めるなかで、周知されていない「森潤三郎氏旧蔵史料」（以下「森」）の存在を知った。「森」には以酹庵にかかる未翻刻史料があり、近世以酹庵の解明のみならず、両系統外交僧の比較研究も可能になる。従って、二〇二四年度、「西」に加えて、「森」を共

同研究で取り上げる。

（2）研究の成果

①二〇二三年度共同研究に引き続き、去年度取り扱わなかった西山寺伝来袈裟に注目し、代表者・顧明源が九州国立博物館・瀬智氏・桑原有寿子氏による袈裟の調査（協力者・山口華代氏）に参加した。調査の結果について、桑原氏の寄稿を得て、顧編「対馬西山寺文書の研究」に掲載した。桑原氏は、西山寺所蔵の「萌黄金襴地八条袈裟」が、劔付および「本光禪師」の号とともに、壬辰戦争の際に、明朝から景轍に下賜された「蜀錦伽梨」である可能性が非常に高く、豊臣秀吉への「日本国王」号と誥命、及び皮弁服をはじめとした冠服類の授与と同時に行われたもので、東アジアの外交史を考える上でも大変貴重な事例であることを指摘している。

②東北大学と東大史料編纂所所蔵「森」にある以酹庵関係文書の調査を行った。森潤三郎氏が京都に赴任した際に、寺町下御霊前の露店で百通余以酹庵関係文書を購入したという（森「古書閑談」）。現在、両箇所所蔵「森」を合わせて、九〇余通の以酹庵関係文書あり、主に一八世紀中後期の文書であることが判明した。これにより、当該期、以酹庵輪番僧・五山碩学・金地院との間の情報伝達的一端を明らかにした。

③公儀を代表する外交僧系統の実態を説明するために、「森」のほか、史料編纂所所蔵金地院記録も視野に入れて、調査を行った。これはもともと京都金地院所蔵の史料であったが、昭和2年和田英松の寄付金により（古書店か）購入されたものである。金地院から流出の経緯は不明。これまで、金地院以心崇伝が江戸幕府の草創期における「黒衣宰相」として注目されているが、彼の弟子・金地院二世最岳元良については、ほとんど検討されていない。編纂所所蔵金地院記録に、最岳による「僧録官記」・「金地日録」という二系統の記録がある。これにより、最岳が朝鮮通信使の応接・朝鮮国王宛て將軍書簡の起草などに携わり、家光期における幕府の朝鮮外交に深く関わったことが判明した。当該史料は、家光期における幕府の外交・宗教政策を知りうる重要な史料であることを強調しておきたい。

研究課題 播磨新宮池田家記録から見る幕末期江戸町奉行池田頼方の政治行

動の研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 渡辺浩一（国文学研究資料館）

所内共同研究者 菊地智博 立石了

所外共同研究者 高山慶子（宇都宮大学） 横山伊徳（東京大学名誉教授）

研究の概要

（１）課題の概要

本研究は、史料編纂所が所蔵する播磨新宮池田家記録の分析により、幕末に町奉行を勤めた池田頼方の政治行動を多面的に明らかにするものである。

同記録は全五二三点からなり、頼方の手元書類を中心とするが、その中には江戸の町政関係のみならず、安政大獄や外交・開港問題関係の史料も多く含まれている。そこには幕末期特有の開港・攘夷という政治的分裂が幕府にもあったこと、またそうした町奉行を取り巻く政治環境の中で頼方のとった特定の立場が反映されている。頼方は幕末期に三度町奉行を経験しているが、大獄への関与や、江戸市中への物流に関わって幕閣における開港議論にも携わった。幕閣における保守派の代表として、都市行政をどのように形作ったか、またどのように江戸行政を踏まえた全国政策の議論を行ったかを解明することが、本研究の重要な課題である。

具体的には、まず本記録の研究を進める一方で、旧新宮町（現・兵庫県たつの市）に所在する池田恭輔家文書や、町政・幕政史料である旧幕引継書類に代表される関連史料との総合的な分析を行い、新しい幕末の町奉行像を描き出すことを目指す。併せて、研究の成果を播磨新宮池田家記録の目録情報に反映し、また史料のデジタル高精細画像撮影・公開を行って、研究資源化も図っていく。

（２）研究の成果

まず、史料の研究資源化の点では、個々の研究関心に基づき史料調査を進めたほか、史料撮影を行った。また、古書即売会にて池田頼方発給文書を検討の上購入した。撮影については、播磨新宮池田家記録全五二三点のうち三一点（HiCAT Plusからの公開準備中）、たつの市池田恭輔家文書一〇二点、

龍野文庫史料三〇点（共にHiCAT Plusから公開済み）、前述の購入史料を撮影した。池田恭輔家文書内には昭和六年に史料編纂所が採訪した際の目録があり、現在の編纂所所蔵史料との照合作業を進めている。その過程で、現在編纂所に所蔵されているものは「播磨新宮池田家記録」と一括されている史料群であるものの、但馬出石藩の仙石騒動関係史料や上野吉井藩伝来と思われる絵図類など異系統で伝来したと考えられる史料も含まれていることが明らかになった。今後目録情報への反映を予定しているとともに、財団法人啓明会から本所に寄贈される以前の伝来過程の検討も進めている。

研究面においては、共同研究員に都市史研究者を加える形で研究会を三度開催し、旧幕引継書類や井伊家史料等各研究員がこれまで取り組んできた史料群・研究から得た知見と総合する形で、池田頼方をめぐる政治情勢や江戸町行政の展開について認識を共有した。その中で、頼方が町奉行就任前から町奉行在任中にかけて知行地家臣と密に連絡を取り、家経営の観点からも昇進意欲を示す様子も確認できたほか、役宅や屋敷での子女出産の様子を示す史料も見出すことができ、旗本の「家」へも着目した研究の必要性を改めて意識することとなった。本年度の調査や研究会で得た知見は、来年度以降、史料編纂所研究報告や史料編纂所研究紀要などへ掲載する予定で調整している。

研究課題 近世琉球における文書料紙の科学研究

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 前村佳幸（琉球大学）

所内共同研究者 中村寛 黒嶋敏 山本一夫 洪谷綾子 高島晶彦 山口

悟史

所外共同研究員 伊集守道（那覇市歴史博物館） 平澤加奈子（京都芸術

大学）

研究の概要

（１）課題の概要

近世琉球における紙の歴史文化を理解するためには、琉球と薩摩の間を往

来した文書と料紙の多様な情報を集成し、詳細な分析を行うことが不可欠である。本研究は、近世琉球における文書の形態と料紙について科学的な調査を実施し、紙の抄造・流通・使用をめぐる歴史の変遷に関する検討を行う。

研究では、デジタルマイクロスコープや光学顕微鏡等を用いて、料紙の形態・構造を非破壊的に調査する。具体的には、料紙に含まれた物質の種類・量・密度などの質的解析によって製造手法や地域的特性を見出し、紙の生産・使用の実態を双方向的に検討、歴史的・社会的変遷の復元を行う。研究対象の史料は、史料編纂所所蔵「島津家文書」を中心とし、研究の進捗に応じて対象を拡大する。抄紙過程で付与される糸目や簀目、皺などの表面情報を調査し、料紙を構成する多様な基礎情報を蓄積し分析することで、近世琉球の文書の特徴や歴史の変遷についての科学的検証を歴史学・文化財科学の両面から進める。

(2) 研究の成果

今年度は、東京大学史料編纂所・那覇市歴史博物館・沖縄県公文書館・宮古島市総合博物館等において、近世琉球における文書の形態と料紙の科学的な調査を実施した。宮古島総合博物館所蔵の「辞令書」二通(日一六〔同治二年〕/日一四一〔咸豊元年〕)については、料紙の素材植物などが先行研究の見解と異なること(竹紙ではない可能性)が判明した。さらに、中山王発給文書(写)に対する、沖縄県公文書館所蔵「岸秋正文書」の調査では、京都大学総合博物館所蔵・藤井斉成会有鄰館所蔵「小杉美二郎氏所蔵文書」との関連を確認することができた。また、この文書の内容と家譜における記載を関連づける論文を公開した。なお、「琉球国 尚裕家文書」と「尚家文書」については、修復完了直後の「尚家文書」四四〇号と照合することができ、宗廟祭祀をめぐる僉議の史資料として一部翻刻公開した。宮古島総合博物館が実施した修復事業に対応して、料紙調査を行い顕微鏡写真や密度などデータを得た。なお、所内共同研究者が実施した植物学的調査では、沖縄地域における文書料紙の素材植物(アオガンプ)に関するDNA情報を新たに獲得し、琉球の料紙の科学的特性を解明する手がかりを得た。

研究課題 戦功覚書の研究資源化に向けた調査・研究―東京大学史料編纂所

所蔵二〇四〇・五番台謄写本を中心として―

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 堀智博(東京都立大学)

所内共同研究者 松澤克行 林晃弘

所外共同研究員 福田千鶴(九州大学) 越坂裕太(学習院大学)

研究の概要

(1) 課題の概要

本研究が扱う戦功覚書とは、戦国時代を生きた武士の、戦場における活躍を記録したものをさす。これら覚書は、体験談ならではの具体的描写が多く、合戦の実像がうかがえる点で貴重である。しかし、従来は二次的史料とみなし、積極的に利用されてこなかった。確かに無批判に信じるわけにはいかないが、その内容を慎重に吟味し、事実誤認や虚飾を峻別することで、十分利用が可能である。

そこで本研究では、戦功覚書の史料学的検討を行い、その成果を公開することで、戦功覚書の研究利用の活性化に繋げる。具体的には、東京大学史料編纂所所蔵二〇四〇・五番台謄写本約二五〇冊を分析する。同史料群には戦功覚書がまとめてあり、同所データベース(HiCAT)から史料目録と画像が所外公開されているが、目録情報だけでは内容が判断できないものも多い。そのため、各覚書の内容を抽出・分類の上、作成者履歴・作成理由・伝来経緯まで含めた分析を行い、その成果を目録として公開することで、研究資源化を図る。

(2) 研究の成果

本研究の成果として、第一に史料編纂所謄写本二〇四〇・五番台謄写本全二四八冊の総点検を実施し、仮目録を作成したことを挙げることが出来る。当該史料群は、同所データベース上に史料名・著者・原蔵者といった基本的な書誌情報が表示されているが、この情報だけでは内容を推し量ることが難しい。そこで各覚書が、何の戦いの、どの場面を描いているか等の史料情報を抽出し、エクセル・データに入力した。これら成果については、同所データベース(HiCAT)上に反映させ、さらには報告書として刊行することを

予定している。

第二に、いくつかの史料所蔵機関を訪れ、二〇四〇・五番台謄写本の原本と関連史料を調査・撮影した。また、撮影した史料画像は、史料編纂所にデータ提供をした。なお、訪問した機関と調査史料は以下の通りである。福岡県立図書館（江藤文庫など一三三点）・九州大学文化史研究所（宇土細川家・秋月黒田家文書など一四〇点）・鳥取県立博物館（多田家資料四八点）・京都女子大学図書館（山城国船井郡西田村小早川家文書1点）

第三に、二〇四〇・五番台謄写本の調査の過程で得た知見を、学会報告や論文などにより公表した。具体的には、二〇四〇・五番台謄写本収録の戦功覚書について、作成者履歴・作成理由・史料伝来の経緯を、古文書や家譜など関連史料を参照して検討を行い、その成果を史学会・古文書学会の大会報告等で計六回報告した。また、論文二本・史料紹介一本を成稿した。

研究課題 小値賀町善福寺所蔵大般若経ならびに関連史料の調査・研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 平田賢明（小値賀町教育委員会）

所内共同研究者 須田牧子 井上聡 岡本真 谷昭佳 桑田恵里

所外共同研究員 木村直樹（長崎大学）

研究の概要

（１）課題の概要

五島列島の北部に位置する小値賀島の善福寺には、明德・応永年間（一四世紀後半～一五世紀初頭）の書写銘をもつ大般若経が所蔵されている。奥書には檀那として松浦党と思われる人名が散見されるほか、小値賀笛吹地藏堂で書写した旨が記される巻が見られ、本大般若経が小値賀島で制作され、爾来五〇〇年、島外に出ることなく伝来してきたことをうかがわせる。一方、地元では、遙か海の彼方から漂着したものであると伝えられてきた。本研究は、本大般若経と関連史料の調査を行ない、その成立と来歴を明らかにするとともに、得られた歴史情報を研究資源として公開し、当該史料の後代への適切な継承を図ろうとするものである。具体的には、経箱内の経典を整理し

断簡類の復元をした上で、赤外線撮影を含む撮影を行ない、経典内に見える大量の墨書を採取して、書写者・資金の供出者の人的情報を抽出する。また旧蔵寺院址の石造物調査を行なって文字情報を収集し、これと後補の経箱等の墨書銘や修理銘と比較検討する。さらに小値賀町歴史民俗資料館に残された、経典や所蔵寺院等をうつしたガラス乾板写真を整理・デジタル化し、大般若経と経典を取り巻く近代の環境と伝来過程を視覚的に再現する。

（２）研究の成果

二〇二四年度の調査活動により下記の成果を得た。①経巻断簡一〇〇点余を大蔵経データベースを駆使して整理復元し、新たに一卷の現存も確認した。これにより本大般若経は六〇〇巻中五八〇巻現存することが判明した。②この成果に基づき経巻1点毎の調書作成を行ない三五〇巻分を終了した。一卷に複数人の手が入った形で作成されている物があることや、時期や書写者にかかわらず概ね統一された仕様で作成されたとみられること、過去に二回大規模な修理が行なわれたらしいこと等を確認した。③全巻の赤外線撮影を完了した。当初は抜撮りを予定していたが、その過程で想定外の冊からも文字が発見されたため全撮りに切替えた。④予定のガラス乾板史料の保全整理作業および撮影を完了した（新たに別のガラス乾板群も発見された）。

以上、本共同研究の研究活動により大般若経の整理保全作業が進み、史料のな性格が徐々に明らかになってきた。また赤外線撮影により大量の墨書が発見され、人的情報を多く採取することができた。小値賀島には中世の山城や水中遺跡が多く確認され、豊富な発掘研究成果が積み重ねられているが、文字史料は僅少であって、これら山城を営んだ人物や水中から引き揚げられた貿易陶磁器の荷担者等は不明である。そのようななかで、一四世紀末に本島で作成されたことが明確な本大般若経は、こうした文字史料の空白を埋める貴重な史料であることが、以上の成果を通じ改めて明確にされた。

研究課題 萩原寺所蔵地藏院聖教調査の成果の共有化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 厚谷和雄

所内共同研究者 井上聡 遠藤珠紀 末柄豊 畑山周平
所外共同研究員 伴瀬明美（大阪大学） 守田逸人（香川大学） 山口英男
（東京大学名誉教授）

研究の概要

（１）課題の概要

香川県観音寺市の萩原寺が所蔵する地藏院聖教は、前近代のものが六、〇〇点を超え、そのうち一六世紀以前のものが七割強を占める。地方寺院に伝来する中世聖教としては、規模・内容ともに屈指のものといえる。その調査は、一九八八年、金刀比羅宮図書館の故松原秀明氏と申請者を含む史料編纂所内の研究グループとが共同して開始し、その後も所内外から多数の参加を得て継続、二〇二三年、調書の採取およびデジタル撮影について完了するに至った。

ただし、周備した調査・撮影データを活用しながら、今後の研究活用の基盤になり、保存管理の台帳ともなる聖教目録を刊行すること、あわせて、目録に対応する番号体系の整備を前提とした史料本体の安定的な出納法を確立することが課題として残っている。

本研究は、これまで調査に携わってきた史料編纂所の元所員を含む所外の研究者が現所員と協働して上記の課題を果たし、調査の成果を学界共有のものとすることを目的とする。

（２）研究の成果

二〇二四年一月に実施した調査では、主として、目録と史料との一点毎の照合、および新番号付与のための作業を実施した。およそ半分の進捗をみており、二〇二五年度の調査によって照合および新番号付与のための作業について完了できる見通しを立てることができた。あわせて、調査から除外した近代聖教等の史料のなかに調査対象とならないかの点検を実施した。およそ半数について確認をおこない、調査対象とすべきものの三点を見出した。以上の作業を通じて、あらためて短期間で集中的に史料を確認することにより、史料群の構成に関する理解を深められたのと同時に、これまでに蓄積した目録データの不備についても確認することができた。

また、近代以降に同寺から流出したものとされる印信二通を本研究費に

よって取得することができた。

研究課題 「池田茂政関係史料群」の形成過程の解明と研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 東野将伸（岡山大学）

所内共同研究者 菊地智博 箱石大

所外共同研究員 杉本史子（東洋文庫・東京大学名誉教授） 上村和史（高梁市教育委員会） 澤村怜薫（行田市郷土博物館） 世川祐多（外務省）

研究の概要

（１）課題の概要

本研究では、複数の大名家を経て岡山藩池田家当主となった池田茂政がその過程で作成・収集し手元に所持し続けた、個人付史料群（池田茂政関係史料群）について、その形成過程を検討し、研究資源化を行う。

具体的には、以下の検討を行う。

① 岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫の再検討…これまで岡山藩の藩政・藩主関係史料と考えられ、池田家文庫のなかに埋没してきた「池田茂政関係史料群」を洗い出す。

② 諸機関の茂政関連史料・モノ資料の調査（林原美術館・岡山県立記録資料館・岡山大学附属図書館・史料編纂所、東京都立図書館）※史料編纂所は『松平昭休往復書翰留』のほか、複数の史料群のなかに、書状などの茂政関係史料を所蔵し、また池田家文庫における過去の調査成果を多く蓄積している。

③ ①②の分散史料群を結びつける、オンラインネットワークの構築を模索する。池田家文庫についてマイクロＤＢのデータ拡充、未撮影分の撮影とWEB公開、史料編纂所を含めた諸史料群の統合検索システムの構築などの方法を検討する。

（２）研究の成果

岡山市での調査により、池田茂政や幕末維新期の岡山藩政を検討するうえ

で重要な史料を確認・選定した。この際『松平昭休往復書翰留』を刊行した編纂所のメンバーや、忍藩についての知見を有する澤村世川の知見が役立った。これらの調査史料に加えて、以前に編纂所が調査・撮影していた文書の詳細な目録を大学院生の協力によって作成し、目録・写真データをHi-CAT²⁾にて公開した。これにより池田家文庫の研究資源化を進めることができ、これらの史料を活用した研究の一層の進展も期待される。また、同調査の際に岡山地域の研究者も参加する研究会を実施し、議論を通じて岡山県内での所蔵史料の状況や池田家文庫の文書群構造、近代の整理過程について理解を深めることができた。史料編纂所での調査により、従来内容が精査されたことのない池田家・岡山藩関係文書を確認した。これらの文書には、維新史料編纂会が池田家から購入したものが含まれていた。この調査にあたっては、上村らの幕末維新期岡山藩政についての知見が役立ち、史料の伝来過程や内容・意義について知見を得た。

本共同研究によって、池田家文庫には池田茂政個人の所用にとどまらない忍藩政記録類、茂政の養子入り関連史料、周辺人物による作成史料類が残されていること、茂政が本来藩政記録とされるべき史料を持ち出し、また書き写すなどする中で、「池田茂政関係史料群」が形成されたことが明らかになった。さらに、池田家文庫や池田茂政に関する史料の全体像や現状を把握する際には、編纂所所蔵史料も含めた伝来過程を明らかにすることが必要である点が確認された。これらの史料の伝来過程の解明に、林原美術館所蔵資料（印章・書跡等）が手掛かりになることが判明した。以上の知見をふまえて、「池田茂政関係史料群」および周辺史料の伝来過程と内容を調査・整理し、それらの情報を公開することの研究可能性が新たに確認された。

研究課題 東寺旧蔵文書群の復元的研究

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 富田正弘（富山大学名誉教授）

所内共同研究者 木下竜馬 遠藤基郎

所外共同研究員 小倉嘉夫（大阪青山歴史文学博物館） 小森浩一（京都

研究の概要

（１）課題の概要

東寺に伝来した文書については、中世供僧による文書管理の体制についての研究が進み、その保管体系が現代に引き継がれ、「東寺文書」「東寺百合文書」「教王護国寺文書」としてよく保存されていることが明らかになっている。しかし寺から他出した文書が少なからずあることも、明治時代採訪の影写本との比較などから判明している。

東寺旧蔵文書の調査は、現所蔵者である東寺や京都府立総合資料館（現京都府立京都学・歴史館）などで行われてきたが、特に一九八〇年代後半以降、本研究申請者富田を中心に、共同研究者高橋も参加して調査収集作業を行い、その成果目録は「東寺文書検索システムデータベース」（作成代表者富田正弘、二〇〇一年）に反映されている。しかしながら、このシステムは、アプリケーションのヴァージョンアップとともに利用できなくなっている研究者が多いと思われるほか、データについて、その後の更新ができておらず、再把握と修正および新たな収集が必要になってきている。

旧蔵文書を含めた東寺関係文書の新たな全体系把握と史料学的検討を、世代間の協業で遂行することが本研究の課題であり、その方針のもとで二〇二四年度の活動を行った。

（２）研究の成果

調査を実施した京都大学総合博物館・京都国立博物館・大阪青山歴史文学博物館・京都府立京都学歴史館等において、「東寺文書」のうち原本の所在が不明となっていたもの（神泉苑之部・五常之部義）、これまで案文・写本でのみ知られていた文書の正文、新たに東寺関係文書と判明した文書の原本、これまで把握していた寺外所蔵者に変更があった原本（松田光氏旧蔵文書」「神田孝平氏所蔵文書」「保阪潤治氏所蔵文書」「田中教忠氏所蔵文書」等々、寺外所在の原本の現状について多くの新しい情報を得ることができた。中には、明治時代作成の影写本や相田二郎氏の起請文料紙の研究によってしか確

府立京都学・歴史館） 高橋敏子 西尾知己（関東学院大学） 貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫） 松井直人（京都大学）

認できなかった明徳四年二月一日播磨矢野莊例名百姓宗阿弥起請文の再発見があったほか、これまで未知の文書原本（長祿三年東寺領（周防国）兼行保某起請文）もあらたに把握することができた（京博）。詳細は、別の機会に行う予定である。

また、これまで供僧による惣寺の関係文書として、大まかに、広く収集してきた寺外所在の東寺文書であるが、中世における東寺の活動の総体を的確に把握するためには、あらためて政所系列、惣寺系列、子院とそれにつながる法流の文書など、分類と体系化が必要であると認識した。その中で、政所系列の記録「東寺凡僧別当引付」の資料紹介を行った。「東寺執行日記」と同様に、「百合文書」の領域と重なりながらも、異なる様相を提示してくれるこの資料紹介については、現在把握している分について継続掲載していく予定である。

さらに史料編纂所所蔵の近世写本の中の東寺文書（請求番号四〇一五―四）についても調査を行い、作成に近藤重蔵が関わっていたことを明らかにすることができたが、その中にさらに未知の洛中東寺領指図史料が存在していることが明らかになった。これまでよく知られてきた白河本・古文零聚以外の東寺関係近世写本の可能性にも期待がもてる。

この課題については、史料編纂所の共同研究として実施することにより、史料所蔵者の理解を得て調査を円滑に遂行することができ、また成果公開の機会も広がっている。調査情報の入手や知見の共有による今後の課題の広がりにもつながっている。

研究課題 勝尾寺文書の全体像の解明および研究資源化

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 小野塚航一（国立歴史民俗博物館）

所内共同研究者 末柄豊 村井祐樹 小瀬玄士

所外共同研究者 市澤哲（神戸大学） 大田壮一郎（立命館大学） 伴瀬明美（大阪大学） 前田英之（奈良女子大学） 三好英樹（大阪府教育庁） 横内裕人（京都府立大学）

研究の概要

（１）課題の概要

勝尾寺文書は、中世文書だけで一、〇〇〇通を超える大阪府下最大の中世文書群である。『箕面市史 史料編一』『三』（一九六八―一九七二年）に縁起や近世文書を含む一、三六八通が活字化され、同市役所には市史編纂時に撮影されたマイクロフィルムが現存し、東京大学史料編纂所にもこのフィルムから焼付けた写真帳二〇冊を架蔵する。一見、利用環境が整った文書群であるかに思われる。しかし、市史やマイクロフィルムは、中世文書に限っても勝尾寺文書の全体像を示すものではない。同寺の文書類は、延宝九年（一六八一）約七〇巻に成巻され、同時に目録が整備された。市史やマイクロフィルムはおおむねこれに対応しているが、子細に検討すると少なからぬ出入りがある。さらに同じ時期に文書の写が作成され、卷子装の副本も整備された。そのため、勝尾寺文書の総点数は優に二、五〇〇点を超える。また、中世文書原本・近世写本のいずれも卷子の糊継の剥離が著しく、現状は非常に混乱している。卷子内での順序が維持されていないにとどまらず、本来の卷子のまとまりから外れた文書も少なからず存在する。そこで本研究では、全点のデジタル撮影および目録化作業をすすめ、現在の勝尾寺文書の全体像、およびそれが延宝九年の整理状況といかほど相違するのかを明確にすることで、勝尾寺文書の研究活用および保存管理のための基盤の確立に努めたい。

（２）研究の成果

共同研究を組織し、幅広い研究者の参加を得た調査体制を整えたことによって、勝尾寺当局から所蔵史料調査についてご理解、多大なご協力を得ることができ、その結果、勝尾寺宝物館収蔵庫の調査から実施した。これによって所蔵史料のほぼ全点を大まかに把握し、これまでの予備調査で行っていた撮影から漏れていた史料を含め、原本調査・デジタル撮影を実施した。これによって今回九〇〇コマのデジタル撮影を行い、勝尾寺所蔵史料のほぼ全点の撮影を完了することができた。併せて今後の目録作成に向けて、延宝九年作成の勝尾寺文書目録と、現状の対照作業を進めたところ、延宝九年目録に収載されている文書は概ね現存していることを確認した一方で、その秩序には変更が行われていること、また目録には収載されていない数多くの副本、

文書写が存在していることを確認した。文書写は同一文書について複数存在しており、適切な勝尾寺文書保存管理のため、目録をどのように作成するか、より慎重な検討が必要であることが明らかになった。

これを受けて、当面の作業の基盤を整備するため、現状で把握できている文書について、すでに作成が行われていた史料調査カードの情報エクセルへ入力することとし、補助員の協力を得て、これを実施し、約二、九〇〇レコードのデータを入力し、目録作成の下地を整えた。

これらの成果と現状把握をもとに、御寺と相談をした結果、勝尾寺文書の保存管理のための目録整備事業には、時間をかけた慎重な作業が必要であることを御寺にもご理解いただき、今後の目録作成のための原本調査については御寺のご協力・ご支援を得て実施することになり、本共同研究の所期の目的は達成したということができ、本共同研究を終了することとした。

研究課題 新潟県村上市「漆園」板垣家所蔵文書の調査と研究

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 浅倉有子（上越教育大学）

所内共同研究者 井上聡 松澤克行 山本一夫

所外共同研究員 高橋一樹（明治大学） 工藤航平（国立歴史民俗博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

新潟県村上市上中島に所在する板垣家は、近世初頭から近代に至るまでの三万点余におよぶ史料を所蔵している。三面川を望む上中島に居を定めた板垣家は、その流域にひろがる山間地の商圏を掌握し、さらにこれを日本海交通と結びつけることで、豪商へと成長した。とりわけ一八世紀以降、屋号に「漆園」とあるとおり、広範な漆取引を行って莫大な富を生み出すことに成功している。主に東北方面から集積した漆を、保有する北前船等をもって大坂・江戸に回漕して取引するために、列島規模で相場に関する情報を大量に収集していた。大坂・江戸に常駐する番頭から送られた情報などは、政情や災害など多岐にわたり、政治史・社会史的にも大変貴重である。また膨大に

集積された富は、村上藩の財政を支える役割も果たしており、藩の主要人物との往来信は同藩の動向を分析するうえで不可欠である。同家史料は、現在新潟県による緊急所在確認調査を通じて総数約二万点と報告されているが、詳細に分け入った調査は行われておらず、未だ概要の把握が急がれる状況におかれている。長期的な保存・活用を視野に入れつつ、体系的な整理・撮影・調査を県・市ほかと連携して推進するとともに、多岐にわたる内容にそくした研究を展開してゆくことが求められている。

（２）研究の成果

新潟県の概要調査にとどまっていた学会未紹介の板垣家文書について、本共同研究の調査によって、一部の史料の撮影や目録作成準備作業を進めるとともに、文書全体の構造を把握することができた。また、漆取引をはじめとする板垣家の経営についてもより実態に即した把握が可能になった。

特に共同研究として、他研究機関・新潟県内の研究者とともに調査を行ったことにより、撮影や目録作成・史料保存の方法について各機関の知見を共有することができたほか、新潟県・村上市との協力体制を構築することができた。

以上のような本共同研究の調査によって、二〇二五年度からは大型の科学研究費による大規模・継続的な調査に繋げることができた。

研究課題 益田家伝来品の伝来・伝世に関する文書の調査研究

研究経費 四五万円

研究組織

研究代表者 角野広海（島根県芸術文化センター）

所内共同研究者 西田友広

所外共同研究員 小山弓弦葉（東京国立博物館） 重田麻紀（須佐歴史民俗資料館） 中司健一（益田市歴史文化研究センター）

森道彦（京都国立博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

東京大学史料編纂所が所蔵する益田家文書の中には、益田家伝来品の伝来・

伝世に関する記載がある。それらはすでに活字化されているものもあり、現存が確認されている伝来品も存在する。

益田家伝来品には、益田宗兼が足利義植から拝領した品、益田藤兼が石見国七尾城下での犬追物の際に使用していた品、雪舟・雲谷派が描いた品などが含まれる。それらは地域と中央政権との関係、地域支配の実態、文化的基盤の諸相など、地域の領主の実像を様々な視野から明らかにしている点で意義深いものである。

しかし、中世から現代に至るまで、益田家伝来品にはどのような伝来・伝世の経緯があるのか、また益田家を軸としてどのような美術工芸品が贈答されていたのか、その全体像は未解明である。その問題を明らかにするために、未だ活字化されていない文書も含め、近世の益田家文書や地元の寺社様の文書、近現代の関連資料を調査する必要がある。

よって、本共同研究では益田家伝来品の伝来・伝世に関する文書の調査・研究を進め、益田家伝来品の全体像を明らかにし、その研究資源化を図りたい。

(2) 研究の成果

益田家伝来の《太刀 銘成高》(鎌倉時代、京都国立博物館蔵、重文)について、伊藤祐時の子とされる内田宗茂が石見国豊田郷を与えられ、その子孫から豊田氏を名のる一族が登場する。戦国時代には豊田安宗が益田藤兼の計らいで藤兼の娘の朝倉殿と結婚し、藤兼との初めての対面の際に《太刀 銘成高》を献上した。また、《太刀 銘成高》、《刀 額銘来国光切付銘埋忠磨上之》(鎌倉時代、京都国立博物館蔵、重文)、「兼光刀」(所在不明)の空箱が萩市立須佐歴史民俗資料館の保管されていることが明らかとなった。

益田家伝来の《小袖 白茶地桐竹模様綾》(室町時代、東京国立博物館蔵、重文)について、その形状・文様が『防長古器考』巻七「雪下呉服 一」の記述に合致することが改めて確認されたことで、「益田元堯諸道具譲渡目録」(二六四四年、東京大学史料編纂所蔵、益田家文書九八九号)に記された品であることが確実となった。また、「雪ノ下」という呼称について、鴻池家伝来の仕覆裂筆筒の中に「雪ノ下」の銘が記された「鎌倉間道」があることが明らかとなり、「雪ノ下」の意味内容を考察する足掛かりが得られた。

益田家と雪舟画の関係について、関連文書との照合により中世から益田家にあった可能性を特に想定できるもの含まれる一方、益田家伝来の肖像画への考察により中世の益田家は国人衆や大内家、幕府との関係の中で文化を時期ごと選択的に受容し、雪舟を一族の文化的伝統と規定することは必ずしもなかったという知見が得られた。

萩市立須佐歴史民俗資料館に所蔵される明治期から昭和期までの「御道具取調帳」との照合により、「益田元堯諸道具譲渡目録」に記載された益田家伝来品の明治から昭和にかけての伝来・伝世についての詳細が明らかとなった。

昭和前期の売立目録を調べた結果、「益田元堯諸道具譲渡目録」記載の「竺 僊梵僊之墨跡 壹幅」は「観空庵遺愛品入札」(一九四一年、東京美術倶楽部)に掲載されていることが明らかとなった。同じく「益田元堯諸道具譲渡目録」記載の「三幅一対之絵 壹通 但、中尊呂洞賓徽宗皇帝御筆、左右蘆雁牧溪筆」は、『某大家蔵品入札』(一九四〇年、東京美術倶楽部)に掲載されている「唐画／中呂洞賓／左右芦雁」の当たる可能性が高いことが判明した。また、関わった研究者の情報提供により、この「唐画／中呂洞賓／左右芦雁」はアメリカのネルソン・アトキンス美術館に所蔵されており、同館の公式ホームページの所蔵品目録にも図版が掲載されていることが明らかとなった。

研究課題 **A1 技術を用いた像内納入文書の研究資源化および史料学的研究**

研究経費 五〇万円

研究組織

研究代表者 横内裕人(京都府立大学)

所内共同研究者 堀川康史 海上貴彦 遠藤珠紀 中村寛

所外共同研究員 上大樹(文化庁) 川瀬由照(早稲田大学) 永村真(日本女子大学名誉教授) 貫井裕恵(神奈川県立金沢文庫)

服部光真(元興寺文化財研究所) 伴瀬明美(大阪大学)

三輪眞嗣(神奈川県立金沢文庫) 西岡芳文(上智大学)

三好英樹(大阪府教育庁)

研究の概要

(1) 課題の概要

像内納入文書は、仏像の造像などの経緯のみならず、中世における供養のありかた、地域社会における宗教環境の復元に多大なる情報をもたらしてくれる。しかしながら、像内納入文書の紙背にみえる印仏・摺仏の墨捺は、文書面の判読を困難にしており、それゆえ十全な検討がなされていないものが数多く存する。そこで本研究では、AIなど最新の画像処理技術も活用しつつ、撮影と原本調査を実施し、そこで得られた良質な翻刻によって、像内納入文書を素材とした研究を推進しようと試みた。これにより、像内納入文書を活用するための方法論を確立し、研究資源化の基盤を整備することを見据えている。具体的には、重要文化財「阿弥陀如来立像」の像内納入文書（大阪府大阪市大通寺蔵、神奈川県立金沢文庫寄託、以下「大通寺文書」と表記）を調査対象に据え、その翻刻とそれに基づく研究を行った。

本研究では、これまで美術研究の一部として扱われることの多かった像内納入文書を、歴史研究の組上りのほすことで、像内納入文書にかかる史料学的研究の基礎を構築することを目的としている。像内納入文書の研究資源化を推進することで、歴史学や美術史学、仏教学といった近代の学問体系に分類されない、中世における信仰の「場」の復元が可能となるであろう。

(2) 研究の成果

本年度は印仏の墨捺がみえる大通寺文書の撮影を完了した。これにより、高精細画像に基づき、画像処理や翻刻作業を行うことが可能となった。

歴史学のメンバーは、高精細画像や原本調査によって、全点の翻刻案を作成した。しかしながら、原本を確認しても判読の難しい文書が多数を占めるため、今後、既知の八条院関係文書と比較しつつ、成果の公開に向けて精度を高める必要があることを確認した。一方で、治承・寿永内乱期の地方情勢を示す史料などが新たに見出された点、本年度の特記すべき成果といえよう。また、情報学の中村氏によりAI技術による画像処理作業が進められた。本年度は、「デジタルアーカイブ上の中世文書に任意の印仏を自動押捺した（デジタル印仏文書）」を大量に作製し、印仏ありとなしの教師データを用意したうえで、印仏部分を除去するAI学習をさせて、印仏文書に画像処理を施すなど試行錯誤したが、画像認識の精度に課題を残した。次年度は精度を高め

ていき、翻刻の際の参考となる画像処理データの生成を期待している。

上記のとおり、専門の異なる歴史学の研究者によって文書を検討し、さらに情報学における画像処理の手法を模索するという協同作業によって、本研究を推進することができた。

外部資金による研究・成果

科学研究費助成事業

史料データベースに基づく日本列島記憶継承モデルの確立

- 一、研究種目 学術研究助成基金助成金 基盤研究(S)
- 二、課題番号 二四四〇〇〇一一一
- 三、研究期間 令和年六度～令和一〇年度
- 四、研究経費 直接経費二、四一〇万円、間接経費七二三万円
- 五、研究組織

研究代表者 山田太造

研究分担者

井上聡・本郷恵子・末柄豊・箱石大・杉森玲子・林晃弘・新井重行・中村寛（東京大学史料編纂所）・関野樹（国際日本文化研究センター）・木村直樹（長崎大学）・馬場基（奈良文化財研究所）・原正一郎（京都大学）・後藤真（国立歴史民俗博物館）・大向一輝（東京大学大学院人文社会系研究科）・永井信（海洋研究開発機構）

六、研究の概要

(1) 研究の目的

史料を蓄積・管理・共有することで、政治・経済だけでなく、災害・気候・土地利用など多様な分野に関わる過去のイベントを探るため、①日本の各地域に伝来する史料について付随データとともに画像データを断続的に蓄積していく史料データベース手法の確立、②史料に対する情報抽出・分類・関連検出などを実現するデータ駆動型データ分析基盤の構築、③異分野間で知見・知識を刺激し、新たな知見・知識を得るなど、融合的に研究を進展

させていく研究環境を形成し、過去から現在を、あらゆる分野をシームレスにつなぐデータインフラストラクチャとして成長させ、日本列島記憶継承モデルの確立を目指す。

(2) 研究の実績

日本列島に起こったイベントを解明していく上で史料は重要な資源である。史料に係るデータを蓄積・管理・共有し、過去から現在を、多々の分野をシームレスにつなぐデータインフラストラクチャとして成長させ、日本列島記憶継承モデルの確立を目指している。この実現のため、以下について取り組んだ。

①史料データセンシング手法の確立：HiCAT Plus（史料編纂所データベース検索サービスの1つ）から立花家史料館所蔵・柳川古文書館寄託「立花家史料館所蔵史料」および都城島津邸所蔵「都城島津家文書」の史料画像データ公開を実現した。

②データ駆動型データ分析基盤の構築：二、〇〇〇万点を超える史料画像に対して、本文作成・情報抽出・イベント検出を実施する。一六世紀の公家である山科言継による日記「言継卿記」（刊本、国書刊行会）全四巻を対象に、AI-OCRを実施した。本文に対するレイアウト認識のF値は0.98、テキスト認識における編集距離は0.033だった。また地名抽出におけるF値は0.84だった。

③異分野融合研究環境の形成：異分野融合研究におけるデータ環境の整備を進めた。具体的には奈良文化財研究所における遺跡発掘と災害痕跡に関するデータ関連、さらに管理と分析手法について議論を行い、①へのフィードバックと研究データ管理について検討を行った。二〇二五年二月二日、キックオフフォーラム「日本史研究に関するデータフロー確立に向けて」を実施し、計画の全体像・計画、取組内容について報告し、日本史研究に関するデータフロー確立について議論した。二〇二四年九月一八日、JADH二〇二四ブレンシボジウム人文学データシンポジウム「人文学研究データに関する提供と利用のギャップ」を開催（JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業との共催）し、①を中心とした取組を報告した。

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

本研究課題（基盤研究(A)・一九H〇〇五三六）は、二〇二三年度で終了している。研究経費・研究組織および、研究の概要のうち、研究目的・進捗状況についての詳細は、二〇一九～二〇二三各年度の報告を参照いただきたい。ただし、研究計画の最終年度に当たる二〇二三年度に、一三二万円（直接経費のみ）を繰越した。以下にこの分の研究実績を報告する。

二〇二四年度繰越金による研究実績

本研究課題による研究組織のうち、西日本班は高野山町石研究会との協力により高野山町石調査を実施した。町石正面の拓本採集完了を受け、二〇二三年度中に側面も含めたすべての拓本採集・デジタル化を完了する予定であった。そのため二回の調査を計画していたが、二〇二三年六月に発生した土砂崩れのため参詣道が通行止めとなり、第二回の調査を延期せざるを得なくなった。

その後、参詣道の復旧工事が完了し、安全が確保されたことを受けて、二〇二四年五月に調査を実施し、当初の計画を完了した。その後すみやかに、採集拓本のすべてについてデジタル化を完了した。

また、歴史叙述・国際日本学研究班において、「中世日本関係中国金石文」の一覧表および解題が完成した。そこで、榎本渉・菊地大樹編『中世日本関係中国金石文 一覧表（稿）ならびに解題』（東京大学史料編纂所研究成果報告 二〇二四―二）として刊行し、研究成果を公開した。

コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究

一、研究種目	基盤研究(A)
二、課題番号	二〇H〇〇〇一〇
三、研究期間	二〇二〇年度～二〇二四年度
四、研究経費	直接経費五一〇万円、間接経費一五三万円
五、研究組織	
研究代表者	山家浩樹

研究分担者

本郷恵子・尾上陽介・井上聡・山田太造・小瀬玄士・林晃弘・中村寛・渋谷綾子（以上史料編纂所）・阿兄雄之（東京国立博物館）・馬場基（奈良文化財研究所）

六、研究の概要

（一）研究の目的

本研究は、長年に亘り逐次的に蓄積されてきた史資料に関する諸データを対象として、

①多様かつ大量なデータを統合し、永続的な提供を可能にする環境を整備すること

②膨大なデータ群を利用するにあたり、ユーザーが求めるコンテキストに応じた必要データのパッケージ化を確立すること

③紙史資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証を行うことを目的とする。これらの実現により、人文科学研究資源のあり方を一新してゆく。

（二）研究の実績

前年度までの成果を踏まえて、以下の三つの課題を対象とする研究の総括を行った。

①多様かつ大量なデータの統合と永続的な提供を可能にする環境整備については、前年度に引き続き、史料編纂所歴史情報処理システムの基幹となる所蔵史料目録DB（EICA）と、史資料の物理的データ（紙質・状態・修理履歴など）を集約する「史料情報統合管理システム」の連携を推し進めた。特に史資料紙に対するキュレーションを可能にするアプリケーション

「caid」および「caid server」に蓄積したデータを対象に、O A I S参照モデルに拠りながら長期利用・長期保存を図ることを目指した。具体的には、EICAに収載情報と「史料情報統合管理システム」との参照連携を実現するための方法論を検討し、実践的な試行を重ねた。さらに、研究データの長期的な利活用支援を目的としてArchivematicaを用いたデータキュレーションプロセスの自動化について取り組んだ。

②データのパッケージ化と提示手法の確立については、①に示した成果を踏まえて、史料に関わるさまざまなデータを対象として、利用コンテキストに

基づいたパッケージ化方式の確立につとめた。具体的には、トピックモデルL D A・S T MなどのA I・機械学習手法を用いて、データ分類・検索を試行することで、データ駆動型データ提示モデルのプロトタイプを案出した。

③紙史資料以外の人文科学研究資源への適用可能性の分析・検証については、前年度までの成果を踏まえて、奈良文化財研究所が管理する出土木簡や東京国立博物館蔵ガラス原板の各種データを対象に、データ利用条件の設定などを進め、公開にむけた環境整備に取り組んだ。

筆跡・花押情報の高度利活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による―

一、研究費種目 基盤研究(A)

二、課題番号 二〇H〇〇〇二二

三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度

四、研究経費 直接経費四一〇万円、間接経費一二三万円

五、研究組織

研究代表者 末柄豊

研究分担者

井上聡・川本慎自・遠藤珠紀（以上、史料編纂所）・久留鳥典子（総合研究大学院大学）・大山航（東京電機大学）・未代誠仁（桜美林大学）・村川猛彦（和歌山大学）・桑田訓也（奈良文化財研究所）

六、研究の概要

（一）研究の目的

本研究は、これまで整備してきた筆跡・花押画像の安定的な収集環境を前提に、データ蓄積の質・量を一層拡大していくのと同時に、人文学的な手法にとどまらない多様な方法論を援用することで、筆跡・花押研究の新たなステージを招来することを旨とした。筆跡・花押を正確に読む・理解するための学術基盤を築くことにとどまらず、筆跡・花押画像の典拠となった原史料に関するメタデータほか膨大な関連情報を十全に活用することで、それらの形象が帯びた歴史的メッセージを最大限に汲み上げてゆくことを企図した。

（二）研究の実績

最終年度を迎えた本研究は、前年度までに進めてきた五つのテーマについて、総括することを目的として実践を深めた。

①データ収集の拡充と収集方針の高度化については、安定的に新規データの登録を継続するとともに、史料編纂所所蔵以外のオープンデータからの登録・公開を推進することを目指した。当年度の新規データ登録は、筆跡データが二八、五〇〇件、花押データが約四、〇〇〇件を数え、累計データ総数は、それぞれ約六〇万件、一一・五万件に達した。このうち所外オープンデータからの収集データが一六万件余となり、多様性を高めることができた。

②蓄積データ公開による社会的発信の強化をめぐつては、史料編纂所が公開する「電子くずし字字典DB」「花押DB」の利用推進を図るとともに、多機関連携による「史的文字DB連携システム」からの公開も強化した。結果として三つのDBのアクセス件数は凡そ一九〇万件に達しており、人文学の学術基盤として一定の認知を得たと確信する。

③画像解析技術の更なる革新と多様な手法の導入をめぐつては、既登録のデータ群を対象に機械学習を進めた。加えて筆跡データにおける経験値を花押データに援用することで、その利用可能性を高めることができた。その成果は字形読解システムであるMOJIZOの精度向上という形で反映されている。またMOJIZOとは異なるシステムによる筆跡・花押画像の分析についても実践を深めた。

④人物情報を媒介とした筆跡・花押分析の高度化研究については、前年度に引き続き、新規登録データの人物情報を、史料編纂所歴史情報処理システム内にある人物レポジトリへと移行することで、汎用的な利活用環境の整備を進めた。

⑤史料学的情報との統合による筆跡・花押情報の高度利用研究では、前年度までの成果を踏まえて、史料画像から個々の字形や花押を識別し、抽出するプログラムを開発し、經典データ上で具体的実践を推進した。

外交の世界史の構築——一五・一九世紀ユーラシアにおける交易と政権による保護・統制——

一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(A)

二、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度
三、研究経費 直接経費四六〇万円、間接経費一三八万円
四、研究組織

研究代表者 松方冬子

研究分担者 森永貴子（立命館大学）・塩谷哲史（筑波大学）・彭浩（大阪公立大学）・菊池雄太（立教大学）・岡本隆司（早稲田大学）・松本あづさ（藤女子大学）・辻大和（横浜国立大学）・大東敬典（東京大学史料編纂所）・木村可奈子（東北大学）・皆川卓（法政大学）

五、研究の概要

本研究では日本史研究の蓄積を、他地域の事例と比較することで、新しい世界史像を構築しようとする。最終的には、ヨーロッパ中心主義を克服し、より平らかな世界史を描くことを目指す。

本研究については、以下のウェブサイトを参照されたい。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21H04355/>
http://www.hi-u-tokyo.ac.jp/personal/fuyuko/kaken/gaikou_sekaisi.html

断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究

一、研究種目 科研費補助金 基盤(A)

二、課題番号 二一H〇四三五六

三、研究期間 二〇二一年度～二〇二五年度

四、研究経費 直接経費三六〇万円、間接経費一〇八万円

五、研究組織

研究代表者 西田友広

研究分担者 井上聡・堀川康史・山田太造・中村寛（以上史料編纂所）・貫井裕恵・三輪真嗣（以上神奈川県立金沢文庫）・高橋悠介（慶応義塾大学）・佐藤雄基（立教大学）・守田逸人（香川大学）・高田智和（国立国語研究所）

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究は、古文書学にもとづく史料批判の対象から漏れてきた、断片的史料・逸失史料をあまねく学術資源化することで、中世史料学を根本的に見つめなおすことを目的としている。これまでも断簡・破損汚損文書・無年号文書といった多様な形態をとる史料が、古文書学的検討の対象から外れてしまふことへの批判はあったが、それらを積極的に活用するための具体的方策・提案は提出されずにきた。本研究では、隣接諸科学を含めたあらゆる方法論を援用することで、かつ情報化されたデータ群をあまねく参照しうる環境を整備することで、こうした史料の持つ可能性を徹底的に追究し、批判に足りうる有効な研究資源とすることを目指している。併せて、かつて確かに存在していた文書の痕跡を伝来史料から抽出・集約することで、残された文書の背景に広がる浩瀚な史料世界の復元を目指すものである。残存史料が持つ情報を最大限有効化するとともに、残されることのなかった史料存在をあまねく検出することによって見えてくる像を析出することで、従前の中世古文書研究の限界を突破し、新たな研究の地平を見出してゆく。

(2) 研究の実績

前年度の成果を踏まえて、計画調書に記した四つのテーマから研究を推進した。

①断片化した史料を対象とする調査情報の高度化研究では、「翻刻支援システム」を用いて、史料の体裁情報・テキスト情報を生成するとともに、前年度までに整えた規範に則り構造化を具現化した。あわせて生成データについては、「史料情報統合管理システム」をはじめとする史料編纂所歴史情報処理システム(SHIPS)データベース群へと展開し、汎用的に運用しうる環境整備に努めた。

②蓄積された知識情報の参照によるテキスト解析の高度化研究においては、前年度より継続してSHIPSIDB群から人名・地名などの歴史知識情報を抽出・蓄積する作業にとりくんだ。さらに史料集版面にOCRを施しテキスト化を進め、これに機械による固有表現抽出を実行することで、人名・地名情報の増強を図った。こうした情報の豊富化・多様化によってAIを用いた文脈解析の精度向上を進めることができた。

③中世逸失史料情報の復元研究では、前年度に続き『鎌倉遺文』『南北朝遺文』を対象として、史料テキスト上に出現する逸失史料につき、その検出・データ蓄積を推進した。これまでに「鎌倉遺文」からは約一五、〇〇〇件余、「南北朝遺文」からは約四、五〇〇件弱のデータ収集を実現し、総体として二万件の逸失史料を検出することに成功している。また、こうしたデータをSHIPSIDBにて有効に活用するための、公開手法について検討を重ねた。

④課題解決にむけた分業体制の確立と拠点機関間の連携研究では、継続して神奈川県立金沢文庫国宝金沢文庫文書データベースの収載コンテンツを強化するとともに(約四〇〇件追加)、SHIPS内のユニオンカタログDBとの連携を実践した。平行して①から③の研究成果を同文庫データベース上においても活用しうるよう、システム連携の強化を図ったところである。

神社所蔵文書・社家文書の一体把握による中近世賀茂別雷神社の総合的研究

一、研究費種目 科学研究費補助金 基盤研究(A)

二、課題番号 二二H〇〇〇一五

三、研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度(三年目)

四、研究経費 直接経費三九〇万円、間接経費一一七万円

五、研究組織

研究代表者 金子拓

研究分担者

加瀬直弥(國學院大学・野田泰三(京都橘大学)・藤本仁文(京都府立大学)・石津裕之(東京大学史料編纂所)

六、研究の概要

本研究は、中世から近世にかけての賀茂別雷神社(上賀茂神社、以下賀茂社と略記する)について、賀茂県主一族により構成される氏人惣中により支えられるという宗教領主のなかでも特徴的な人員構成のもと、中近世を通じて膝下地域を支配した賀茂社の所領支配・収取制度の特質と歴史の変遷、および氏人たちにより運営された祭祀神事の実態と歴史の変遷、また神事を通じて明らかとなる信仰文化の特質、宗教領主が時代を通じて存続するために行った政治権力者との交渉・接触など、多様な側面から賀茂社の歴史の実態

を明らかにすることにより、比較的長期にわたって存続した宗教領主を祭祀、政治、経済の面から総合的に明らかにするための研究の方法を構築するものである。

これを実現するために、賀茂社が所蔵する史料にとどまらず、同社を構成する氏人の家（社家）に伝わる史料を合わせ、総合的に調査・撮影およびそのデジタル化を行い、それらの目録を作成して、東京大学史料編纂所のデータベースから一体的に公開することにより、中近世における神社のなかでも稀にみる質と量を誇る賀茂社関係史料について、研究環境の基盤を構築する。

本年度は、昨年度に引き続き史料編纂所特定共同研究と合同で、賀茂別雷神社に二度出張し、賀茂別雷神社文書の撮影をおこなった。また、株式会社堀内カラーに賀茂別雷神社文書の撮影を委託し、デジタル画像の収集を進めた。さらに、賀茂別雷神社に関わる収集文書である「座田文書」について原本調査をおこない、目録作成を進めた。

これら収集した画像をもとに、氏人の花押画像の本所花押データベースへの登録を進め、これらの作業のため学術支援職員一名を雇用した。

今年度は、特定共同研究との合同で、オンラインでの研究会を一回開催した。また特定共同研究は最終年度を迎えたため、対面・オンラインのハイブリッドの公開研究会を開催した。

成果として、登録された氏人花押の画像を収めた『賀茂別雷神社史料別編氏人花押』を刊行し（編集責任者は研究代表者）、また、特定共同研究と合同で『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四―一―続々賀茂別雷神社の所領と氏人』を刊行し、科研としては中間報告的なかたちで研究成果を収めている。

荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究

- 一、研究種目 科研費補助金 基盤(A)
- 二、課題番号 二二H〇〇〇一六
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費八八〇万円、間接経費二六四万円

五、研究組織

研究代表者

井上聡

研究分担者

藤原重雄・岡本真・山田太造・菊地大樹・中村覚（以上史料編纂所）・守田逸人（香川大学）・渡辺晃宏（奈良大学）・高田祐一（奈良文化財研究所）・関野樹（国際日本文化研究センター）・榎原雅治（公益財団法人地震予知総合研究振興会）

六、研究の概要

（一）研究の目的

本研究は、東京大学史料編纂所が『日本荘園絵図聚影』編纂事業のなかで蓄積した古代・中世絵図情報をもとに、絵図史料群の総体が、いかなる歴史的展開を遂げたのかを明確にすること、および総体としてどのような空間認識に規定されていたのかを究明することを目的としている。また近年関心の高まる環境史・災害史等からのアプローチも踏まえて、新たな調査・分析方法の創出・提示を行うこと、あわせてこれまでに収集した膨大な絵図関連情報を、ネットワーク環境のもとで学界共有の研究基盤とすることも目指している。

（二）研究の実績

二〇二四年度研究実施計画にもとづき、前年度から引き続いて、以下の三課題の研究を推進した。

①荘園絵図調査・分析に関する新手法の提案と絵図群総体の展開過程に関する研究においては、前年度に引き続き、『日本荘園絵図聚影 釈文編』（東京大学出版会刊行）編纂にあたり収集してきた絵図調査データの整理・分析を進め、中世絵図群の展開過程や大局的な空間認識の在り方を検討した。かつまた「薩摩国日置北郷中分絵図」ほかの現地調査も実践し、個別絵図情報の補充・刷新も進めた。

②蓄積された調査情報の保全・秩序化とSHIPS内DBを活用した発信・共有研究においては、前年度までに機能強化を施した「地理情報システム」に、荘園絵図関連地理情報を登録し、さらにAPIを設けて、史料編纂所歴史情報処理システム（略称SHIPS）内で稼働する「史料編纂所所蔵荘園

絵図模本DB」「金石文拓本DB」「鎌倉遺文DB」などとの参照関係を強化した。

③オープンデータ環境における絵図情報の発展的活用と新たな研究資源の創出研究においては、「地理情報システム」の機能刷新を踏まえ、同システム上に検索専用のインターフェイスを構築し、時空間情報から史料編纂所が蓄積する膨大な歴史知識情報を直接探ることが可能になるよう整備を進めた。加えて当該インターフェイスを媒介として、奈良文化財研究所ほかと汎用的な情報連携を実現するために、具体的課題に即して調整を行った。なお絵図情報について東京大学に組織されたデジタル空間社会連携機構との共同研究にも着手し、文理融合研究の推進による新たな研究視角の創出を進めている。

「古文書科学」の応用実践

- 一、研究種目 科学研究費補助金基盤研究(A)
- 二、課題番号 二三H〇〇〇一一
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二七年度
- 四、研究経費 直接経費七六九万円、間接経費二九万円(繰越金を含む)
- 五、研究組織

研究代表者 渋谷綾子

研究分担者

石川隆二(弘前大学・大橋有佳(公益財団法人元興寺文化財研究所)・高島晶彦・尾上陽介・新井重行(以上東京大学史料編纂所)・後藤真・天野真志・小倉慈司(以上国立歴史民俗博物館)・野村朋弘(京都芸術大学)・阿兄雄之(独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館)

研究協力者

山田太造・中村覚・山口悟史(以上東京大学史料編纂所)・上條信彦(弘前大学)・富田正弘(富山大学名誉教授・大川昭典(元高知県立紙産業技術センター)・湯山賢一(元神奈川県立金沢文庫)・高橋修(茨城大学)・丹羽尉博(大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構)・鍾國芳(台湾・中央研究院生物多樣性研究中心)・國府方吾郎(国

六、研究の概要

立科学博物館

(1) 研究の目的

本研究は、原材料の科学的評価に注目し、自然科学的手法で蓄積してきた学理と人文科学的視点を融合した古文書の歴史研究「古文書科学」の実践プロジェクトである。研究では、先行研究の成果をふまえて以下を実施する。

- ①最先端計測分析技術による史料情報の体系的蓄積、②史料情報保存・活用技術の評価と将来予測、③地域社会への技術提供とユースケース開拓。歴史資料のもつ科学情報を多面的に収集・分析・モデル化し、社会的課題の解決を目指す。

(2) 研究の実績

二〇二四年度は、①原本史料の現況精査と構成物分析(渋谷・高島・大橋)、②カジノキにおける葉緑体DNA配列データの解析と論文化(石川)、③史料情報・計測分析データの資源化の検討(野村・尾上・小倉・新井)、④史料保存・修復等に関する研究・教育コンテンツの開発についての検討(天野・後藤・阿兄)、⑤機関連携・地域連携と新たな人材活用(渋谷)を実施した。

- ①・③では、東京大学史料編纂所蔵「国宝島津家文書」、東北大学文学部所蔵「白河文書」、那覇市歴史博物館・沖縄県公文書館・宮古島市総合博物館の所蔵史料、高知城歴史博物館所蔵土佐山内家史料、奥州市水沢図書館所蔵「留守家文書」、滋賀大学経済学部附属史料館所蔵「菅浦文書」、米沢市上杉博物館所蔵「国宝上杉家文書」、茨城県立歴史館所蔵関沢家紙見本を対象とした非破壊の調査・分析を実施し、修理・長期保存の技術改良や提供につながる科学情報の収集・分析を進めた。
- ④は二〇二四年度も継続して検討を行った。
- ⑤は他の共同研究と連携し、京都文化博物館・鳥取市歴史博物館の令和六年度特別展において①・③の成果を公開した。さらに、①・③の作業に携わった博士課程後期の大学院生が実績を活かし、二〇二五年四月から琉球大学の教員として職を得た。これは⑤の人材育成の一例である。

研究成果は国内外の学会・研究会等で報告するとともに、一般・学生向けの講演を行い、地域社会との連携や次世代育成のための取り組みの検討を進めた。具体的には「16th International Conference on X-Ray Microscopy」(二

〇二四年八月、於…スウェーデン）、第三四回日本資料専門家欧州協会年次大会（EARS、二〇二四年九月、於…ブルガリア）、第四〇回近赤外フォーラム（二〇二四年十一月、於…東京）などの国内外の学会での報告、泉大津市立図書館主催「地域の文化・歴史再発見講座」（二〇二四年八月）や熊本大学での授業（二〇二五年一月）などでの一般・学生向けの講演、松尾大社所蔵史料の目録データ整備の完遂である。

二〇二四年度の特筆すべき研究成果は、研究分担者大橋の研究成果（近赤外分光法による古文書の糊の分類と和紙中の米粉量の判定）が第四〇回近赤外フォーラムのBest Poster Awardを受賞し、二〇二五年六月にイタリア・ローマで開催される国際学会ZIR2025への参加を学会から推奨され、研究代表者渋谷と共著で成果報告を行う予定であること、ならびに研究分担者石川を責任著者とするコウゾ・カジノキのDNA解析結果の査読付き英語論文が国際誌へ掲載されたことという二点である。さらに、AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業等と連携し、京都文化博物館特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」（二〇二四年四月二七日～六月三日）、鳥取市歴史博物館令和六年度特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」（二〇二四年七月二〇日～九月一六日）においてこれまでの研究成果を展示として一般公開した。第三四回日本資料専門家欧州協会年次大会（EARS）では、在欧和古書保存ワーキンググループと連携し、欧州各機関が抱える歴史資料の保存・修理における問題に関する相談窓口を設置し公開した。これらの調査・分析と機関・事業連携の活動は今後も継続していく。

大型絵図類のデータ構造化と関連史料の連携による南西諸島「海上の道」の復元的研究

- 一、研究種目 基盤研究(A)
 - 二、課題番号 二三H〇〇六九八
 - 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二六年度
 - 四、研究経費 直接経費八八〇万円、間接経費二六四万円
 - 五、研究組織
- 研究協力者 黒嶋敏

研究分担者 岡本真・杉本史子・須田牧子・中村寛・畑山周平・渡辺美

季・上杉和央・片桐千亜紀・木土博成・松尾晋一・山田浩

世・屋良健一郎

研究協力者 安里進・麻生伸一・安達裕之・今井健三・高橋公明・村井

章介

六、研究の概要

本研究では、南西諸島を広域的に描き海事情報を記した一五世紀以降の絵図類を「海上の道」を記す「歴史航海図」と位置づけ、それらの学際的な比較検討および現地調査を通じて、前近代の海上交通の実態に迫ることを目的とする。とくに絵図類は、データを構造化することで多様な連携と分析が可能になることから、すでに公開している「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」を母体に、その機能拡充と汎用化を図り、複数の大型絵図や関連史料・地理情報を連携させた「海上の道デジタルアーカイブ」（仮称）を構築し、公開して研究基盤とすることを目指している。

研究期間の二年目となる二〇二四年度は、まず「歴史航海図」および関連史料の集積と検討として、兵庫県立歴史博物館、久米島博物館、鹿児島県と論町教育委員会、明治大学図書館（蘆田文庫）などの史料所蔵機関に赴き、調査・撮影を行った。とくに二〇二四年九月には台湾を訪問し、国立故宫博物院（本院・南院）、国立台湾博物館、国立中央研究院において、所蔵史料の閲覧調査を行った。また研究組織内で、問題関心・調査進捗状況を共有する意味を含め、年度中に合計四回の研究会を開催した（一部オンライン開催）。

次に、大型絵図類の研究基盤整備として、「一五世紀の日本図・琉球図デジタルアーカイブ」を構築し、二〇二五年三月より公開を開始した。このアーカイブは、本所所蔵「海東諸国紀」所収図および沖縄県立博物館・美術館所蔵「琉球国図」の画像をWEB上で公開するとともに、絵図に描き込まれた情報を分析するために構築されたもので、とくに原図を同じくしていると考えられる南九州から南西諸島にかけての図様は類似性が高く、両図を連携させて表示させる機能を搭載している。また「琉球国図」の画像公開にあたり、本所と沖縄県立博物館・美術館との間で研究協定を締結し、二〇二五年三月二五日に同館に於いて関連する記者発表を実施した。このほか、本所所蔵の

島津家文書に含まれている薩摩国絵図（正保・元禄の二鋪）についても、次年度のデジタルスキニング実施に向けた平滑化などの修補作業を行った。

さらに、「歴史航海図」に記されている海事情報の分析を現地の地理的情報を踏まえて分析していくために、沖縄本島北部にある伊平屋島・伊是名島での現地調査を二〇二四年一月に実施した。両島とも沖縄本島と奄美・日本方面を結ぶ航路の要地であり、海上交通に関連する絵図・史料も少なくない。現地調査にあたっては、屋良健一郎氏（名桜大学上席准教授）、嘉手納知子氏（伊平屋村教育委員会）、大城正泉氏（伊是名村教育委員会）の三氏に大変お世話になった。記して感謝を申し上げたい。

今後、研究最終年度となる二〇二六年度にかけて、史料研究・デジタル化・現地調査という大きく三つの作業を分担して行い、研究課題の遂行を図っていききたい。

近世書状史料群の研究と歴史情報資源化

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二二H〇〇六九一
- 三、研究期間 令和四年度～令和七年度
- 四、研究経費 直接経費一九〇万円、間接経費五七万円（令和六年度）
- 五、研究組織

研究代表者 松澤克行

研究分担者 荒木裕行（東京大学史料編纂所）・畑山周平（東京大学史料編纂所）・山本一夫（東京大学史料編纂所）

六、研究の概要

本研究は、近世の主要な文書史料であり、大量に残されているながら、相対的に利用されることが少ない書状について政治史的・史料学的研究を行い、一七世紀を中心とする近世史研究の進展を目指す。具体的には、東京大学史料編纂所に所蔵される島津家文書のうち、書状を中心とした文書を巻装した「御文書」と、公益財団法人陽明文庫が所蔵する近衛家文書など、群として伝来した近世の武家・公家の書状を、それらが属する史料群との関係に留意

しながら政治史的・史料学的に研究する。また、「御文書」の近世部分のほか、巷間に所在する書状史料群（個人コレクション）をデジタルデータ化し、画像のデータベース公開や目録作成・研究・紹介などの歴史情報資源化と研究を行い、学会・社会への提供を目指す。

今年度の実績は次の通りである。

(一)前年度に続き、東京大学史料編纂所が所蔵する国宝島津家文書「御文書」のうち、近世分で未撮影のものについてデジタル撮影を進めた。今年度は「御文書 忠国公・立久公・勝久公・忠良公・貴久公・義久公一（三十一通）」（S島津家文書一九一）から「御文書上包紙五」（S島津家文書一九一―一五）までの一五巻四五九通について、一億五、〇〇〇万画素の高精細デジタル撮影を行った。

(二)個人コレクションの書状史料群を一三〇点、デジタル撮影を行い蒐集し、その史料目録と一部の釈文を作成した。

(三)陽明文庫・京都徳力版画館・岡山県立記録資料館・岡山市立中央図書館・広島県立文書館・徳島県立文書館・福岡市総合図書館・柳川古文書館・熊本県立図書館・都城島津邸・鹿児島県立図書館に出張し、近世史料の調査を行った。

(四)研究分担者の畑山周平が、山形県の鶴岡市郷土資料館で講演「戦国時代の地域権力論」（令和六年度郷土史講座、令和七年三月八日）を行い、研究分担者の山本一夫が、社会経済史学会第九三回全国大会で口頭報告「近世の倉庫金融と米穀流通―津山藩銀札場の事例から―」（令和六年五月一日）を行った。

(五)研究代表者・研究分担者による主な研究論文等は以下の通りである。

①松澤克行「近世前期の朝廷と文化」牧原成征編『日本史の現在 四 近世』山川出版社、二〇二四年六月

②荒木裕行「東京大学史料編纂所所蔵「松平乗全関係文書」中の画像史料」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』一〇五、二〇二四年九月

③荒木裕行「書評に答える」小野将編『日本近世史を見通す七 近世史から考える』二〇二五年二月、吉川弘文館

④荒木裕行「討論「近世史の課題」小野将編『日本近世史を見通す七近世から考える』二〇二五年二月、吉川弘文館

⑤畑山周平「史料編纂所所蔵島津家本『面高真連坊頼俊日記』について」『東京大学史料編纂所研究紀要』第三五号、二〇二五年三月

⑥山本一夫「近世西国大藩における米穀流通―鳥取藩の米切手に注目して―」『史学雑誌』第一三三編第四号、二〇二四年五月

幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史料学の構築

一、研究種目 基盤研究(B)

二、課題番号 二三K二五三五一

三、研究期間 二〇二三年度～二〇二六年度

(二〇二四年度から区分が基金に変更、それ以前の課題番号は二三H〇〇六五四)

四、研究経費 直接経費四八一万円、間接経費九〇万円(繰越金を含む)

五、研究組織

研究代表者 谷昭佳

研究分担者 箱石大・保谷徹(東京大学・名誉教授)・高橋則英(日本大

学・上席研究員)・遠藤榮子(東京国立博物館・主任研究員)・宇都宮正紀(奈良大学・アソシエイトフェロー)

六、研究の概要

前年度に引き続き、各地に点在するオリジナルの幕末明治初期古写真の調査とその解析を中心に取り組んだ。また、ガラス板の写真油絵の復元研究、ガラス板写真の保全に関する調査と実践に取り組んだ。主な研究活動の内容と成果は以下であった。

古写真調査および保全等…①鹿児島県下所在古写真コレクションの調査・高精細撮影を行った。②海の見える杜美術館にて、中嶋待乳関係古写真調査およびガラス板写真の保全作業を行った。③鳥取市所在古写真関係資料の調査およびオートクローム写真に対する顕微鏡撮影を行った。④小値賀町立歴史民俗資料館にて、同館所蔵ガラス乾板調査及び保全作業を行った。⑤柏原

美術館所蔵古写真の調査および大判ガラス乾板の保全作業を行った。⑥岩国徴古館所蔵古写真資料の調査を行った。

解析研究等…①海の見える杜美術館所蔵の中嶋待乳関係古写真コレクションの目録整備および画像解析研究を行い、その成果として東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四一八『中嶋待乳関係古写真資料の調査と研究』を刊行した。②鍋島報効会徴古館にて、調査成果公開に向けた補充調査・撮影および目録整備作業を行った。③横浜開港資料館所蔵の木村喜毅(芥舟)関係古写真コレクションに関する目録整備および画像解析研究を行い、その成果として東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二四一七『木村喜毅関係古写真資料の調査と研究』を刊行した。

復元研究等…現在では幻の技法となっているガラス板写真油絵について、一八八五(明治一八)年に小豆澤亮一が申請した特許内容を基にして、その技法の復元に取り組んだ。この復元の取り組みを動画で記録して、劣化が進んでいるオリジナルの写真油絵の修理・保存の方策の検討資料としてまとめた。その他…ワークショップ「写真の技法識別と取り扱い・保存」を東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター・同センター古写真研究プロジェクト・JSPS科研費(二三K二五三五一)の共催、文化庁後援により、二〇二四年八月五～七日(三日間)を開催した。全国からオンライン講義と対面による実技講習を合わせて八五名の参加を得た。

十六世紀西日本港町の構造と相関―文献・考古学資料の国際・横断的分析による―

一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(B)

二、課題番号 二三H〇〇六六三

三、研究期間 二〇二三年度～二〇二六年度

四、研究経費 直接経費四九〇万円、間接経費一四七万円

五、研究組織

研究代表者 岡美穂子

研究分担者 渡辺芳郎(鹿児島大学)・鶴島博和(熊本大学)・伊藤幸司(九州大学)・関周一(神戸女子大学)・藤田明良(天理大学)・

太田淳（慶應義塾大学）・鹿毛敏夫（名古屋学院大学）・佐藤由似（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）・鷺頭桂（国立歴史民俗博物館）

六、研究の概要

本研究では、日明貿易、南蛮貿易などを研究してきた文献研究者が多く集い、港町での交易関係品発掘調査などを牽引してきた地元自治体の研究者らと相互に知識を共有することで、主に九州と畿内を結ぶ交易網の特徴や物流の実態、その中で重要な役割を果たした港町の構造をダイナミックにとらえる。各関係自治体の文化財、文献研究者に積極的な参加を促し、自治体の垣根を超えたネットワークを形成することで、新たな知識体系を共有することが目的である。また日本史だけではなく、東南アジア島嶼部、同じく島国であるイギリスの海域史を専門とする研究者が参加することで、西日本の港町の特徴や、それらの地域との共通性、差異等が明らかになる。

二〇二四年度は、戦国時代にとりわけ交流が盛んになったタイにおいて、日本で発掘される様々な遺物の現地での生産状況を調査した（八月末～九月初旬）。とくに沖縄や九州で非常に多く発掘されるメナムノイ窯、シーサツチャナライ窯産の陶磁器の産地並びに、十六世紀に世界最大級の鉛の産地であったと考えられるソントー鉱山連山の鉛採掘坑道跡（ドクターボン・クリーブア鉱山跡）を訪問した。メナムノイ産の陶磁器、とりわけ壺は沖縄と九州から堺辺りまで広範囲に確認されている。堺の発掘調査によって大量のメナムノイ窯の壺が出土しているが、これらの中には黒漆と思われる物質のコンテナであったことを研究協力者の續伸一郎氏が明らかにしている。近年では五島列島の小値賀島内及び近海でメナムノイ窯の壺が非常に多く出土しており、タイ⇨日本間の交易はよく知られる朱印船貿易以外にもかなりの頻度で行われていたことが分かってきた。また古都スコータイの近隣に位置するスワンカロック窯跡、ならびにシーサツチャナライ窯跡を訪問し、日本では両者が異なる陶磁器を生産したと考えられがちであるが、実際には同様の陶磁器を生産しており、両者を厳密に区別することは難しいという見解が出された。これらの陶磁器は河川交通を利用してシヤム湾に近いアユタヤ近辺の港まで運ばれていたことが想定され、内陸から港湾への流通ルートを詳細に

実見することができた。近年の鉛同位体比分析調査において、戦国時代に使われた鉛の多くがタイ産であったことが判明している。研究協力者の坪根伸也氏や後藤晃一氏が豊後府内遺跡から発掘される鉛のインゴットやメダイ等をこれまで科学分析しており、これらの同位体数値との比較検討もおこなった結果、ソントー産鉛とされているものは、実際に今回の調査地であるドクターボン・クリーブア鉱山の鉱石とも同じ数値を示しており、タイからミャンマーにかけて同じ鉱脈が存在するものと推定される。

上述のタイでの調査報告及び研究成果報告として、一二月二八日にオンラインで研究会を開催した。内容としては次のものである。柴田圭子（愛媛県）『明代龍泉窯青磁の研究』の論点と課題」中山圭（天草市）「熊本県内出土のタイ陶磁器について」タイ陶磁器窯跡の調査報告も兼ねて「山手貴生（大田市）「タイの鉛鉱山調査と世界の鉱山史跡」。また近年、長崎県の横瀬浦で発掘調査を進めている中島金太郎氏（江戸川大学）に依頼し、「発掘調査から見た近世の横瀬浦」（二〇二五年二月二八日）という題目で最新の研究状況をレクチャーしていただいた。さらに東京大学史料編纂所の特定共同研究「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」と共催で国際セミナーを開催し、フランス高等研究実習院からドウジャニラ・コウト氏を招聘し、ポルトガル領インディアに関する文献学的な研究の全体像を提示いただいた。

維新政府による朝廷・幕府・諸藩を源流とした文書行政の解明と関連史料群の学術資源化

- | | |
|--------|--|
| 一、研究種目 | 基盤研究(B) 基金 |
| 二、課題番号 | 二三K二五三六一 |
| 三、研究期間 | 二〇二三年度～二〇二七年度 |
| 四、研究経費 | 直接経費二二〇万円、間接経費六六万円 |
| 五、研究組織 | |
| 研究代表者 | 箱石大 |
| 研究分担者 | 水上たかね（東京大学史料編纂所・助教）・宮間純一（中央大学文学部・教授）・村和明（東京大学大学院人文社会系研 |

史料研究・成果公開

研究協力者

天野真志（国立歴史民俗博物館研究部・准教授）・石田七奈子（港区教育委員会・文化財保護調査員）・柏原洋太（千葉県文書館・主事）・菊地智博（東京大学史料編纂所・助教）・佐藤大悟（青山学院大学青山学院史研究所・助教・渋谷綾子（東京大学史料編纂所・特任助教）・白石烈（宮内庁書陵部編修課・主任研究官）・高島晶彦（東京大学史料編纂所・技術専門職員）・立石了（東京大学史料編纂所・助教）・長坂良宏（国立公文書館・公文書専門官）

六、研究の概要

- (1) 研究の目的（『所報』第五九号、一三八頁参照）
- (2) 研究の計画・方法（『所報』第五九号、一三八頁参照）
- (3) 二〇二四年度の研究実績

〔維新政府の文書行政システムに関する調査・研究〕

福井市立郷土歴史博物館所蔵「福井市春嶽公記念文庫」を調査し、同文庫中の議定時代における松平慶永の日記類が、維新政府の文書行政システムを解明するための重要史料群であることを確認した。熊本大学附属図書館所蔵「横井小楠文書」の調査では、小楠の参与時代における維新政府関係文書とともに、他に類例を見ない遺品である小楠所用の「御用状箱」を見つけた。また、海の見える杜美術館において、同館所蔵「岩倉具視関係史料」の関連史料として、旧蔵者の榎原家で作成された卷子本「功臣遺墨」・「鳳池余滴」等の写本・翻刻本の調査を実施し、仮目録（未定稿）を作成した（総数・写本二六冊・翻刻本四六冊）。今回の調査により、これらの写本・翻刻本は、成巻以前の文書の形状を復元し得る貴重な史料であることが判明した（水上たかね「海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」二〇二四年六月調査報告―文書の形状変更とその復元―」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第一〇五号、参照）。

〔維新政府による文書行政の源流となった朝廷・幕府・諸藩における諸慣行の調査・研究〕

朝廷については、近世後期・幕末維新期における朝廷の六位蔵人が扱った

政務に関する文書原本を豊富に含む東京大学史料編纂所所蔵「北小路家文書」の詳細目録データ入力作業が完了した（総数三、三四五件）。諸藩については、松代藩真田家文書の調査・分析を行ない、その成果の一部を、共同研究参加者による研究会（二〇二五年三月三日、オンライン開催、宮間純一報告・松代藩真田家文書にみる明治初期の「決裁文書」）において共有した。

〔関連史料群の学術資源化〕

海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」について、卷子本の「功臣遺墨」（全一五六巻）と「大坂行幸」（全四巻）のデジタル写真撮影が完了し、引き続き卷子本「鳳池余滴」のデジタル写真撮影を進めた（第一五巻まで完了）。また、既撮影分画像データのウェブ公開準備作業を継続した。

なお、公表した研究成果は、以下の通りである。

〔論文等〕

水上たかね「海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」二〇二四年六月調査報告―文書の形状変更とその復元―」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第一〇五号、二〇二四年九月）

箱石大「新発田藩翻刻『京都府下人民告諭大意』の板木」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第一〇六号、二〇二五年一月）

宮間純一「一宮藩の戊辰戦争」（『一宮町史研究』第一号、二〇二五年三月）

〔図書〕

アーカイブズ学用語研究会（宮間純一ほか）編『アーカイブズ学用語辞典』（柏書房、二〇二四年七月）

〔研究発表〕

村和明「近世朝廷における日記について―空間と感情表現を中心に」（『愛知学院大学文学部人間文化研究所プロジェクト「日本人と日記」第一六回「最近の日記研究成果から」愛知学院大学、二〇二五年二月二二日）

〔講演・講座〕

水上たかね「後方から見た戊辰戦争―明治新政府の兵站と「御威光」―」（文京アカデミア講座「『東京大学史料編纂所協力講座』日本史のなかの戦争」第五回、文京シビックセンター、二〇二四年六月二九日）

水上たかね「後方から見た戊辰戦争―明治新政府の兵站と「御威光」―」（愛知学院大学文学部人間文化研究所プロジェクト「日本人と日記」第一六回「最近の日記研究成果から」愛知学院大学、二〇二五年二月二二日）

朝廷については、近世後期・幕末維新期における朝廷の六位蔵人が扱った

きたスマートカレッジ「東大史料編纂所協力講座」日本史のなかの戦争
 Ⅲ 第四回、秋田県生涯学習センター（講師リモート）、二〇二四年一〇
 月（一九日）

摂関家伝来大規模史料群の目録精緻化による構造の解明と研究資源化

- 一、研究種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二三H〇〇六六五
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二七年度
- 四、研究経費 直接経費二九〇万円、間接経費八七万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 尾上陽介
- 研究分担者 藤井譲治（京都大学）・遠藤珠紀・林晃弘

六、研究の概要

(1) 研究の目的

本研究課題は、古代より近代に至るまで政治権力の中核にあった摂関家に伝来した大規模史料群について、原本調査に基づく目録情報の精緻化を進めることにより摂関家文庫の構造を解明するとともに、未知の史料の発掘と高精度デジタル画像の整備・公開による研究資源化を進めることを目的としている。

具体的には、摂関家のなかで唯一、伝来史料群がまとまって現存する近衛家の陽明文庫所蔵史料を主な研究対象とし、これまで紙の目録上で不完全なままとりとなっていた史料、たとえば近世の歴代当主や当主夫人の日記、各種の家司日記などを中心に原本調査を行い、史料の内容や性格などの情報を精緻化して目録データ上に書き加えることにより、バーチャルな環境で本来の存在形態を復元し、改めて史料群全体の構造を解明する。悉皆的調査を進めるなかで未知の史料の発掘にも努め、重要史料については研究資源化を進めることで新たな知見を生み出す。

(2) 研究の実績

歴代当主の日記では、引き続きまとまって保管されている『近衛篤磨日記』

の原本全三七冊（史料番号霞一～三七）を調査し、挟み込まれた関連文書を含めて全冊の高細デジタル撮影を進め、二〇二四年度には第一五冊以降の二三冊分、計五、七二一コマの撮影を行った。二〇二三年度分と併せると、全体では一〇、二〇六コマとなる。なお、『近衛篤磨日記』全体の調査を進める過程で、大正末期には存在が知られていた一部の原本が現在まとまっている部分から別になってしまっていることが判明した。今後、この部分についても引き続き調査を進める予定である。

画像データについては陽明文庫の許可を得た後に、東京大学史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）の大型画像サーバにアップロードし、順次、デジタル史料検索・閲覧システム（Hi-CAT Plus）等により史料編纂所図書室内端末からの公開を進める。また、陽明文庫にもデータを提供することにより、『陽明文庫デジタルアーカイブ』等からの公開にも備える。

当主夫人の日記では、近衛経熙夫人の有栖川宮董子女主の『円台院殿御日記』原本二七冊や、近衛忠熙夫人郁姫（島津興子）の『常興善院殿御日記』原本一〇冊について、各冊の内容や体裁などの書誌データの把握に努めた。これらは数少ない当主夫人の日記原本として貴重なものである。

また、近衛家家司の日記では、明治初期の「近衛家御勝手掛」の原本について調査に着手するとともに、明治期の近衛家蔵書目録類についてもデジタル撮影を行った。継続的にその内容を分析することで、各種目録中に見られる『御用部屋日記繰出』『取次所日記』『御用雑記』『御次日記』『御用部屋御留守中日記』『奥日記』『中奥日記』『北奥日記』『桜木殿雑事日記』『桜木御殿御祐筆間日記』『桜木奥日記』などの、多様な表題の冊子からなる家司日記全体の構造の解明を進めている。

近衛家伝来史料の悉皆的調査の過程で得られた個別重要史料の知見については、随時公開することに努めている。二〇二四年度においても、戦国武将加藤清正の病氣を見舞う内容の近衛信尹書状案や、『近衛篤磨日記』の書誌や日記筆録形態、近衛家のなかでいかに長期間にわたって故実が継承されてきたのかを示す記事などについて、一般向けの『陽明文庫講座図録』六号に紹介した。

東アジア歴史資料の学術資源化と保全に関する国際交流の推進研究

- 一、研究種目 基盤研究(B)
- 二、課題番号 二四K〇〇〇九八
- 三、研究期間 二〇二四年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費二六〇万円、間接経費七八万円
- 五、研究組織

研究代表者 杉森玲子

研究分担者 天野真志(国立歴史民俗博物館)・築瀬大輔(群馬県立女子大学群馬学センター)・今村直樹(熊本大学永青文庫研究センター)・箱石大(史料編纂所)・黒嶋敏(史料編纂所)

六、研究の概要

(一) 研究の目的

日本・中国・韓国など東アジア諸国の歴史資料は、素材や形状で共通する部分が多く、研究・編纂に基づく学術資源化とその保存・保全の方法について、各国の研究者・研究機関との間で国際交流・情報共有を進めることの重要性・必要性はこれまで以上に高まっている。本研究では、これらを東アジア歴史資料という大きな枠組みから把握したうえで、その原本研究の成果を含む歴史資料情報を学術資源化するとともに、これらを地震・火山噴火・津波・風水害などの自然災害から保全するための実践的な方法の研究を、災害史・復興史・防災史研究の知見も取り入れながら推進し、東アジア歴史資料全体にとっても有益で共有可能な日本側から発信できる方法の提示を目指す。こうした成果を基に、日本・中国・韓国の歴史資料を扱う研究機関に所属する研究者を招聘した国際研究集会を開催し、本研究による成果を国内及び中国・韓国側にも発信して相互交流を図り、この分野における国際交流・情報共有の推進に貢献する。

(二) 研究実績

本年度の研究実績は以下の通りである。

- ① 歴史資料情報の学術資源化とその保全に関する実践的方法の研究
- ・ 原本研究の成果を含む歴史資料情報の学術資源化の実践

東京大学史料編纂所所蔵「上田久兵衛関係文書」のうち上田久兵衛自筆日記類のデジタルデータ(四五五コマ)を作成した。

・ 関連史料及び保全事例の調査

史料ネットによる歴史資料の保全に実績を持つ群馬県に赴き、主に天明三年浅間山噴火に関連する諸施設で、歴史資料の保存・保全活動に関する情報収集を行った。

② 国際交流・情報共有の推進

本研究の成果をもとに、日本・中国・韓国の歴史資料を扱う研究機関に所属する研究者を招聘した国際研究集会を二〇二五年に日本で開催する予定である。それに向けて、「アジア歴史資料の保全と学術資源化」をテーマとして、日本側参加者による準備報告会を開催し、報告者五名が、歴史資料の学術資源化とその保全に関する研究、災害史・復興史・防災史に関する研究、史料の保全活動の実践に関する研究などの成果について発表した。また、中国・韓国の歴史資料を扱う研究機関に研究報告を依頼した。

幕末維新期史料研究の学術資源化推進と国際共有基盤の新展開

- 一、研究種目 基盤研究(B)基金
- 二、課題番号 二四K〇〇一〇八
- 三、研究期間 二〇二四年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費五六〇万円、間接経費一六八万円
- 五、研究組織

研究代表者 小野将

研究分担者 箱石大(史料編纂所・教授)・福岡万里子(国立歴史民俗博物館・准教授)・水上たかね(史料編纂所・助教)・立石了(同・助教)

六、研究の概要

(一) 研究の目的

本研究の目的は、従来十分に活用されてこなかった大規模史料群について、史料学的見地にもとづく本格的な解析を行い、もって幕末維新期の政治

外交史研究について新たに着実な寄与をもたらす点にあり、あわせて基礎的な学術情報の資源化をすすめる、国際的な研究基盤を維持・発展させることも目的とする。このため、「外務省引継書類」をはじめとする史料群についての原本修理とデジタル撮影を進め、その画像データをウェブ上で公開する。さらには史料情報の共有目的のため、『大日本古文書 幕末外国関係文書』のように紙媒体による基幹的な史料集の編纂をはじめ、電子データ生成、データベース構築といった、収載内容のウェブ公開に至る全プロセスについての、さらなる高度化を目指す。関連して、「維新史料綱要データベース」のような既存学術データの英訳をすすめて国内外に発信し、国際的な研究者間のネットワークに連なる研究基盤を維持・発展させる。

(2) 研究の計画・方法

〔幕末維新期史料群の学術資源化〕

東京大学史料編纂所所蔵の特殊蒐書「外務省引継書類」を主要な対象として、簿冊数点の解体修理が必要に応じて実施し、これらの原本を素材として、史料学的な調査・分析を行ってゆく。また、修理の過程も含めて可能な限りデジタル写真の撮影を実施し、同時に生成された画像データをウェブ上で公開するため、史料編纂所の電算システムにおいて、所定のデータベース上にこれらを格納し、公開を期す。こちらは、「所蔵史料目録データベース」上での記述を充実させる方向である。関連して、幕末維新期の外交に関わる重要な史料を所蔵する機関を対象とする出張の調査をおこない、当該期についての史料編纂事業や、本研究計画を遂行する上での確実な知見を得たうえで、史料情報の公開に反映させることを、併せて目標とする。

〔幕末維新期史料情報共有の高度化研究〕

基幹的史料集としての『大日本古文書 幕末外国関係文書』を基軸として、紙媒体の史料集編纂・出版、公開用電子データの生成、以上を登載するデータベースの構築といった一連の工程を、研究の進捗に応じてより高度化させ、幕末維新期の史料群を学術資源化する標準的な方法の確立に向け、研究を進める。編纂内容におけるデータの取扱いについては、史料編纂所の「近世史編纂支援データベース」との協業を予定している。

〔幕末維新期史料情報の国際共有推進〕

既に幕末維新期史料研究の基幹的なデータベースとして評価を確立している「維新史料綱要データベース」に収載されている、網文データの英訳を進め、史料編纂所のシステムを介して国内外に発信する。これにより、編年での年表形式をとる詳細な事件史のデータが、人名・地名等といった重要な項目と併せて、英語によってもデータベース上で検索可能となる。また、邦文の英語への翻訳という研究事業に附随しては、グロッサリー研究を目的として必要なデータを生成し、国内外における日本史研究の基盤強化をめざす。以上に関連しては、国際研究集会のオンラインでの開催を期し、海外の幕末維新史研究者との研究交流を更新し、あわせて本研究への助言を得たうえで、研究成果の向上につとめる。

(3) 二〇二四年度の研究実績

〔外務省引継書類の撮影と公開〕

本年度は外務省引継書類のうち、まず絵図類の撮影をおこなった。これにより所内で従来着手されていた、同一、〇五七番史料を対象とした撮影を完成できたので、その全体をデジタル画像として、「所蔵史料目録データベース」を通じて公開する準備段階に到達している。

なおこちらの事業は、本所の一般共同研究「幕末外交研究の高度化と関連史料の資源化および展示公開」研究組織と緊密に連携したうえで推進した。共同共同研究は、外務省引継書類をふくむ多くの史料の展示公開に直結する内容であり、本研究組織でも、横浜開港資料館主催の特別展示「外国奉行と神奈川奉行」（九月―十一月開催）につき、全面的に協力するとともに、関連する事業でも研究成果の一部を発表している（後掲）。小野は、発表した論文において、外国奉行の統括した幕府部局の外国方で処理・管理をおこなっていた文書について検討をおこない、概説を著している。

〔史料集編纂と成果公開〕

本研究では、成果公開の一環として本所出版物の史料集上梓を位置づけている。『大日本古文書 幕末外国関係文書』巻之五十五の刊行（二〇二六年予定）に向けて様々に検討をすすめる、外務省引継書類のほか、開港場支配にあたった三港奉行所といった幕府諸機関、ロシア海軍と対峙した対馬藩藩庁といったまさしく幕末外交の現場で作成された史料群について、条約締結各

国での在外日本関係史料とも対照させながら、検証作業をすすめている。

〔維新史料綱要データベースの拡充と国際発信〕

史料編纂所において蓄積されてきた学術資源としての史料データを基盤として、従来の研究成果を継承しつつ、維新史料綱要データベース登載の網文データにつき、英訳作業をすすめている。今年度は学術専門職員の及川将基・加藤絵里子両氏の協力を得て、英訳データの成果公開とグロッサリ作成につき、データ蓄積を進めてきている。この成果は順次、維新史料綱要データベースに反映される。

また付随して、同データベースに登載の書目『改訂肥後藩国事史料』および『加賀藩史料 藩末篇』の網文データについても、ウェブ上での公開を実現している。

なお、公表した研究成果は以下の通りである。

〔図書（著作出版物）〕

小野将編『日本近世史を見通す 7 近世史から考える』（吉川弘文館、二〇二五年三月）

〔論文等〕

小野将「幕末期の外国方と外交文書」（横浜開港資料館編『外国奉行と神奈川奉行』、横浜市ふるさと歴史財団、二〇二四年九月）

福岡万里子「シーボルト『日本からの公開書翰』（上）第一・第三公開書翰」（『国立歴史民俗博物館研究報告』二五四号、二〇二五年三月）

同「幕末の外国方と日米関係 下田・江戸のハリスからの視点」（前掲『外国奉行と神奈川奉行』掲載）

〔講演〕

小野将「幕末期の外国方と外交文書」（横浜開港資料館、二〇二四年一〇月）

福岡万里子「ハリスからみた幕府外国方」（横浜開港資料館、同年一〇月）

水上たかね「後方からみた戊辰戦争 明治新政府の兵站と『御威光』（公益財団法人文京アカデミー、同年六月）

なお、本研究の遂行にあたっては、学術専門職員犬飼はなみの協力を得た。

「原本史料情報解析」の手法による益田家文書を中心とした中世武家文書の史料学的研究

一、研究種目 基盤研究(B)

二、課題番号 二四K〇〇一〇九

三、研究期間 二〇二四年度～二〇二七年度

四、研究経費 直接経費三三〇万円、間接経費九九万円

五、研究組織

研究代表者 村井祐樹

研究分担者

本郷恵子・西田友広・小瀬玄士・高橋典幸（東京大学）長谷川博史（島根大学）・守田逸人（香川大学）・山田貴司（福岡大学）

六、研究の概要

本研究は中世の西国武家文書たる史料編纂所所蔵『益田家文書』を中心に、文字テキストの読解から史実を確定するだけでなく、数百年にわたって伝来してきた原本史料の軌跡をさまざまな角度から検証する「原本史料情報解析」の方法を適用し、史料の持つ豊かな情報を最大限あきらかにしようとするものである。『益田家文書』をはじめとする中世西国武家文書の解体修理過程で取得した、料紙の質や墨の種類、損傷の状態、表装の経緯等のオリジナルのみが持つ形態的情報を精査する。さらに西国武家文書へと対象を拡大し、調査・デジタル撮影を実施する。自治体や博物館等と連携することで、成果の発信・地域史料の保全へとつなげることを目指す。

本年度は西日本の武家文書を中心に、関連する他地域の史料も調査し、高精度デジタル撮影を行った。調査先・史料は以下の通り。

①島根県出雲市／北島文書・島根県立古代出雲歴史博物館所蔵文書・富文書・坪内文書

②福岡県太宰府市／九州国立博物館所蔵文書・古文書手鑑…同県朝倉市／品照寺文書・大河内文書

③広島県呉市／個人所蔵文書

④兵庫県赤穂市／個人所蔵文書

⑤山口県萩市／桂文書・萩博物館所蔵渡辺文書・田総文書…同県山口市山口

県文書館所蔵熊谷文書・佐世文書・都野文書・波多野文書・野尻文書

⑥愛媛県西予市／愛媛県立歴史文化博物館・同県今治市／国分寺文書・能寂寺文書・能島村上文書・俊成文書・村上海賊ミュージアム所蔵文書

⑦広島県福山市／広島県立歴史博物館所蔵文書・常国寺文書

⑧岡山県岡山市／岡山県立博物館寄託安養寺文書・龍昌寺所蔵文書・来住文書・同県高梁市赤木文書⑨栃木県佐野市／唐澤山神社所蔵佐野文書⑩長野県千曲市／長野県立歴史館所蔵・寄託文書

また本研究の中心の対象史料である『益田家文書』のうち第3・6・14・15・16巻の解体修理に伴う、料紙の詳細研究を行い。各データの集積・分析を行った。その結果、これまで原本とみなされていた「永徳三年二月十五日足利義満御判御教書」「五月十五日付足利義政御内書」「十月廿三日付足利義親御内書」「十月七日付足利義親御内書」「嘉吉元年七月四日付室町幕府御教書」「八月廿九日付細川持之書状」「六月十七日付細川勝元書状」「六月十八日付細川道賢書状」等多くの文書が、中世京都では類例の見られない美濃紙系楮紙が使用され、かつ時代が離れているにもかかわらず、同種の料紙であることが判明した。一方で、継続して解体修理・調査を行っている「入来院家文書」においても、原本とされていた文書が案文・写であることが明らかになっていて、武家文書群の編集・伝来について再検討の必要性が浮かび上がった。

さらに①大覚寺所領具書案（4紙・南北朝～室町時代）②雑質文書（2通・戦国～近世）③木瀬文書（1通・戦国時代）などの史料を発見・購入した。加えて、水戸市立博物館の依頼により、西国武家文書を多く含む、同館寄託史料「戦国武将書翰集」（15通）を解体・養生し、編纂所内で撮影のうえ内容・来歴等を検討した。これらの史料の撮影・検討を通じて、研究資源化を図るとともに、西国武家の権力構造や相互の連携状況等の分析を進めた。なお「戦国武将書翰集」については、研究成果をもとに、同館特別展に協力し、関係者用の図録を刊行することもできた。

日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二〇K〇〇九三三
- 三、研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 遠藤珠紀
- 六、研究の概要

本研究課題は、鎌倉期から室町期を中心に、古記録の収集及び総合的な検討を行い、トータルな形で中世朝廷における情報の流れや政務運営システムの検討を試みるものである。その遂行のため本研究課題の研究計画は大きく二つの柱をたてた。まず古記録の所在（原本・写本の所在）を調査し、特に重要なものは史料の性格を明らかにし、翻刻・フルテキストデータベース作成などの歴史情報資源化を行うこと。二つ目として、これらの知見を生かして当該期の政治史・制度史等の考察を行うことである。

本年度は、国立歴史民俗博物館・早稲田大学・京都市歴史資料館などに赴き調査を行った。各調査先には、ご高配を賜り感謝する。これらにより早稲田大学図書館所蔵『宣教卿記』紙背文書、国立歴史民俗博物館所蔵『綱光公記』、同所蔵『勘仲記』などの翻刻、紹介を行った（いずれも共著）。

史料調査を踏まえた政治史的検討としては以下のものなどがある。中世の貴族社会の変化を概観した「中世の貴族社会」（高橋典幸編『日本史の現在3中世』山川出版社）、「羽柴秀俊の小早川入嗣について」（『古文書研究』九八号）、「日本中世の人びとはどのように宇宙を眺めたか」（139回東京大学公開講座）などを発表した。二点目は豊臣秀吉の養子であった羽柴秀俊（のち小早川秀秋）が、小早川家に養子に入る政治状況を追ったもの、三点目は技術官人たちと社会のかかわりを題材にしたものである。

東アジア墓葬文化の伝播と展開―金石文資料の形態的分析を中心に―

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八三七
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二五年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円 間接経費二四万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 稲田奈津子
- 六、研究の概要

本研究は墓誌・買地券といった金石文資料を中心に、その形態的特徴に注目しつつ、墓葬文化の東アジア世界への伝播と受容・変容の過程について考察するものである。

本年度は、四月に中国の杭州・南京に赴き、墓葬史跡の踏査や浙江省博物館・南京博物院・南京市博物館での金石文調査を実施した。七月には韓国慶北大学校において「東アジアの買地券」と題する講演をおこない、あわせて地元研究者の協力のもと、断石山摩崖仏・蔚州川前里書石・東国大学校博物館・慶州国立博物館での調査を実施した。八月には和氣清麻呂墓（京都市京都市）、九月には土塔（大阪府堺市）の踏査をおこなった。

東アジア比較文化史の観点からとりくんだ古代塗料「金漆（黄漆）」の研究に関して、九月に明治大学において「発見された黄漆―韓国における研究・活用について」と題して口頭報告し、書籍『幻の塗料「金漆」とその復元』にコラムを執筆した。同じく比較史研究の観点から、中国政法大学において「喪葬令」・身喪戸絶・条所見女性財産権」と題して口頭報告した。そのほか正倉院宝物図に関して、米国プリンストン大学において「The Production and Use of Drawings of Shoson Treasures' in Bakumatsu and Meiji Periods」と題して口頭報告した。

金石文資料の研究には拓本の検討が有効である。これは現物調査が難しい場合の代替手段となるだけでなく、現在は風化などにより失われた情報が読み取れる場合があり、また古い拓本自体が史学史的価値を持つ場合があるためである。そこで東京大学内の複数の研究室が所蔵する金石文拓本を、研究

室スタッフおよび研究協力者とともに調査した。膨大な点数に及ぶため本年度は概要を把握するにとどまったが、次年度以降に撮影を含めた調査を計画している。

徳川政権による公儀の確立と城郭建設―無年号文書から公儀普請を読み解く―

- 一、研究種目 科学研究費補助金 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八七二
- 三、研究期間 二〇二二年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費一〇〇万円、間接経費三〇万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 及川亘
- 研究協力者 宮協啓（東京大学大学院人文社会系研究科博士課程・学術専門職員）

六、研究の概要

(一) 研究の目的

本研究は、徳川家康・秀忠・家光が諸大名を動員して実施した公儀普請による城郭建設に関連する慶長・元和・寛永期の無年号文書の研究資源化を通じて、個別の城郭建設の具体的な経過における諸大名の対応、大名相互の関係について新知見を得るとともに、それぞれの城郭建設を相互に関連するものとして政治・社会史の文脈上に位置づけ、徳川政権が自らの公儀を確立する過程における公儀普請の実態と意義を解明することを目的とする。

(二) 研究の実績

本年度は、先ず本研究に先行して実施した基盤研究(B)「近世統一政権の成立と天下普請の展開―中近世移行期史料の研究資源化を通じて―」(二〇一七～二〇二一年度、一七H〇二三八二、研究代表者・及川亘)によって『大日本古文書』・『大日本近世史料』等の刊行史料集から抽出した普請関係史料リストのうち、「伊達家文書」・「島津家文書」・「上杉家文書」・「細川家史料」の分を対象として、研究協力者の協力を得て、史料本文の関連個所の抄出や無年号文書の年次比定等について点検を行った。

その上で、東京大学史料編纂所刊行の『大日本古文書』『浅野家文書』『伊達家文書』『相良家文書』『毛利家文書』『吉川家文書』『小早川家文書』『上杉家文書』『熊谷家文書』『三浦家文書』『山内首藤家文書』『島津家文書』『大徳寺文書』『東大寺文書』『蜷川家文書』『益田家文書』『大日本近世史料』『細川家史料』について、公儀普請関係の文書を中心に、戦争における陣城の普請、大名領内での城郭建設や河川等の普請、大名家の江戸屋敷の普請・作事等、大名領内での動員（負担転嫁）の仕組みが共通するものを普請関係史料リストからさらに「二二一件を抽出し、『大日本古文書』等所収近世前期城郭普請関係文書一覧（稿）」（及川巨編）を作成し、東京大学学術機関リポジトリより公開した。

<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2013547>

関連史料の調査としては、米沢市上杉博物館所蔵「上杉文書」（市立米沢図書館旧蔵）の「元和九年御日帳」等を調査・撮影した。

また、本研究で得られた知見によってNHKスペシャル「戦国サムライの城」第2集（全3集、二〇二五年九月放映予定）の番組制作に協力し、研究成果の一部を紹介した。

預人の政治的分析による近世中期幕藩国家政治構造の研究

- 一、研究種目 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二二K〇〇八九一
- 三、研究機関 二〇二二年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費一〇万円、間接経費三万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 荒木裕行

六、研究の概要
近世政治史研究においては、近世日本は強大な権力を持つ幕府を中心とした中央集権的性格が強かったのか、もしくは自立的な政治権力である藩の連合体としての性格が強かったのかという問題が重要なテーマとして分析されてきた。この問題は換言すると、幕府と藩とがどのような関係にあったのか

ということになる。本研究はこの問題について、幕藩国家の政治構造が確立した一八世紀末から一八世紀初頭の時期を対象として分析することを目指している。右の目的を達成するため、弘前藩の「預人」をめぐる、幕府と藩、藩と藩の間で行われた政治交渉を取り扱う。預人は幕府から処罰され、藩に預けられていた人物であり、それに関わる幕府と藩との交渉、赦免後の預人が弘前藩において果たした政治的役割を解明する。それによって近世中期の幕藩関係の構造を明らかにする。

二〇二四年度は、前年度までと同様に、対馬藩の藩日記（『江戸藩邸毎日記』東京大学史料編纂所蔵「宗家史料」）を分析した。また、弘前市立図書館にて弘前藩の藩政記録「弘前藩庁日記」の調査・撮影を行い、内容の分析を行った。

近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化―佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として―

- 一、研究種目 基盤研究(C) 基金
- 二、課題番号 二三K〇〇八〇九
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二五年度
- 四、研究経費 直接経費一一〇万円＋前年度繰越分七三万二八〇円、間接経費三三万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 小宮木代良
- 研究分担者 及川亘・石津裕之・伊藤昭弘（佐賀大学）
- 研究協力者 本多美穂（佐賀県立図書館）・清水雅代（佐賀県立図書館）・松田和子（佐賀県立図書館）・田畑春香（佐賀県立名護屋城博物館）・阿部大地（佐賀県立図書館）・佐藤孝之（東京大学名誉教授）・大平直子（佐賀市文化財課）・田久保佳寛（小城市教育委員会）・野下俊樹（佐賀県立図書館）・宮脇啓（東京大学大学院人文社会系研究科）

六、研究の概要
本研究プロジェクトでは、佐賀藩家臣坊所鍋島家史料（佐賀県立図書館所

蔵)のうちの近世初期の部分を対象とし、史料一点毎の「読み直し」を行っている。今年度は、その二年目にあたる。

対面形式の研究会としては、六月八日～一〇日に、史料編纂所において、共同分析のための研究会を開催した(参加一四名)。つぎに、十一月二九日～十二月一日には、佐賀県立図書館において研究会を開催した(参加一三名)。史料編纂所で研究会を行う際には、同所所蔵の関連史料を多く利用し、佐賀県立図書館において行う際には、同館所蔵の坊所鍋島家文書原本の参照を行った。これらの共同作業の途中経過は、共同研究システムを利用して、参加者間で相互に共有している。また、Zoom利用による研究会としては、六月二日と十二月一日に、それぞれ直近の対面式研究会の際に残された部分について補うための研究会を行った(参加一三人)。以上により、今年度は、鍋島勝茂書状一六二点を検討した。

さらに、以上の他に、四月一三日には、佐賀県立図書館において、坊所鍋島家文書の未整理分の一部についての原本確認と撮影を行い(参加一三名)、三月四日～五日には、史料編纂所における関連史料の調査(一名参加)等を行った。また、この間、来年度で一応の区切りを迎える本研究会の、今後の進め方と成果の公開の仕方についても相談を重ねた。

これらは、東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点における特定研究経費のプロジェクト(「近世大名家臣家史料の「読み直し」と研究資源化」二〇三年度～二〇四年度)と連携しながら実施した。

なお、昨年度末、電子版で発行した二〇三年一月一日開催のシンポジウム報告書(「坊所鍋島家文書を読みなおす―成立期の佐賀版と江戸幕府―」)を、二〇四年一〇月に冊子版として刊行した。

中近世移行期の版本刊行からみた禅宗寺院の蔵書形成と知識入手の研究

- 一、研究種目 科学研究費助成事業(基金) 基盤研究(C)
- 二、課題番号 二四K〇四二二二
- 三、研究期間 二〇二四年度～二〇二七年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円

五、研究組織

研究代表者 川本慎自

研究協力者 佐竹大耕・安藤惠隆・采澤良晃・大塚紀弘・白川宗源・中野何必・山口啄実

六、研究の概要

本研究課題は、中近世移行期における禅宗寺院の蔵書形成過程の検討を通じて、近世初頭にあらたに禅宗に加わった知識を明らかにすることによって、遡って中世において不在であった知識の様相を照射しようとするものである。具体的には近世初頭の建長寺塔頭の蔵書構成を示す史料群の調査を行い、とくに中世五山版を引き継ぐ覆五山版の刊行や、明末清初の仏教知識体系を反映した明版一切経の輸入に着目して検討を行う。

初年度となる本年度は、研究協力者とともに秩父金仙寺所蔵典籍の調査を行い、所蔵される明版一切経の全体像を把握するとともに、各冊の詳細な調書の作成を通じて、刷年や輸入年、あるいは建長寺への入手経路についての手がかりとなる徴証の検出に努めた。また近世版本類についても調査を進め、覆五山版・古活字版などの所在を確認した。さらに、一切経が秩父へ移された後に欠巻を補写する営みにも着目し、補写奥書や料紙入手を示す史料から、近世後期の秩父地域における文化活動とも深い関わりを持っていることを確認した。

また、中近世移行期の知識形成の全体像についても考察を広げ、戦国期の常陸において曹洞宗と真言宗との間で葬送執行をめぐる生じた相論に際して作成された史料の検討を通じて、禅僧・大蟲宗岑が禅籍のみならず真言側の典籍や説話的な内容を含む講義・口頭伝達からも知識を得ていたことを考察し、学会報告を行った。

さらに遡って、こうした中近世移行期の知識の前提となる室町期の禅僧の知識についても検討を行い、「夢窓国師の坐禅窟」と呼称される石窟の成立が夢窓疎石を観音に重ね合わせる言説に立脚していること、そしてこうした石窟を含む禅宗寺院建築の形成に大きな役割を果たす東班衆禅僧が室町初期には文事にも関与していたことを考察し、論文二本を発表した。

日本近世における政教関係の形成と確立

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 二一K一三〇九〇
- 三、研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 林晃弘
- 六、研究の概要

近世の政治権力と仏教教団は、中世以前とは異なる新たな関係を形成する。本研究の目的はその過程を政治史的な背景を踏まえて明らかにすることである。最終年度にあたる二〇二四年度には、主に「藩の寺院行政を組み込んだ分析」の視角から研究を進めた。論文二件をまとめ、口頭報告一件を行った。

研究成果のうち、論文「近世前期の寺院相論と幕藩領主―防長地域の曹洞宗の事例から―」は、本課題の中心的な成果となるものの一つである。本論文では、本山・江戸触頭のもとに全国的な教団秩序が再編されること、そこでは幕府の政策が一因となっていること、右の秩序の再編により地域における従来の寺院間の秩序が変容し、軋轢が生じる場合があることを毛利氏領国の曹洞宗寺院を事例に示した。そして、相論における藩の対応と、その解決の過程における幕府寺社奉行の関与のあり方を明らかにした。越中史壇会令和六年特別研究発表会「越中真宗の江戸時代」におけるコメントでは、塩崎久代氏・袖吉正樹氏による越中・加賀地域の真宗を扱う研究報告を受けて、熊本藩をはじめとする他藩の対真宗政策との比較をおこなうとともに、越中・加賀の他宗派の事例を紹介した。この他、論文「細川忠利の花押の変遷―元和・寛永年間における―」では、細川忠利が領内寺院に対して発給した寺領寄進状や書状について新たな知見を加えた。以上の成果により、研究蓄積の少ない江戸時代前期の藩の寺院行政についての研究を進展させることができた。

二〇二四年度の調査は、仏教教団側の史料については、總持寺（神奈川県横浜市）、成菩提院（滋賀県米原市）、泉涌寺、仁和寺（京都府京都市）等の

本山・中本山寺院においておこなった。藩の史料については、熊本博物館・熊本県立図書館にて調査をおこなったほか、富山県公文書館・熊本市歴史文書資料室・東京大学史料編纂所の複製を利用した。これらの調査の成果は上述の研究で活用した。なお、研究成果としてまとめるには至らなかったが、熊本藩の初期寺社奉行や、江戸時代中期の寺社行政に関して新たな知見が得られた。

上記の調査史料のうちの一部はデジタル撮影を行い、許可を得たものに関しては、史料編纂所図書室にて研究を目的とする利用者を対象に公開を行っている。

今川了俊関係史料の分析による室町幕府地方支配の研究

- 一、研究種目 科学研究費補助金 若手研究
- 二、課題番号 二三K一二二七三
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二六年度
- 四、研究経費 直接経費八〇万円、間接経費二四万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 堀川康史
- 六、研究の概要

本研究計画は九州探題今川了俊関係史料の分析を通じて、室町幕府地方支配の現場について明らかにしようとするものである。

二年目にあたる二〇二四年度は、初年度の史料収集を基礎として、了俊の一族・家臣に関する個別的・基礎的な研究を進めた。その成果の一端は、研究分担者として加わっている科研費・基盤(B)「九州の地域権力の特質からみた中世後期の日本像」（代表伊藤幸司氏）の研究会（二〇二五年三月）において、「今川了俊の九州経営と子弟・被官―慈冬・各和・弾正少弼」と題する発表を行い、混乱の多い南九州経営代官に関わる人名比定の見直しを行うとともに、至徳年間（一三八四―一三八七）の南九州情勢について検討した。

また、昨年度から実施している了俊関係史料の収集・原本調査の成果としては、「今川了俊勘返田原氏能書状―豊後田原氏と筑後国竹野荘」（東京

大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信」一〇六号）を発表し、従来知られていなかった了俊書状を紹介・考察した。これらに加えて、二〇二二年の口頭報告を War, Loyalty, and Negotiation in Fourteenth-Century Japan として成稿するとともに（刊行予定有）、了俊探題期を含む南北朝期九州史に関する単著の執筆を進めた。

このほか、関連する成果として、了俊を含む幕府関係者の出資により版行された『智感版大般若波羅蜜多經』（慶珊寺本）の調査を行い、その成果を神奈川県立金沢文庫の特別展『慶珊寺と富岡八幡宮の名宝——『大般若經』が語る中世東国史』（二〇二五年二月三月）通じて発表した。

中世京都における商人の権利と組織

- 一、研究種目 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 二三K一八六九九
- 三、研究期間 二〇二三年度～二〇二四年度
- 四、研究経費 直接経費五〇万円、間接経費一五万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 谷本隆之
- 六、研究の概要

本研究の目的は、商人の生業や所有、権利のあり方と組織との関係に着目して、日本中世の商人組織の実態解明を進め、中世流通経済史分野で近年進展を見せている貨幣や金融、海運等の諸分野と商人組織研究との間に議論の回路を開くことにある。研究成果の概要は以下の通りである。

昨年度に投稿中であった論文に修正をくわえたものを、論文「戦国期京都の座と権利」（『史学雑誌』第二三三編一〇号、二〇二四年）として公表した。本論文では、応仁の乱を経た京都の空間構造・流通構造の変質が商人の営業権のあり方に変化をもたらし、その変化が戦国期における座の形成の動因となったことを論じた。

上記の成果をふまえ、今年度は商人の所有・生業と都市空間との関係に焦点をあてて研究を進めた。具体的な考察対象としたのが、中世京都の集約的

商業空間である。商人の営業の場となる商業空間には錯綜した不動産所有関係が存在した。本研究では商業史と土地所有史の双方の文脈をふまえ、不動産関係の史料にみえる細分化された土地所有と、そうした複雑な領有秩序の中に商人たちが形成した商業空間との関係を検討し、その成果を所内の研究会にて報告した。次年度以降に学会で報告する予定である。

これらの研究に加え、昨年度から継続して中世京都の商人に関する史料の収集につとめた。今年度はとくに近世の都市共同体や商家の伝来史料に見える系譜や伝承の語りに注目し、それらと中世の一次史料に見える断片的な人物・空間の情報突き合わせて、中世商人に関する基礎的な知見を蓄積した。得られた成果の一部は上述の研究に反映されているが、その他の断片的な情報の活用方法はなお課題である。

律令国家成立期における軍事体制の特質とその形成の意義

- 一、研究種目 科学研究費助成事業 研究活動スタート支援
- 二、課題番号 二四K二二五二六
- 三、研究期間 二〇二四年度～二〇二五年度
- 四、研究経費 直接経費九〇万円、間接経費二七万円
- 五、研究組織
- 研究代表者 古田一史
- 六、研究の概要

本研究は、唐の律令法を継受した古代国家の全体構造において、律令制に基づく軍事組織とこれを支える軍事行政体系がどのような意義を持ったのかを解明することを目的とする。そのために、唐から取り入れた制度と日本固有の慣行などをふまえて形成された個々の官司がどのような役割と特質を持ったのか、そしてそれが国家構造全体の中でどのように連関して機能するのかを検討していく。さらに、制度と実態の一致あるいは乖離を検証することとで、古代国家が律令制を媒介に何を実現しようとしたのかも考察したい。

研究初年度にあたる二〇二四年度は、日唐の比較研究を行うための基礎作業として、主に法制史の史料収集を行った。これと並行して、収集した史料

や近年の研究成果をふまえながら、奈良時代の諸官司について個別の検討を進めた。特に、古代日本で軍事行政の中核となった兵部省とその管轄下にある官司、また直接武力を保有する五衛府、左右馬寮、兵庫などを検討の対象とした。

また、古代日本と中国・唐の全国統治と軍事行政について比較するため、日唐の地方統治の在り方とその歴史的背景についても検討している。統治機構を考えるためには、官僚制の特徴についても考慮する必要がある。引き続き個別官司の検討もふまえながら全体構造の分析を進め、成果発信を目指す。

大日本史料総合データベース（平安時代・全文）

- 一、研究種目 研究成果公開促進費（データベース）
- 二、課題番号 二四HP八〇〇三
- 三、事業期間 二〇二四年度
- 四、事業経費 直接経費三二〇万円、間接経費〇円
- 五、研究組織
 - 作成者 平安時代編年史料データベース作成グループ
 - 作成代表者 新井重行
- 六、本年度の事業の概要

大日本史料総合データベースは、『大日本史料』の網文・引用書目・索引語句（人名・官職名）・史料本文を対象とするデータベースである。ただし、史料本文データの公開は、刊行時にテキストデータの入手が可能となった近年の分にとどまっており、それ以前に刊行された約三七〇冊のデータは整備されていない。本事業では、平安時代の仁和三年（八八七）から長元五年（一〇三二）まで、これまでに一四六分が連続して刊行されている『大日本史料』第一・二編のうち、データ未整備であった合計五五冊（第一編一〜二四冊、別冊（補遺一〜四）、第二編第一〜二七冊）、約三万二千頁について、数年をかけて史料本文のテキストデータを生成・登録し、公開しようとするものである。

事業は二〇一九年度から着手し、科学研究費補助金・研究成果公開促進費

（データベース）の助成を得て、これまでに第一編一〜一五冊の史料本文データを公開した。二〇二四年度には第一編一六〜一九冊の史料本文データ約三、四〇〇件を生成し、「大日本史料総合データベース」および「編年史料（古代）編纂支援資源化データベースMIDOH」に登録・公開した。

日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究

- 一、研究種目 若手研究
- 二、課題番号 二〇K一三一七二
- 三、研究期間 二〇二〇年度〜二〇二四年度（期間延長）
- 四、研究経費 （前年度より繰り越し）
- 五、研究組織
 - 研究代表者 岡本真
- 六、研究の概要

本研究は、中近世に日本が諸外国とのあいだでやりとりした外交文書のうち、原本が今日常在不明で、写本の形でしか伝わっていないものや、複数の文書写本を収録した外交文書集を対象に、史料学的研究を実施したものである。具体的には、写本をできる限り幅広く調査・収集したうえで、同一の外交文書や外交文書集の諸写本同士を比較対校することにより、それらの史料の原態を可能な限り復原することをこころみた。そして、それによって、当該期の日本の対外関係史をあらたな視点から研究することを企図した。

当初計画では二〇二三年度までの予定であったが、期間延長を申請して承認をうけ、今年度まで研究を実施した。今年度は瑞溪周鳳撰『善隣国宝記』の諸写本の、校異情報の電子テキスト化を、昨年度から継続しておこなった。また、史料調査一件を実施し、論文二点を公表した。

本研究は新型コロナウイルス感染症の拡大の最中に開始され、申請時の構想を大幅に修正して遂行せざるを得なかったが、研究期間全体にかかわるものとして、下記の三点の成果を得た。第一に、外交文書写本・外交文書集の史料画像の収集・蓄積である。特に、所蔵者の許可が得られたものについては、論文への図版掲載や、本所のデータベースHICAT Plusを介した、同

所図書室の閲覧端末による公開の形で研究資源化を実現した。これにより、未来の研究者が史料を利用するための基盤を整えることができた。

第二に、足利義満宛明永楽帝勅諭や小琉球宛豊臣秀吉文書など、原本が所在不明で、複数種の写本が伝来している外交文書について、写本をもとに原本に関する考察を実施したことである。論文や国際学会での報告等によりすでに成果を公表しているが、これらの個別具体的な分析を通じて、外交文書写本や外交文書集をもとに、外交文書原本の姿に迫る手法を示した。

第三に、『善隣国宝記』諸写本の校異情報の電子テキスト化である。本研究では、人文情報学の専門家からの助言を得て、TEI (Text Encoding Initiative) のガイドラインに則した、テキスト構造化の国際標準に準拠したXMLデータの形で情報を集約する方針を定め、『善隣国宝記』諸写本の校異情報の抽出・整備を実施した。予算面・人材面の制約から、同書の序文から上巻までにとどまらざるを得なかったが、今後、同書中・下巻に関する作業を実施して全体を完成させ、諸本間の距離の解明や、そこから導き出される失われた原撰本の姿の復原へとつなげる予定である。

受託研究

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

- 一、研究種目 受託研究（福岡市史編集委員会）
- 二、研究期間 二〇二四年度
- 三、研究経費 五八万円
- 四、研究組織
 - 研究代表者 岡本真
 - 研究分担者 稲田奈津子
- 五、研究概要

本研究は、二〇〇六年度から引き続いて福岡市史編集委員会から受託し、福岡市史編纂のため基礎研究となる「福岡市域に関わる資料の調査及び研究」を行うものである。福岡市史専門委員を委嘱されている岡本、調査委員を委嘱されている稲田を中心に、本研究費で雇用する支援スタッフ等を加えて研

究組織を構成し、史料編纂所に架蔵される写真帳・影写本・謄写本等をはじめとする関連史料を調査・研究している。本年度は計画の最終年度であり、引き続き古代の未公開史料類、中世の福岡市外所在史料の調査・整理を実施した。主な内容は次の通りである。

〔古代〕昨年度までに蒐集した史料の整理・データ化を中心に作業を進めた。〔中世〕『福岡市史』資料編中世三収録内容がほぼ確定したため、これまで実施してきた本所架蔵史料の調査・研究は昨年度で終了した。本年度は、龍谷大学図書館において史料調査を実施した。

高知県域に関する古代・中世史料の調査・収集と分析研究

- 一、研究費目 受託研究（高知県）
- 二、研究期間 二〇二四年四月～二〇二五年三月
- 三、研究経費 八四万二千六百元（研究支援経費七六万六千円）
- 四、研究組織
 - 研究代表者 井上聡
 - 研究分担者 岡本真
- 五、研究概要

高知県においては令和三年度より『高知県史』の編纂を開始し、令和五年度から古代中世史部会を発足させている。当該部会の発足に伴い、高知県関連の古代・中世史料情報の収集を図ることを目的として標記事業を開始した。研究組織に参加する二名は、同県史編纂委員を兼ねている。具体的業務としては、史料編纂所がこれまで蓄積してきた史料調査情報から、県史編纂に関わるものを抽出し、体系的に情報化を図ることを目指した。令和六年度は、前年度に引き続き、学術専門職員一名を雇用し、旧県史収載史料や『土佐国編年史料控』収載史料のテキスト化を進めて、影写本やデジタル撮影データなどの校訂を実施した。

AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出課題「異分野共創による史料学DXの確立」

- 一、研究種目 受託研究（令和六年度AI等の活用を推進する研究データ

エコシステム構築事業ユースケース創出事業)

二、研究期間 二〇二四年度

三、研究経費 四八二万円

四、研究組織

研究代表者

尾上陽介

研究分担者

金子拓・山田太造・渋谷綾子・高島晶彦・山口悟史・平澤加奈子(以上史料編纂所)・丹羽尉博(大学共同利用機関法人高エネルギー加速器研究機構)・天野真志(国立歴史民俗博物館)・野村朋弘(京都芸術大学)・梶青華(一般財団法人石川県文化財保存修復協会)・高橋修(茨城大学)

五、研究の概要

本研究「異分野共創による史料学DXの確立」は、全国的な研究データ基盤(NIIRDC)やデータ処理・公開基盤を活用し、異分野共創による史料学DXの確立を目指すものである。二〇二四年度は下記の五項目を実施した。

①史料調査と料紙分析

東京大学史料編纂所所蔵「国宝島津家文書」(二〇二四年七月、八月)、東北大学文学部所蔵「白河文書」(二〇二四年一〇月)、那覇市歴史博物館・沖縄県公文書館・宮古島市総合博物館の所蔵史料(二〇二四年一〇月)高知城歴史博物館所蔵土佐山内家史料(二〇二四年一月)、奥州市水沢図書館所蔵「留守家文書」(二〇二四年一月)、滋賀大学経済学部附属史料館所蔵「菅浦文書」(二〇二五年一月)、米沢市上杉博物館所蔵「国宝上杉家文書」(二〇二五年二月)、茨城県立歴史館所蔵関沢家紙見本(二〇二五年三月)を対象とした非破壊の調査・分析を実施、修理・長期保存の技術改良や提供につながる科学情報の収集・分析を進めた。

②史料の修復・保存・活用

①の成果をふまえ、文化財の修理・保存につながる歴史情報の資源化を進めた。成果の一つとして、第三四回日本資料専門家欧州協会年次大会(EAJRS、二〇二四年九月、於・ブルガリア)で在欧和古書保存ワーキンググループと連携し、欧州各機関が抱える歴史資料の保存・修理における問題に

関する相談窓口を設置・公開した。

さらに、台湾・中央研究院歴史語言研究所および生物多様性研究中心の研究協力者たちと、今後の連携や共同研究の実施について議論を行った。

③機関連携による技術開発・応用

高エネルギー加速器研究機構と連携し、史料の非破壊調査に向けた計測環境の整備・効率化を進めた。二〇二四年度は、これまでの分析結果をもとに論文化を進め、16th International Conference on X-Ray Microscopy (XRIM2024、於・スウェーデン、八月)や第四〇回近赤外フォーラム(於・東京、十一月)などの国内外の学会・会議等で報告を行った。さらに、本事業のシンポジウム(二〇月八日・九日)に参加し、本課題の紹介を行うとともに、他のユースケース課題関係者と分析技術の開発に関する議論を行った。

④地域連携と新たな人材活用

京都文化博物館特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」(四月二七日～六月二三日)、鳥取市歴史博物館令和六年度特別展「松尾大社展 みやこの西の守護神」(七月二〇日～九月一六日)にて①の成果を公開した。さらに、本課題のメンバーと料紙の科学的調査を実施し、東京大学史料編纂所ホームページやGakumindmなどの公開準備を進めた。なお、①の関連作業に携わった博士課程後期の大学院生が、業績を活かして二〇二五年四月から琉球大学の教員として着任した。これは本課題が人材育成に寄与したことを示す。

⑤史料研究データ基盤構築

①・③の調査で得た史料情報は、調書を基にデジタルデータを作成し、Gakumindmなどを介して、共同研究メンバーと共有した。非破壊による史料情報の多角的な分析内容は着実に蓄積されてきた。

AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出課題「Archivematicaを用いた人文学データのキュレーションプロセスの自動化に関する試み」

一、研究種目

受託研究(令和六年度AI等の活用を推進する研究データエコシステム構築事業ユースケース創出事業)

- 二、研究期間 二〇二四年度
三、研究経費 三二五万円
四、研究組織

研究代表者 中村覚

研究分担者 山田太造（史料編纂所）・金甫榮（渋沢栄一記念財団）

五、研究の概要

人文学における研究データの長期的な活用支援を目的として、Archivematicaを用いたデータキュレーションプロセスの自動化に取り組んだ。Archivematicaの機能検証にあたっては、二〇二三年度に構築したデータキュレーションプロセス自動化のためのプロトタイプシステムに対し、indexGakuNin RDMを連携させ、研究者や管理者の実利用を想定したシステムへと改良を行った。これにより、データキュレーションプロセスの自動化に対する寄与の程度、適用における課題、ならびにシステムのカスタマイズや拡張の可能性を明らかにした。この取り込みの成果は、EODのユースケースとして評価され、「CASE8 人文学デジタルデータの長期保存プロセスを自動化する」で公開された。また、東京大学史料編纂所が保有する研究データを題材に、Archivematicaの機能を用いた実験を実施した。具体的には、Archivematicaが出力するeAIP(Archival Information Package)の内容分析を行い、保存用メタデータとしての有効性を検討した。この研究成果は、国内学会および国際会議にて発表を行った。さらに、JOSIS2024でのセッション企画やウェブサイトの公開を通じ、本取り組みの成果を広く発信した。これらの活動を通じて、NII-RDCで開発中のデータキュレーション支援機能に対し、人文学データを用いた実証事例を提供することができた。

人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業中核機関委託業務

- 一、経費種目 日本学術振興会（JSPS）の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業 中核機関・東京大学における委託業務」
二、業務期間 二〇二三年一〇月～二〇二八年三月

- 三、業務経費 直接経費三、九〇〇万円、間接経費一、一七〇万円
四、業務実施組織 東京大学（史料編纂所・社会科学研究所）
業務主任者 尾上陽介（史料編纂所長）
五、実施担当者（二〇二四年度）

尾上陽介・金子拓・山田太造・中村覚・渋谷綾子・山田俊幸・平澤加奈子・犬飼はなみ・大南英樹・清田盟（以上、史料編纂所）・大向一輝（大学院人文社会科学系研究科）・宇野重規・横内陳正・三輪哲・藤原翔・石田賢示・王帥・寺澤さやか・塩谷昌之・胡中孟徳・新藤麻里・谷口沙恵・和田敏雄・真柄優香（以上、社会科学研究所）

六、業務概要

「人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業」は、二〇一九年一〇月に本所が受託を開始し、二〇二二年度末で終了した日本学術振興会（JSPS）の「人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」の成果等を踏まえ、人文学・社会科学のデータ共有、利活用を促進するデータプラットフォーム等の基盤のさらなる充実・強化を図り、研究者がともにデータを共有しあい、国内外の共同研究等を促進することを目指すものである。構築推進事業において、本所は人文学唯一の拠点機関として参加し、社会科学の四機関とともに事業の推進に尽力した。後継となる強化事業では制度設計が変更され、人文学・社会科学両分野について事業全体を統括可能な中核機関を置くこととなった。そこで史料編纂所・社会科学研究所が連携して、中核機関・東京大学として応募して採択され、二〇二三年一〇月から事業を開始することとなった。システム担当機関は国立情報学研究所（NII）、拠点機関は神戸大学附属図書館、奈良文化財研究所である。

中核機関・東京大学は、人文学・社会科学データを取り扱う拠点機関及び関係諸機関を主導して、日本全体のデータインフラストラクチャー基盤を整備すると共に、日本史料を中心とする人文学データを扱う史料編纂所と社会調査等の社会科学データを扱う社会科学研究所が綿密に連携し、両分野を総合したデータインフラを構築することを目標とする。そのため、自機関で作成及び他機関から受託した新規データの人文学・社会科学総合データカタ

ログ(JDCat)への追加、DOI付与や適切な利用条件設定による管理環境の整備、データ分析手法とその環境の提供、他機関データとの連携のためのAPI及びメタデータの整備等を推進し、分野を超えた相乗効果を発揮する役割を担う。それによって、質的データと量的データの活用に関する知見共有、AI活用への共同対応、手引書作成のノウハウ伝授等、相乗効果を広範囲に拡大し、拠点機関等との好循環を生み出すよう努める(中核機関実施計画書)。また、史料編纂所が主導する人文学分野としては、構築推進事業の成果を継承し、多彩な史料所蔵機関と連携して、史料のデジタル化や公開を進め、わが国の文化・学術資源の継承と普及、新たな領域の創成を含む学術の発展に寄与したいと考えている。

実施体制は以下の通りである。中核機関・東京大学は、対等な立場で参加する史料編纂所と社会科学研究所によって構成される(いずれも代表者は所長、業務主任者は史料編纂所所長)。両研究所の強固な連携を保つために、双方の所長・統括責任教員(史料編纂所は山田太造准教授)・事務局担当UR Aが参加する中核機関運営委員会を、毎月開催して、事業全体の運営・管理を行う。また、関係諸機関の実務担当者による実務者ミーティングを開催して、事業の進捗報告や問題点の洗い出し・情報交換等を行う。本事業の取り組みには、アークの六つの柱が設定されている。それぞれについて二〇二四年度の実績を記す。

【取組A: JDCatとの連携】

昨年度に引き続き、史料編纂所所蔵「島津家本」を対象に、DOI付与やJDCatメタデータの整備を行った。昨年度分と合わせ、六三九冊分のメタデータをJDCatへ登録した。また、神奈川県立金沢文庫所蔵史料について、文化財指定外の史料を対象に、四五五件分についてJDCatへ登録した。JDCatとの連携において、二〇二四年度までの申請時のデータ目録数としては、二、八〇〇件(うち新規連携データ数は一、〇〇一件)としていたが、実際の搭載データ件数は二、八九三件(うち新規連携データ数は一、〇九四件)だった。

【取組イ: 他機関のデータ受入や受託】

史料編纂所は、公共の史料保存機関をはじめ、旧大名家・武家、公家、寺

社等の所蔵史料を対象として、調査・収集を続けている。構築推進事業においては、それらの所蔵者の理解を得ながらデータ受入・受託を実施してきた。強化事業においても同様の方式で、対象史料群を広げていく。今年度は、小川八幡神社所蔵「小川八幡神社大般若経」(史料画像数約二、八〇〇点)、立花家史料館所蔵「柳川古文書館寄託」「旧柳河藩主立花家文書」「大友家文書」(同約三、六〇〇点)、岡山大学附属図書館所蔵「池田家文庫史料」(同約二、三三〇点)、都城島津邸所蔵「都城島津家史料」(同三、九三五点)、海の見える杜美術館所蔵「岩倉具視関係史料」(同一、九四一点)のそれぞれについて、新たに史料画像を受入れ、HiCAT Plusを介してWeb公開した。

【取組ウ: データ利活用の促進】

中核機関として、データ利活用に関する広報、および、本事業ならびにJDCatの取り組みについて情報を発信するため、ウェブサイトを開設している(URL: <https://www.hiutokyo.ac.jp/di/>)。

国立情報学研究所が整備を進めているJDCatへのデータ提供の観点から、データ分析手法の検証を進め、構築推進事業で進めてきた検証基盤・連携基盤(画像共有における国際標準であるInternational Image Interoperability Framework(IIIF)に関わるApplication Programming Interface(API)を用いた連携方式)について、史料画像データ利活用のためのプロトタイプینگを重ね、さらに有用性を高め、深化させていく。今年度は、情報発信として国際会議PNC2024、ECAI2024の場で本事業の取組を報告し、国際会議KADHJADH2025においても本事業とデジタル・ヒューマニティーズ(DH)との関わりについて報告した。また、人文学データシンポジウム「人文学研究データに関する提供と利用のギャップ」(二〇二四年九月一八日)を実施し、人文学データを提供している機関の状況や、人文学データの提供環境と利用環境について報告し、人文学研究進展における提供と利用のギャップについて議論した。

【取組エ: JDCatの運用・改修、メタデータスキーマや統制語彙の妥当性に係る継続的な検討等】

中核機関では、下記の通り、システム担当機関、拠点機関等とともに実務者レベルの定期会合を実施し、情報・意見交換を行った。

・中核機関運営委員会…本事業における中核機関にかかる業務の計画立案・進捗確認・拠点機関等とのやりとりなど運営の責任主体。一〇回開催。
 ・戦略会議…中核機関とシステム担当機関によるJDCatにかかる課題解決のための会合。七回開催。

・実務者ミーティング…中核機関・拠点機関等の実務担当者が出席し、JDCat連携など各取組の進捗報告や情報交換を行う。二回開催。

また、拠点機関である神戸大学附属図書館・奈良文化財研究所を訪問し、各拠点機関から提供されるデータやJDCatへのメタデータ登録における課題について打ち合わせを行った。

さらに、JDCat利用者の拡がりや利用方法およびユーザーエクスペリエンスを把握するべく、関連リポジトリの利用者・関連学会の会員・関連Webページ閲覧者を対象に、「JDCatの認知度・利用状況に関するアンケート」を実施した。分析結果の概要は次年度より順次公開するとともに、今後のJDCatの利用拡大やユーザービリティ向上につなげていく予定である。

このほか、今年度より史料編纂所前近代日本史情報国際センターは人間文化研究機構が進めるDH組織ネットワーク協議会へ参加している。

【取組オ…「データ共有のための手引き」の妥当性に係る継続的な検討等】

中核機関では、現行の「データ共有のための手引き」について内容を精査し改訂の検討を行っている。具体的には、中核機関が主催した人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム「研究データの利活用と流通を強化する」(二〇二五年一月三十一日)、および、実務者ミーティングにおいて議論した。

さらに人文学部門で必要とする要件を検討し、項目を洗い出すため、人文学データシンポジウム「研究データの利活用と流通を強化する」(二〇二四年九月一八日)においても議論を行った。

【取組カ…拠点機関との連携及び関係機関との調整】

前述のとおり、拠点機関等と連携して本事業の活動を遂行するため実務者ミーティングを実施した。また、本事業にかかる全体の取組に関する進捗の共有と情報交換を行うため、連絡会議(中核機関が企画・進行役となり、本事業および構築推進事業の拠点機関に加えて、日本学術振興会や国立情報学

研究所など、関係諸機関から数名の代表者が出席し、JDCat連携の状況と国内外の最新動向の情報共有、今後の取り組みについて検討する会議)を開催した(二〇二五年二月一日)。また、関係機関を招聘した公開シンポジウムである人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム「研究データの利活用と流通を強化する」(二〇二五年一月三十一日)を開催し、各機関の取り組みについての報告と意見交換を行った。

社会との共創によるデジタル・ヒューマニティーズ(DH)の推進

〇Eツール構築研究課題「三三対応史料画像からの情報構造化エディタの開発」

一、研究種目 受託研究(令和六年度社会との共創によるデジタル・ヒュー

マニティーズ(DH)の推進

二、研究期間 二〇二四年度

三、研究経費 二〇〇万円

四、研究組織

研究代表者 小風綾乃

研究分担者 亀田克宙(人間文化研究機構)

五、研究概要

本研究は、三三で公開された画像を用いて史料読解を進めるための支援ツールを構築するものである。具体的には、以下三点に取り組んだ。①史料から具体的な項目を抽出し構造化する際に、三三画像の特定箇所にアノテーションを付与し、記述と画像内の一点を紐付ける、②データ抽出項目を調整しながら、複数人でデータを作成できる体制を整える、③作成された複数の表形式データを統合し、知識グラフを構築する。本研究の特徴は、これらを既存ツールの組み合わせによって実現させた点にある。

【三三E画像と抽出テキストの紐付け】

三三E画像をテキストと紐付ける際には、画像全体のマニフェストファイルを指定するか、矩形による領域指定を用いる場合が多い。しかしこれらの方法は画像内の記述量が多い場合やくずし字などの読みづらい文書、注釈が複数ページにかかる場合、終点が明示的でない場合に対応しづらい。よって本

研究では、Recogioの画像アノテーション機能を活用し、注釈をつけた記述の始点に「点」のアノテーションと管理IDを付与し、付箋のように画像とテキストを紐付けられるようにした。

【②複数人データ構築時における抽出項目の調整】

本研究では十八世紀フランスのパリ王立科学アカデミーの議事録をサンプルとして、議事録の各項目の概要と関連人物・役割等のデータを抽出する作業を実践した。具体的には、複数人で同粒度のデータ抽出を進めるために、Google Apps Script(以下、GAS)によって入力者が制御されたGoogleスプレッドシートを用意した。このシートでは、各セルの入力内容に応じて入力可否や選択肢が統制され、重複項目は自動入力される。GASを用いることにより、複数ファイルにわたってこれらの制御内容をいつでも一括編集できる体制を整えた。サンプルデータの作成では七名(管理者含む)が同時に作業を進め、八年分(約五、五〇〇頁)、七、二二〇件の議題とその関係者が抽出された。

【③表形式データの統合と知識グラフの構築】

作成された複数の表形式データはIDを介してリレーショナルな状態にあるが、抽出項目が多いほど表を用いた探索は困難になる。また、史料読解を進めるためには信頼できるオンラインデータベース等の情報と接続されることが望ましい。よって本研究ではOpenRefineを用いて表形式データをRDFに変換し、SPARQLクエリによる検索を可能にした。

歴史学におけるRDFの活用は、近年データ構築としては進んでいるが、個人の研究レベルにおける実践例が乏しい。歴史学の研究方法としての認識および有効性の検証に至っていないのが現状であり、データの作成方法の紹介とケーススタディの蓄積が待たれる。よって、本研究では既存の無料ツールの組み合わせによってRDFデータを作り上げるためのフローを具体的に示した。なお、作業に用いたGASのコードはGitHubにて公開しており、本研究で作成したサンプルデータを用いたケーススタディについては、人文情報学と歴史学の二分野それぞれで論文を準備している。

共同研究

時空間を越えたコミュニケーションに関する研究

- 一、研究種目 共同研究(サントリーホールディングス・本学先端科学技術センター)
- 二、研究期間 二〇二二～二四年度(二〇二三年一月～二〇二四年九月)／二〇二四～二五年度(二〇二四年一月～二〇二五年九月)
- 三、研究経費 二二、五〇〇万円(直接経費)／二四～二五年度・二、〇〇〇万円

四、研究組織

研究分担者 金子拓(研究代表者先端科学技術センター稲見昌彦／分担者情報理工系研究科鳴海拓志・同天野薫・京都橘大学松原仁)

五、研究概要

時空間を越えた飲み会をバーチャルに実現するための研究を行うことを目的に、次の四つの柱で研究を進めている。

- ① 相手と同じ空間にいるように対話するための研究
- ② 酔っている状態をバーチャルに再現する研究
- ③ 飲み会のように高揚した対話をバーチャルに実現するための研究

- ④ 特定の人物のバーチャルな人格を作り上げ、対話する研究

このうちの④を担当し、そのための史料情報蓄積を進めた。それにあたっては、史料編纂所全体での協力体制を企画し、史料探訪を行った。④のなかでも、とくに織田信長のバーチャルな人格を作り上げる取り組みへの協力のため、『イエズス会日本報告集』『フロイス日本史』のデータ化を行い、史料編纂所の歴史情報処理システムより信長に関する情報を抽出するためのAPI構築を進めた。また編纂所が収集した写本画像から手書きOCRを用いて必要な情報を抽出するために必要なGPUサーバーを導入した。さらに、信長に関する情報が豊富な本所蔵『言継卿記』のカラー撮影を行い、刊本情

報との相互利用促進に取り組んだ。

隔週で開催されるミーティングに対面・オンラインで参加したほか、中世後期における酒食のあり方、言葉の話し方、信長の人物像に関わる評価などについて簡単な報告を行った。研究補助および酒宴・食物に関する史料収集のため学術支援職員二名を雇用した。また、二〇二四年一〇月一五日に、学術支援職員の木村俊哉氏とともに第一期の最終報告を行った。

明治太政官政府主要人物文書群の保存・活用に資する研究基盤の構築

- 一、研究種目 公益財団法人鹿島学術振興財団研究助成（一般研究助成）
- 二、研究期間 二〇二三～二〇二四年度
- 三、研究経費 一三五万円（二〇二四年度）
- 四、研究組織

研究代表者 箱石大

共同研究者 石田七奈子（港区教育委員会・文化財保護調査員）・佐藤大

悟（青山学院大学青山学院史研究所・助教・白石烈（宮内庁書陵部編修課・主任研究官）・松中博（京都市歴史資料館・歴史調査員（主任）・宮間純一（中央大学文学部・教授）

五、研究の概要

- （１）研究の目的（『所報』第五九号、一五八頁参照）
- （２）研究の計画・方法（『所報』第五九号、一五八頁参照）
- （３）研究実績

〔京都市歴史資料館所蔵「岩倉具視関係資料」の調査・撮影〕

国指定重要文化財（全一、〇一八点、ただし今回の撮影では遺品類三〇点を除外）のデジタル撮影が完了し、東京大学史料編纂所のウェブサイトから画像を公開する準備作業を開始した。

〔京都市歴史資料館所蔵「岩倉公旧蹟保存会関係文書」の調査〕

岩倉公旧蹟保存会は、京都市歴史資料館所蔵「岩倉具視関係資料」の旧蔵者であり、同会との関係文書は、「岩倉具視関係資料」の伝来や保存・利用の歴史を知るうえで基本となる史料である。今回の調査では、昭和二（一九二

七）年に岩倉公旧蹟保存会が復刊した『岩倉公実記』について、宮内省に刊行を申請し、これが許可された一件の記録などを調査した。この件に関しては、宮内庁宮内公文書館に当時の宮内省側の関係文書が現存していることも確認した。

〔神宮文庫所蔵「三條家文書」中の三条実美関係文書の調査〕

岩倉と並んで明治太政官政府の中心的人物である三条実美の関係文書についても調査を行なった。神宮文庫所蔵「三條家文書」は、現在も整理中のため特別閲覧の対象であるが、同文庫の許可を得て閲覧・調査が可能となった。同文書には、三条実美関係の文書が多数含まれており、明治太政官政府において三条が就任した議定・副總裁・輔相・右大臣などの中央官職に関係する文書のみならず、戊辰戦争期に関東監察使・関八州鎮将として江戸・東京に駐在した時期の文書も存在することを確認した。

寄付金

京都御所に伝わる調度品の学際的文化史研究

- 一、鹿島学術振興財団研究助成
- 二、事業期間 二〇二四年度
- 三、研究経費 一五〇万円
- 四、研究組織

研究代表者 新井重行

研究協力者 小倉慈司（国立歴史民俗博物館）・小柏典華（芝浦工業大学）・玉川みほの（東京藝術大学）

五、研究の概要

御所を中心に朝廷で形成された宮廷文化には、現在の我々にとっても馴染み深い行事などが多く含まれており、日本文化の基層をなすものの一つといえる。なかでも京都御所の建造物や調度品は、建築・絵画・工芸などの点で、日本文化を総合的に検討するうえで不可欠な要素である。しかしその調度品に注目すると、天皇の居住空間である清涼殿の舗設の歴史の変遷や、現存す

る調度品のその来歴・製作過程などについて、必ずしも明らかでないことも多い。

そこで本研究では、歴史学・建築史学・文化財保存学など複数の分野の専門家による合同の調査を実施し、①研究に十分に活用されていない史料の検討を行うこと、②調度品の現物調査により加工技術・修復・保存のための基礎データを収集すること、を課題として設定した。

史料の検討としては、京都府立京都学・歴史館所蔵「富田屋文書」・「船屋太兵衛家文書」に含まれる関係史料について調査を行い、必要なものについて複製（画像データ）を購入した。このうち「本途帳」は、安永七年（一七七八）に京都で作成された普請・修復に関する作業内容と価格を定めたもので、「屋根方」「壁方」「塗方」「指物方」など、それぞれの作業にかかる費用が記されており、本研究にとって重要な情報を多く含んでいる。この基準は幕末の御所造営においても参考にとされていたと考えられる。またこのほかにも、いくつかの関係史料の収集を行っている。

調度品の調査としては、七月に京都御所清涼殿の調度品について熟覧調査を行った。また一〇月には泉涌寺（京都市）において、同寺に所蔵される「黒漆芦間鶴蒔絵硯箱」（後水尾天皇御遺品）ほか、硯箱を中心として蒔絵の施された調度品十数点を熟覧した。これらの調査において、漆の加工のうち、とくに蒔絵の施された調度品について基礎的な観察データを収集することができた。検討を行った史料については、分析の成果を発表すべく調整を行っている。

調度品は日常生活のほか、儀式の場においても使用されるものであり、その時代的変遷や来歴・作成技法などを検討することは、朝廷における儀礼等の研究にも資するものと考えている。

江戸時代後期の大工組織の業務復元に関する基礎的研究

- 一、松井角平記念財団研究助成
- 二、事業期間 二〇二四年度
- 三、研究経費 一九〇万円

四、研究組織

研究代表者 新井重行

五、研究の概要

近世建築生産史の分野は、御所など大規模造営の分析、および大工支配の成立・展開などを主たる論点として研究が進められてきた。近年では、宮内庁書陵部所蔵の「中井家文書」の公開が進みつつあり、とくに御所の造営過程については、研究のさらなる深化が期待される。しかし、建築指図や帳簿などの検討に比べて、朝廷・幕府の役割を含めた造営事業における業務の全体像の検討は不十分であり、そのために建築史と歴史学とが積極的に協業するには、やや困難が伴うのが現状である。そこで本研究では歴史学の立場から、御所造営事業や調度品の調達に関する記録や文書類を広く調査し、とくに業務日誌など、これまでに十分に検討の及んでいない史料を検討することで、新たな研究基盤を整備することを目指す。

まず、書陵部所蔵の出納平田家（蔵人所出納を代々つとめ、御所の調度品の調達や舗設を職掌とする）旧蔵史料に着目し、「平田日記部類」（五〇八一三）のうちの清涼殿調度品の調達記録等の調査を行った。このほか、同家本の画像公開されていない関係史料について画像データを収集した。また安政度の内裏造営において修理職奉行を務めた野宮定功の作成にかかる記録類について検討および翻刻を行った。

さらに、「中井家文書」のうちに「中宮御殿御造立仙洞御所御修復小屋場会所日記」など、文化年間の中宮御殿・仙洞御所の造営に関する記録・文書類が残っていることから、「小屋場会所日記」を中心に検討を行った。この小屋場会所は所司代に連なり、造営現場において文書処理などに関わる部署である。また同じ造営事業について京都大学附属図書館にも関係史料が所蔵されていることも確認できた。

これら並行する史料の検討を継続することで、複数の視点から、造営事業を立体的に把握することが可能になり、建築史と歴史学を接続させ、従来の認識を大きく変える可能性があると考ええる。

離島所在史料の保全と研究資源化に関する研究

一、研究種目 鹿島学術振興財団研究助成

二、研究期間 二〇二四年度

三、研究経費 一四五万円

四、研究組織

研究代表者 須田牧子

研究分担者 井上聡・岡本真・木村直樹（長崎大学）

五、研究の概要

本研究の目的は、希有な史料を適切に保存し後代への継承を図るとともに、当該史料がもつ豊富な歴史情報を可能な限り引き出し、中世対外関係史研究・中近世寺院史研究および長崎県島嶼部の地域史研究に寄与することにある。

五島列島の北部に位置する小値賀島の善福寺には、明德・応永（一四世紀後半～一五世紀初頭）の書写銘をもつ大般若経が所蔵されている。奥書には小値賀笛吹地藏堂で書写した旨が記されており、この大般若経が作成されてから五〇〇年以上にわたり、小値賀島を動かずに伝来されてきたことをうかがわせる。一方で、奥書に「大明国臣」という署名もみえるためか、地元では遙か海の彼方から漂着したものであると伝えられてきた。本研究では、この大般若経に見える大量の墨書を採取分析し、書写者・資金の供出者の人的情報を抽出検討して、大般若経の成立を明らかにするとともに、当該地域に集まってきた人々の交流圏の広がりを追究する。地域史研究としてはオーソドックスな研究であるが、研究方法として近年成果が積み重ねられている赤外線撮影など新しい手法を取り入れ、また関連研究として經典の付属品の調査や旧蔵寺院の石造物調査・經典を撮影したガラス乾板史料調査を行うなど、一つの対象に多様なアプローチを試みることににより、引き出しうる歴史情報を増やし、併せて離島所在史料を研究資源として保全・整備することを企図するものである。

本年度においては共同利用共同研究拠点「一般共同研究」「小値賀町善福寺所蔵大般若経ならびに関連史料の調査・研究」（研究代表者平田賢明）・画像史料解析センタープロジェクト「離島所在史料の研究資源化」（研究代表者須田）

等と連携し、七月・一〇月・三月と三回の現地調査を行なって、經典断簡約一〇〇点の整理撮影、經典表見返の赤外線撮影、經典一冊毎の調査作成（未了）、小値賀町歴史民俗資料館寄託のガラス乾板史料の調査撮影等を行なった。現地調査中には小値賀町公民館ホールで「善福寺所蔵大般若経調査について」と題する講演も行なった。また松浦史料博物館に出張し、平戸藩作成の寺社取調記録や藩領を描いた絵図類を調査撮影した。

所内研究プロジェクト

地震火山史料プロジェクト

一、メンバー

杉森玲子（地震火山史料連携研究機構長）・及川亘・山田大造・荒木裕行・林晃弘（以上四名は同機構兼務）小瀬玄士・小林優里

二、活動の概要

(1) 予算

地震火山噴火予知研究協議会 史料・考古部会課題「史料による近代以前の地震・火山活動の調査・分析とその公開」（実施機関・東京大学史料編纂所、代表・杉森玲子）／同部会課題「歴史地震・噴火に関する分野横断的なデータベースとコミュニティカタログの構築」（実施機関・東京大学地震火山史料連携研究機構、代表・大邑潤三）／地震（長期予測）部会課題「地震火山関連史料を活用した低頻度大規模地震火山災害の調査」（実施機関・東京大学地震火山史料連携研究機構、代表・大邑潤三）

(2) 地震予知総合研究振興会との研究協力

地震予知総合研究振興会と史料編纂所は、昨年度中に「地震史料の調査・収集及び利活用に関する覚書」を締結し、相互に協力することを確認した。本年度も、同会研究員（榎原雅治・水野 嶺）と緊密に協力しながら史料調査等の研究活動を行った。

(3) 地震火山史料連携研究機構の再設置

地震研究所と史料編纂所が連携して二〇一七年度に設立した地震火山史

料連携研究機構は、二〇二三年度末に設置期限を迎えた。それに先立って再設置の申請を行い、一〇年間（二〇二四年度～二〇三三年度）の再設置が認められた。史料編纂所からは引き続き、五名が機構の教員を兼務している。

三、成果の概要

(1) 日記史料に基づく地震・火山関係記事の収集

一九世紀前半の日記史料を全国的に調査し、一八〇〇年から一八六七年までの有感地震に関する記事を収集している。これまで、青森県から鹿児島に至る日記史料の調査を通じて、既刊地震史料集に収録されていない記事や、修正が必要な記事を多数発見してきた。

このうち、一九世紀中頃の巨大地震・大地震が多発した時期の有感地震及び無感の情報については、GIS（地理情報システム）を用いた「日記史料有感地震データベース」に収録し、二〇一八年より試作版を地震火山史料連携研究機構のサイトで公開している。このデータベースは、有感地震を発生時間ごとに集計・表示する機能や、有感地震の記録場所と時間と大きさの推移を図示する機能を有している。

この取組みに関連して、本年度に実施した史料調査は下記の通りである。一部の調査では、プロジェクトメンバー以外の方の参加を得た。なお、地震・火山史料の調査を通じて蓄積してきた調査について、そのデータの公開に向けた検討を行っている。

熊本博物館「東海道地震記録」ほか・熊本県立図書館「荒木家文書」ほかの調査・撮影（五月）／宇和島伊達文化保存会「宇和島伊達家文書」の調査（六月）／宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館「高岡名勝志」の調査・撮影（六月）／葉師寺「年預所記録」の調査・撮影（七月）／奈良県吉野山桜本坊「桜本坊文書」の調査（七月）／西条市立小松温芳図書館「小松藩会所日記」「高鴨神社日次記録」の調査（八月・一月）／熊本大学附属中央図書館「阿蘇大宮司家文書」ほかの調査（九月）／東京大学史料編纂所「高鍋城図」（九月）の調査／明治大学博物館「内藤家文書」（一〇月）の調査／高鍋町歴史総合資料館「高鍋城明和六年大地震破損覚書絵図」の調査（一〇月）／富山県宮崎文庫「横正遠 嘉永甲寅地震雑記」

の調査（十一月）／佐伯市歴史資料館「佐伯藩郡方町方御用日記」の調査（十一月）／仙台市博物館「伊達家文書」の調査（十二月）／柳川古文書館「立花家文書」ほかの調査（二月）／都城島津邸「都城島津家文書」の調査・撮影（三月）

(2) 既刊地震史料集のテキストデータ化と校訂作業

既刊地震史料集の全文テキストデータ化は二〇二二年度に完了し、「地震史料集データベース」を正式公開した。引き続き、地震史料集所収史料の原典による史料校訂およびデータ修正の作業を進めている。本年度は、これまで別々に行っていた史料校訂とデータ修正を一体の作業として行うこととし、増訂三および新収三の史料校訂・データ修正を進めた。作業は学術専門職員によった。史料調査や史料・考古部会の他の研究課題で判明した修正内容も反映していく方針である。

(3) 情報付与のための研究

史料と史料に登場する地名の関係を、Web GISベースのシステムを介して可視化するために、二〇二二年度より、自然言語処理を専門家とする情報工学研究者と連携して、AIによる史料中の地名表現の自動抽出、および地名表現のマークアップに取り組んでいる。本年度は新収三・四・四別を対象に、学習データの追加、および実践的な自動地名付与を行った。学習データを利用することにより、F値（ $\text{F値} = \frac{2 \times \text{適合率} \times \text{再現率}}{\text{適合率} + \text{再現率}}$ ）は約〇・五四から約〇・七七五（二〇二二年度）に向上していたが、今年度は〇・八三九へとさらに向上した。人手で修正したデータを追加して学習させた場合は、〇・八四〇へと改善がみられた。

(4) 個別の地震・火山活動に関する研究の例

①熊本県立図書館所蔵「荒木家文書」のうち「日記大地震有之等諸事書付」は、昨年度調査した熊本博物館所蔵「東海道地震記録」に類する史料であることが判明した。嘉永七年十一月四日の東海地震後の東海道で、同じ被害状況を別人が見た記録として両者の比較が可能である。なお、「東海道地震記録」の調査・研究は、熊本博物館での常設展示（二〇二五年二月）につながり、災害に関する市民の理解や防災への意識を高めるという点でも成果をあげた。

②奈良県吉野山桜本坊において桜本坊文書を調査し、家光・家綱期の老中松平乗寿らが寺社・公家とやりとりした書状の控のうちに、慶安二年六月二一日（一六四九年七月三〇日）の江戸大地震に関する記述があることを発見した。地震情報伝達ルートを示す例として貴重である。

③山口県文書館所蔵毛利家文庫「浦日記」について、昨年度までに全冊の撮影を完了したことを受け、史料の画像公開と記事の分析を行った。「浦日記」は既刊地震史料集に部分的に採録されているが、既刊史料集に示された記主の所在地（震動の記録された場所）の誤りと未採録の地震事例が多数判明した。

④宇和島伊達文化保存会において、「宇和島伊達家文書」のうち『国元日記』（原題「大控」「日記」ほか）を中心に調査した。史料の分析から、日向灘を震源とする歴史地震の分析時に、宇和島の記録の有無は、震源判断の一助となり得る可能性があることが判明した。

⑤東京大学史料編纂所所蔵「高鍋城図」および高鍋町歴史総合資料館所蔵「高鍋城明和六年大地震破損覚書絵図」を調査した。明和六年七月二十八日（一七六九年八月二十九日）の日向灘地震での城の被害の状況から、高鍋では震度六に達していたとみられることが判明した。

⑥The National Archives (UK) 所蔵のCaptains logs等の分析によって、小笠原諸島父島での一八二六年一月の津波とされる事象には気象災害の可能性が含まれており、発生時期に関する従来の理解にも誤りがあることが判明した。また、国立公文書館所蔵「小笠原島日記」等の史料の分析と数値計算によって、小笠原諸島父島に一八五四年安政東海・南海地震による津波が到達した時刻に関する史料の記述は概ね正しく、数値計算で求められる津波の振幅は史実を再現できることが判明した。

⑤ 教養学部学術フロンティア講義の開講

教養学部前期課程Sセメスターに学術フロンティア講義「歴史資料と地震・火山噴火」を開講し、杉森・及川が講義を担当した（地震研からは加納靖之准教授・前野深准教授）。履修登録者二三四名（文系七〇名・理系一六四名）。単位認定に必要なレポートの提出者一八〇名であった。授業は初回のみオンライン、第二回以降は対面形式で行った。

⑥ 東京大学オーブンキャンパス二〇二四「バーチャル安田講堂」への出席本部社会連携推進課からの依頼を受け、オンラインで行われたオーブンキャンパス二〇二四の企画として、地震研の加納准教授と杉森が「バーチャル安田講堂」（バーチャル東大の安田講堂内部）で講演「歴史資料と地震・火山噴火」を行った。

⑦ 論文・学会報告など

《論文・報告書等》

榎原雅治「東海の災害・環境と交通路」（杉山一弥編『東海の中世三室町幕府と東海の守護』吉川弘文館、二〇二四年）

水野嶺「十九世紀前半肥後国下の地震―中小地震記録の集積と分析―」（『月刊地球』四七一、二〇二五年）

杉森玲子「小笠原諸島父島における『一八二六年一月の津波』の再検討」（『月刊地球』四七一、二〇二五年）

林晃弘・水野嶺「熊本博物館所蔵『東海道地震記録』」（『東京大学史料編纂所研究紀要』三五、二〇二五年）

《学会・シンポジウム等での発表》

杉森玲子「小笠原諸島父島における『一八二六年の津波』の再検討」（日本地球惑星科学連合二〇二四年大会）

杉森玲子「小笠原諸島を襲った一八五四年の津波」（『巨大地震・巨津波に関する国際研究集会―二〇〇四年スマトラ・アンダマン地震から二〇年間の進歩と今後の展望、二〇二四年』）

榎原雅治「寺社修造件数からみた『明応南海地震』の可能性」（第四一回歴史地震研究会、二〇二四年）

水野嶺「明応七年六月十一日地震の再検討」（第四一回歴史地震研究会、二〇二四年）

水野嶺・加納靖之・榎原雅治「日向灘を震央とする近世の地震」（日本地震学会二〇二四年度秋季大会、二〇二四年）

楠本聡・今井健太郎・杉森玲子・堀高峰「小笠原諸島父島の一八五四年安政東海・南海地震津波」（日本地震学会二〇二四年度秋季大会、二〇二四年）

杉森玲子「一七六九年明和日向灘地震における高鍋城の被害」(第一二回
歴史地震史料研究会、二〇二四年)

天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設プロジェクト

本プロジェクトは、二〇二〇年度より二〇二四年度までの五か年計画で、二〇二四年度は最終年度である。①関係史料のデジタル画像による蒐集とWebおよび本所閲覧室での公開、②京都御所・同離宮等関係資料による文理融合型の学際的研究、③関係史料群の調査研究とその成果を論文や公開講座などで発信することを柱とし、二〇〇七年度以来、大型科研究費により遂行してきた天皇家・公家の文庫・宝蔵に関する研究を継承する研究拠点の創設を目標とする。

1. 史料画像の蒐集・公開

天皇家・公家文庫収蔵史料の調査研究およびデジタル画像の蒐集公開を遂行した。画像公開は、本所データベースのHCCAT Plusから、所蔵機関との取り決めにより、インターネット公開と本所閲覧室での公開、また関係機関への画像提供によるインターネット公開や訪問利用となっている。公開にあたっては、目録情報の付与に努めてきた。

本年度は、宮内庁書陵部所蔵の柳原家本・中井家文書(寛政度)京都御所造営関係文書・近世公家日記・九条家本「北山抄」ほか典籍、また陵墓石塔実測図、西尾市岩瀬文庫と京都府立京都学・歴史館所蔵の柳原家本の史料画像を追加してWeb公開した。これで柳原家旧蔵本の主要部分が揃い(歴史彩館分は一部)、横断的な閲覧が可能となつて、蔵書の復元研究の基盤が整った。京都御所東山御文庫本については、『皇室の至宝』(毎日新聞社)のために撮影したカラーフィルムのスキャンを閲覧室で公開を開始した。本年度も書陵部本(近世公家日記、壬生家本『続左承抄』など)のデジタル画像による蒐集を進めており、準備が整い次第、追って公開予定である。これまでにデジタルデータで蒐集した画像は累計約一三四万コマ(東山御文庫本、宮内庁書陵部本、陽明文庫本、岩瀬文庫本)で、うちWeb公開も約八八万コマ(書陵部本、岩瀬文庫本)となり、本所・本学および京都府立京都学・歴史

館等の他機関や門跡寺院等の関係史料を加えた蒐集画像は一四〇万コマ以上に及んだ。

2. 京都御所・同離宮等関係資料及び天皇家公家文庫収蔵史料群の調査研究と発信

全体の取りまとめの報告会として研究集会「禁裏・公家文庫研究の現段階」(オンライン、二〇二五年三月二日)を開催した(二七九頁参照)。

課題②異分野融合による御所・宮殿の総合的な研究としては、東京大学大学院工学系研究科・海野聡氏との連携のもと、中井家文書を核とした建築史学との協業を進めており、今年度には第五回国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を開催した(一七〇頁参照)。

また、二〇二三年度から古代の宮殿研究のシンポジウムを開催することとなり、今年度は大阪歴史博物館協力のもと、シンポジウム「前期難波宮・藤原宮の儀礼と空間構成」(大阪歴史博物館、二〇二四年十一月一日、参加者五一名)を開催した。内容は次の通り。

市大樹(大阪大学大学院人文学研究科教授)

「前期難波宮・藤原宮の中核部とその利用形態」

李陽浩(大阪歴史博物館学芸員)「前期難波宮朝堂院の空間構成」

廣瀬寛(奈良文化財研究所飛鳥資料館古墳壁画室長)

「藤原宮の造営過程と儀礼空間」

海野聡

「前期難波宮と藤原宮にみる古代宮殿の内裏・朝堂院の空間構成と重層建築」

積山洋(都城制研究会代表・大阪市文化財協会学芸員)

コメント「前期難波宮、飛鳥宮、藤原宮の軸線プランと中核部儀礼空間」

その他、シンポジウム「京都大工頭中井家と江戸幕府・朝廷」(京都府立京都学・歴史館、二〇二四年二月七日)にも協力した。

市民向け公開講座を金鶏会館(県立長野高校同窓会館)で九回開催した。二〇二四年七月六日 小塩慶「説話の継承と変容

七月二〇日 石上英一「読み解く「光明皇后伝」で学んだこと」
――摂関期の消えた逸話群をめぐって――

- 七月二七日 加藤友康「日記から読み解く平安貴族の〈世界〉」
- 八月三日 山口英男「儀式次第から郡司の〈譜第〉を読み解く」
- 八月二四日 田島公「『内裏式』序と『寛平二年藏人式』序を読み解く」
- 二月一四日 金田章裕「与等津と平安京―河港の位置と施設―」
- 二〇二五年一月二五日 傳田伊史「古代の大災害と信濃国の社会変動 その二―八世紀の信濃国地震と地変を中心に―」
- 二月一五日 倉澤正幸「上田地方における古代の信濃国分寺、国府跡推定地の検討―過去の発掘調査成果等から―」
- 三月二二日(土) 田島公「伊奈評衡の成立・評寺の建立と伊那郡衙の機能―文献史料から見た史跡恒川官衙遺跡―」
- 刊行物、発表論文は次の通り。
- 1 名和修・尾上陽介・田島公企画・監修『陽明文庫講座図録 六』東京大学史料編纂所、二〇二五年、全四九頁
- 2 田島公「日本・中国・朝鮮対外交流年表―文武天皇元年(六九七)―」
建久四年(一一九三)―汲古書院、二〇二五年、全二五二頁
- 3 海野聡・李陽浩企画・監修『シンポジウム「前期難波宮・藤原宮の儀礼と空間構成」報告集』東京大学大学院工学系研究科建築学専攻海野研究室、二〇二四年、全八六頁
- 4 海野聡企画・監修『国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集(五)』同前、二〇二四年、全七二頁
- 5 田島公「永治二年正月十九日中原季遠申文」(前掲書1)
- 6 小塩慶「年中装束抄」(前掲書1)
- 7 芝崎有里子「和歌集断簡―玉葉和歌集―」(前掲書1)
- 8 藤原重雄「『勘例』紙背文書―『新千載和歌集』の撰集―」(前掲書1)
- 9 新井重行「後柏原院御即位御灌頂記(守光公記)」(前掲書1)
- 10 志村佳名子「笙・銘「菊丸」―銘文とその伝来―」(前掲書1)
- 11 太田克也「慈鎮和尚自歌合の古写本―国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧藏典籍古文書所収「慈鎮大僧正集」について―」『三田国文』六九、二〇二四年
- 12 藤原重雄「光格上皇修学院御幸に新造された四方輿―葵祭斎王代の腰輿

―』『国立歴史民俗博物館研究報告』二五〇、二〇二五年

13 藤原重雄「扁額模写の蒐集および額字集―『聆涛閣集古帖』を手がかりに―」同前

14 藤原重雄・太田克也「宮内庁書陵部所蔵九条家本『三条内府記』『初度行啓次第并同記』ほか」『東京大学史料編纂所研究紀要』三五、二〇二五年

本研究プロジェクトは、特任研究員芝崎有里子、学術専門職員糸賀優理・太田克也・尻池由佳・山本遥大・和田麻子の協力を得ており、画像史料の蒐集には新井重行、公開のためメタデータの付与に関しては遠藤基郎の指導・協力による。

比較的規模の大きな資金によるプロジェクトとしては本年度にて終了するが、特に京都御所東山御文庫・宮内庁書陵部・陽明文庫など大規模史料群の調査および画像蒐集は、本所固有の研究課題として継続的に取り組むべきものであり、古典籍の画像公開をめぐる状況が大きく変化するなか、作業内容面での力点を見直すとともに、安定的な人員と財源の確保が必要である。

(藤原重雄・小塩慶)

「原本史料情報解析」の方法による南九州関係文書の保全と研究プロジェクト活動報告

一、プロジェクト名称「原本史料情報解析」の方法による南九州関係文書の保全と研究

二、プロジェクトメンバー

末柄豊(図書部長)・桑田恵里・小瀬玄士・高島晶彦・高山さやか・

谷昭佳・西田友広・畑山周平・本郷恵子・松澤克行・宮崎肇・

村井祐樹(代表)・村岡ゆかり・山口悟史・山田太造

三、活動概要

本プロジェクトは、二〇一五―一九年度の五年間にわたる「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」を継承し、同プロジェクトで実施した原本史料研究の方法を用いて、鹿児島県を中心とする南九州地域に関わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を行うものである。

本プロジェクトは二〇二〇年一〇月に発足した。発足の経緯は以下の通りである。「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」は、国宝「島津家文書」の修理・研究をおもな内容としていたが、同プロジェクト遂行の過程で、鹿児島県の島津興業および鹿児島銀行の二つの企業とご縁がなくなり、奨学寄付金を受領する運びとなった。島津興業からは「島津家文書研究のため」、鹿児島銀行からは「鹿児島県の歴史遺産の保存状態の改善／鹿児島県の歴史・文化等の研究事業への貢献」という目的で、それぞれ奨学寄付金を受けている。そこで両社からの寄附金を活用する新たな研究事業として、本プロジェクトを立ち上げた。実施にあたっては、科研の基盤研究(B)「『原本史料情報解析』の手法による益田家文書を中心とした中世武家文書の史料学的研究」(代表 村井祐樹 二〇二四～二七年度)のグループと連携する体制で進めている。

本年度は、科研グループと連携して、南九州関連史料の調査・撮影を実施したほか、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二三―六「島津家文書」御文書」外中世文書集「小瀬玄士・畑山周平・村井祐樹編」の作成に協力した。また、文化庁の「国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金」の交付を得て、二〇二二～二六年度の五年計画で進めている『島津家文書』のうち「歴代亀鑑」「宝鑑其一」「宝鑑其二」の手鑑計四帖の修理事業について、解体時の撮影や調査等に協力した。また『入来院家文書』第六・八・九巻(計三九通)および『益田家文書』第三・六・一四～一六巻(計九七紙)の解体・養生・撮影を行い、まぐりの状態で保管することとなった。これにより、一般の利用に供することが容易になった。

研究発表会

第二九三回その1 二〇二四年六月二〇日 担当…中世史料部門
 「律令官僚制における兵部省の役割」

古田 一史

本報告では、大宝律令施行直後の時期に兵部省の役割がどのように推移していったのかを、律令官僚制の側面から検討した。兵部省の職掌は軍事行政

と武官人事であり、律令官僚制においては文官人事を担う式部省と対をなす官司であった。しかし、その武官人事については、大宝律令によってただちに成立したわけではなく、奈良時代半ばまでに確立していったとされている。この点について、基本的な史料の再解釈を試みた。

まず、律令官僚制において人事の基礎となる、官人の毎年の勤務評定(考)とその積み重ねによる位階昇叙・任官(選)について記した文書(考選文)がいかなる手順で受理されたのかを、法制史料と『続日本紀』を用いた分析によって検証した。考選文は太政官(弁官)に提出されるものと、式部省・兵部省へ直接提出されるものがあつたが、その提出経路は大宝律令施行後まもなく改定されて、すべての考選文が諸官司から弁官へ提出された後に返却され、再度諸官司から式部省・兵部省へ提出されることとなった。従来、これは式部省・兵部省の文書受理機能に不備があつたための措置とみられていたが、諸官司から弁官および式部省・兵部省へ文書が進上される際には、諸官司の五位以上官人と受理する側との間で文書を前に口頭で決裁を行っていたと考えられることに着目し、諸官司が式部省・兵部省による口頭決裁に参列するという構造から、式部省・兵部省には官人による天皇への奉仕の報告を統括・媒介する役割があつた可能性を指摘した。

次に、式部省と兵部省の間での文武官人事の分掌関係がどのように推移していったのかについて、『続日本紀』の記事を中心に検討した。令文では文武の別に応じた人事業務の分掌となつてはいるが、七世紀には式部省の前身である法官が文武の別なく人事を担っていたこと、また八世紀前半には兵部省の管掌範囲を拡大するような史料がみえることから、兵部省の武官人事業務確立は遅れていたとするのが通説である。しかし、これらは兵部省の人事業務が本来あるべき範囲にまで拡大したというよりも、むしろ律令官僚制内部での文武官の区別が浸透していき、所属する官司ごとに文武を系列化していくという官僚制の進展に伴い管掌範囲が受動的に拡張していく現象であることを述べた。一方で、人事権という面からみると、古代官僚の中核となる職事官の任命について、大宝律令施行と同年に早くも直接対面して人物を審査するという式部省・兵部省の根本的な権限が解消されていた。以上の動向をまとめると、式部省・兵部省は人物を選定するという人事の根幹となる機能

を縮小されており、官人の勤務に対する評定とそれに応じた位階昇叙の機械的算定という部分で文武の分掌関係を整理していたと評価できる。

なお付論として、天皇所有の馬（御馬）の管理をめぐり、大宝令に存在して養老令で削除された条文の分析から、御馬の頭数把握は天皇身辺の業務を担当中務省が行っており、これが軍需物資として牛馬を管理する兵部省へと一元化されていたこと、しかしながら兵部省は天皇の財産である御馬を直接管理することはできず、文書による頭数把握にとどまったことを指摘した。

以上の検討から、兵部省の役割は、一般的な行政の領域においては武官・軍事に関する管理などの面で拡大していく傾向が看取される一方で、特に天皇と官人との関係や天皇権力が問題となる場面では、むしろ律令に示された構想から後退していったとも評価しうるとい見通しを示した。

古代国家における律令制の意義を解明するためにも、官僚制や行政全般に内包された複数の論理がどのように官僚制の形成と展開を規定したのか、そしてその中で式部省・兵部省がどのように構想されたのかを、前後の時代とのつながりも意識しながら検討していくことを今後の課題としたい。

当日の発表はオンライン形式で行われ、四六名の方にご参加いただいた。

第二九三回その2 二〇二四年六月二七日 担当…中世史料部門

「有封寺の基礎的考察——日本古代における寺院制度史の一駒——」

村上孟謙

日本列島の古代国家は、王権・国家を支えるイデオロギーの一つとして、仏教を極めて重視した。それゆえ仏教寺院の保護・統制にも意を払い、寺院制度の整備にも力を注いだ。日本古代の寺院制度は、寺院をいくつかのランクに序列化し、各ランクに応じた保護と統制を加えて監督する体制に基づいていた。通説によると、天武九年（六八〇）に〈官大寺―有封寺―一般諸寺〉という三ランクが設定され、その枠組みが一〇世紀前葉まで保たれたという。このうち第一位の官大寺については、多くの論者によって理解が深められてきた。一方、第二位の有封寺については、「律令制下では原則的に禁じられた寺封の施入に、例外的に預かれる点で、準官大寺とも言うべき寺格」との

評価が、一応与えられてはいるものの（中井真孝「寺封の成立について」、本格的研究は皆無である。それゆえ、宗教的機能や行政的待遇、指定根拠や設置範囲など、基本的な事柄はほぼ未解明と言って良い。そこで本報告では、有封寺という寺格について、史料の精査と、それを通じた基本的事実の確定を目指した。この作業によって、日本古代における寺院制度史の理解も、より深まるはずである。

第一章では、「有封寺」の語そのものが現れる史料だけを取り上げて、有封寺の特質を抽出した。意外なことに、こうした作業は、先行研究ではほとんど為されてこなかった。この作業の結果、以下の諸点を明らかにした。一、「有封寺」の史料の初見は、『日本三代実録』貞観二年（八七〇）二月二十五日条である。二、宗教的には、官大寺と同じく国土擁護を担い、官大寺を補完する存在に位置付けられる。三、行政的待遇においても、官大寺との格差はほとんど認められない。このうち三点目については、三司の指揮下に属したり、僧職の補任に勅を要したりなど、天皇・王権との近さも看取された。また二点目と三点目からは、有封寺がまさしく「準官大寺」と呼ぶに相応しい存在であることも確認できた。

第二章では、有封寺という寺格の法的成立を『日本書紀』天武九年四月是月条に遡らせる通説を再検討した。前章において、「有封寺」の史料の初見が貞観一二年まで下ることが判明した以上、「成立」から初見まで約二〇〇年もの開きを想定する通説に疑義が生じたからである。通説によると、国家の把握する全寺院は、天武九年四月勅によって、〈官大寺―有封寺―一般諸寺〉の三ランクに分たれたという。しかし、勅そのものの読解からも、前章で検討した平安前中期の有封寺関連史料との比較からも、有封寺という寺格の法源を天武九年勅に求めることは不可能である。天長・承和年間には「五畿内有二封戸・田園一寺」・「諸寺有二封戸及田園一堪資供一者」など、「有封寺」の先駆的表現を確認できるが、『明法肝要抄』・『続日本後紀』、これらと定型化した表現ではなく、法的寺格を示す専門用語としてのニュアンスも読み取れない。画期は、承和三年（八三六）三月二十五日太政官符に求められよう（『類聚三代格』卷二、経論并法会請僧事）。この官符では、毎年の夏と秋に、「京畿有食諸寺」にて、仁王講と最勝講を開くことが定められた。毎年恒例

の年中行事であるからには、会場となる「京畿有食諸寺」はある程度リストアップされ、固定化されていたはずである。この「京畿有食諸寺」こそ、貞観一二年に初見し、平安中期に散見する「有封寺」の直接的起源であろう。すなわち有封寺という寺格の法的成立は、九世紀中葉に置くべきである。天長・承和年間には、弘仁年間後半以来の災害・飢疫に対処すべく、様々な政策が打ち出された。有封寺の創設も、その一環と捉えられる。

第三章では、実際に有封寺に指定されていたと思しき寺院をいくつか取り上げ、それらの共通項から、有封寺の指定条件を考察した。具体的には、河内国西琳寺・大和国西安寺・山城国海印三昧寺の三箇寺を取り上げた。これらの寺院は、それぞれ異なる創立年代をもつものの、いずれも天皇個人との人格的紐帯を有し、それを根拠として特権的地位を得ていた点で共通する。おそらく有封寺とは、天皇との個人的なコネによってもより特権的地位にありながら、個別に監督されていた数多の寺院を、体系的に把握して、国家の護国法会体制に再編成すべく設けられた寺格であったのであろう。なお討論の場において、菊地大樹教授より、西琳寺を有封寺とみなす私見は史料の誤読であるとのご指摘をいただいた。ご指摘に感謝するとともに、西琳寺を有封寺とみなす私見は撤回したいと思う。ただし有封寺の歴史的性格についての結論は、いまだ有効と考えている。

従来、日本古代の寺格制度については、天武朝に〈官大寺―有封寺―一般諸寺〉という序列が創出され、それが一〇世紀前葉まで変容することなく保たれたと理解されてきた。しかし、天武朝の序列は〈官大寺―定額寺〉というもので、それは〈官大寺―国分寺―定額寺〉というふうに変化して一〇世紀に継受される。かたや〈官大寺―有封寺―一般諸寺〉という序列の創出は九世紀中葉で、それは一〇世紀どころか一一世紀にも継承された。〈官大寺―国分寺―定額寺〉型が列島全土を視野に収めた序列であるのに対し、〈官大寺―有封寺―一般諸寺〉型は畿内だけを対象とする序列であったと思われる。九世紀中葉は、列島内部において、種々の面で畿内近国と他地域との偏差が顕在化する時期であるといわれる。寺院制度における二種類の序列も、その一端なのかも知れない。なお〈官大寺―有封寺―一般諸寺〉という序列は、やがて〈官大寺―有封寺―御願寺―一般諸寺〉という形へと変容する。

あるいは御願寺という寺格は、有封寺のうち、天皇・王権との紐帯を維持・強化できた寺院が分離して成立したものではあるまいか。日本古代の寺院制度は、「官大寺・定額寺から御願寺へ」というシエーマで論じられる傾向にあるが、それをより正確に理解するためにも、有封寺はカギとなる存在であるに違いない。
(オンライン開催・四三名)

第二九四回 二〇二五年三月一七日 担当…近世史料部門

「四〇〇〇架の写本から——中世禅籍史料研究P」と大日本史料六編」

山家浩樹

四〇〇〇架写本から、中世禅籍史料研究プロジェクトで電子テキスト化した史料一点、およびなしえなかった史料二点を取り上げ、内容紹介とともに論点を提示した。

前半では、電子テキスト化した『景南和尚語録』（四一一六―三一）を取り上げ、景南英文（一三六五―一四五四）の七点の法語からなることなど内容を紹介した。具体例として、紹興院殿（正親町三条公雅）の十三回忌上堂法語を取り上げた。相国寺での法事である点、簡翁志敬の嵯峨塔頭紹興（安）院を称号としている点に注目し、公雅は足利義教正室尹子の父であることから、義満・義持の正室父である日野資康の例を踏襲したと想定した。日野資康は、簡翁の師空谷明応の嵯峨塔頭である真浄院を称号とし、相国寺で年忌仏事が催行されている。踏襲した時期は、公雅七回忌のころと推測される。

次に、『景南和尚語録』を伝えた景南の塔頭、南禅寺東禅院の伝来史料を概観し、史料編纂所蔵となった『南禅寺東禅院文書』（〇〇七一―七三）のなかから、未翻刻の三通を紹介した。うち一通から、文明年間、東禅院は、月庵宗光弟子香林宗蘭の塔頭真乗院の配下となつてゐることを指摘した。法系の異なる塔頭の下に置かれた背景として、政治状況とともに、景南、および月庵にいたる法系は、美濃の幕府奉公衆と密接に関わることを挙げた。

後半では、『古徳法語』（四一一四―一八）および『儀雲和尚法語』（四一一六―一六）を取り上げた。前者は、檀溪心涼（虎関師鍊弟子）の孫弟子月泉祥洵（南禅寺等住持）の法語を中心とし、後者は、月泉の弟子儀雲士（示）

敦の法語を中心とする。いずれも類本はほぼ伝存しない。これら二書にみえる檀溪関係史料は、かつて『大日本史料』応安七年（一三七四）八月八日檀溪歿条で檀溪の伝記を編纂した際に収録できなかった。そこで、伝記の補遺として紹介し、あわせて檀溪開山の正法寺（三重県いなべ市大安町旧在）に関わる史料（鴨神社所蔵）も掲げた。

次に、この二書および檀溪伝記から、虎関門下（とくに檀溪門下）と伊勢国との関わりを整理した。まず、正法寺の関わる伊勢国所領を整理し、虎関開山の伊勢安国寺（四日市市西日野旧在）との連関のなかで理解する必要があると指摘した。次に、二書および『慧日山宗派図』檀溪下に、伊勢の寺庵が多く確認され、双方に共通する寺庵がいくつかあることを指摘した。そして、伊勢安国寺を検討し、虎関の塔頭海蔵院下ではあるものの、十五世紀なかばには、実質的には檀溪下で管理されていた可能性を指摘した。伊勢安国寺は、天正年間には妙心寺派に転じ、ついで尾張に移転する。一方、現地は安国寺の由緒を引き継ぎつつ真宗化しており、妙心寺派への転派などは真宗化に影響された動きであろう。さらに正法寺の少ない知見を整理した。正法寺も同様に現地は真宗化している。

ついで、『古徳法語』『儀雲和尚法語』の雑録的な個所に、大徳寺僧の法語などが多いことを指摘した。『古徳法語』では、永正・大永年間の雪岫瑞秀（伊勢出身）の詩文など。『儀雲和尚法語』では、天文二十一年（一五五二）の江隠宗顕と思われる六角定頼の中陰供養法語などに加え、永禄三年（一五六〇）、妙心寺派僧による今川義元の葬儀の法語も含む。二書に大徳寺および妙心寺派の法語等が混入しているのは、伊勢安国寺の妙心寺派への転派と軌を一にするとも理解され、両書は、東福寺派から大徳寺・妙心寺派への変化のなかでの産物という可能性がある。

最後に、両書の写本としての分析を行った。『古徳法語』は、奥書から天龍寺妙智院を経ていることがわかる。『儀雲和尚法語』は、蔵書印「正受禅院」から、大徳寺正受院を経ている。両書は伝来を異にすると思われる。正受院の開基は伊勢関氏であり、関氏は、大徳寺僧東溪宗牧を請じて、正法寺（亀山市関町旧在）を建立している。禅籍PJで公開する「春林宗俣和尚等法語」（〇一一六—三）には、大永三年（一五二三）の大徳寺僧玉英宗尚による関

正法寺での入室問禪が収められており、『儀雲和尚法語』の伝来を検討するうえで参考となる可能性がある。（オンライン開催）

国際研究集会

国際研究集会「第五回 御所（宮殿）・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」

二〇二四年六月一六日

東京大学史料編纂所（担当…天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設「プロジェクト」、京都府立京都学・歴史館・科学研究費・基盤研究(A)「東アジアにおける工匠関連史料にもとづく建築生産史の再構築と技術蓄積・伝播の解明」（研究代表者…海野聡）、科学研究費・基盤研究(B)「中近世の建築関連史料の史料学的基盤構築と高度利用手法の開発」（同…藤井恵介）、二〇二四年度一般共同研究「中井家文書」を用いた大工組織の業務復元に関する基礎的研究（同…角田真弓）、公益財団法人松井角平記念財団研究助成「中井家文書」にみる寛政度と安政度の御所造営と継承理念（同…海野聡）を主催として、京都府立京都学・歴史館小ホールにて開催した。参加者四六名（現地四四名、オンライン二名）。

第五回目として、「宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」からみる造営現場の実態」というテーマを立てた。金田章裕館長の挨拶に続き、海野聡准教授から趣旨説明を行い、報告が開始された。各題目は以下の通り。

【基調講演】

谷直樹「中井家の建築史研究と中井家資料の修理保存」

【個別報告】

海野聡「桂離宮の用材にみる設計思想と造営現場の接続」

朱鳳亭（東京大学大学院工学系研究科修士課程）

「禁裏廻廊仕様書」の解釈および現存建築との比較」

小野優華（同前）

「禁裏廻廊木積」の積算方法の検討および安政度禁裏廻廊の復元」

白松楠（同前）

「安政度禁裏廻廊関係造営史料についての比較検討およびその位置付け」

前田瑠嘉（同前）「禁裏廻廊工割帳」に見る「工割帳」の解釈と検討」

同 「禁裏清涼殿并附物共工割帳」に見る安政度工割帳の作成」

最後に石原秀樹氏（宮内庁京都事務所長）から閉会の挨拶を頂戴した。翌日の桂離宮の調査にもご協力いただいた石原所長をはじめ宮内庁京都事務所の皆様に感謝申し上げます。

（藤原重雄）

国際研究集会「砂糖、ワイン、ジャワイ文書：17～19世紀、文化的風景の変容」

二〇二四年十一月九日

本研究集会は、17～19世紀のインド洋とシナ海におけるヨーロッパ人と地域の人々の多様な交流を描くことを目的とした。同歴史空間は、伝統的にヨーロッパ人の活動の場として描かれてきたが、近年は、ムスリムの地域間ネットワークやペルシア語の伝播の点から、西アジアを起点とした宗教・文化交流の場としても注目されている。しかしそれら二つの事象の相互関係については、なおも研究が不足している。本研究集会は、砂糖とワインという生活文化や外交史料としてのジャワイ（アラビア文字表記の東南アジア諸語）文書を取り上げることで、宗教・言語にとどまらない、ヨーロッパ人の活動をも含み込む交流の諸相を明らかにすることを試みた。会は東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラムの協力を得て、伊藤国際学術研究センター二階ENDラウンジにて、対面とZoomによるハイブリッド形式で開催された。参加者六七名（対面一七名、オンライン五〇名）であった。

本研究集会は二部からなり、第一部は「砂糖」を扱い、第二部は「ワインとジャワイ文書」を扱った。それぞれ日本語と英語が使用された。

第一部では、二〇二四年八月にBloomsbury社より刊行された大東敬典著 *Sugar and the Indian Ocean World: Trade and Consumption in the Eighteenth-Century Persian Gulf* の書評会が行われた。まず著者大東が内容紹介を行った。同書は、ペルシア湾におけるオランダ東インド会社の砂糖貿易に目を向けることで、18世紀インド洋世界の社会・経済の変化について論じるものであった。それに対し、安平弦司氏、松井洋子氏、近藤信彰氏が、

それぞれオランダ宗教社会史、日蘭関係史、イラン史の立場からコメントを寄せた。異文化間交易における信用の役割、砂糖消費・流通・生産から見た日本との共通点・相違点、ペルシア語史料に見られる砂糖に関する記述など、多くの興味深い指摘があった。

第二部では、まずフィリピン大学ディリマン校より招聘したAriel Lopez氏が、*"Malay Diplomatic Correspondences at the National Archives of the Philippines, c. 1750-1900: Connections and Comparisons"* と題して報告を行った。Lopez報告は、フィリピン・マニラ国立文書館に所蔵されているジャワイ文書を手掛かりに、スペイン・マニラ政庁と東南アジア諸地域の支配者たちとの間で行われた外交の実態に迫ろうとするものだった。両者が結んだ条約の翻訳にまつわる問題、翻訳の担い手などが明らかにされた。それに対し、川口洋史氏が、18～19世紀にシヤムで作成されたタイ語、中国語、オランダ語の外交文書について詳細な紹介を行った。

続いてイギリス・グリニッジ大学より、Peter Good氏がZoomにより報告を行った。Good氏は、*"Persianate Luxury: The Tangible and Intangible Legacy of the Indian Ocean Wine Trade"* と題して、17～18世紀におけるペルシア・ワインの生産・消費、ヨーロッパ人などの商人によるインド洋各地への輸出について包括的な展望を示した。報告は、現存するペルシア・ワインの容器の画像を多数提示して、ペルシア・ワインが創出した豊かな物質文化を視覚的に伝えるものだった。それに対し、野澤文二氏が、大西洋からシナ海にかけて展開されたオランダ東インド会社のワイン貿易、彼らの植民地における消費などについて紹介を行った。

最後に約一時間の総合討論が、参加者から寄せられた質問に答える形で活発に行われた。

週末にもかかわらず多くの参加者を得ることができ、非常に活気のある研究集会となった。共催をいただいた諸機関にも、ここに記して謝意を表します。

東京大学史料編纂所共同利用共同研究拠点特定共同研究海外史料領域「本所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」（モンスーン・プロジェクトII）主催。東京大学史料編纂所 JSPS科研費20105827 B01

班「イスラーム共同体の理念と国家体系」、JSPS科研費21H04335共催。東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム協力。

(文責：大東敬典)

共同利用共同研究拠点特定共同(海外史料領域)「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」国際セミナー「アジア史研究におけるポルトガル語史料研究の現在」

二〇二五年三月二七日

趣旨 日本史・アジア史研究における南欧語史料の有益性は明治期より指摘され、史料編纂所でも戦前から編纂・研究事業がおこなわれてきた。現在実施中の特定共同研究においては、日本史ともつながるポルトガル語のアジア進出に関する基本史料の翻訳・要旨の紹介をおこなっている。このセミナーでは、ポルトガル史料を用いたアジア史研究における大家であるドウジャニラ・コウト氏(パリ高等研究実習院)を招き、これらの史料を活用した研究について俯瞰的なレクチャーをお願いした。またコウト氏の研究対象であるインド洋海域史を研究する本所の大東敬典氏にコメントーターとして自身の研究を報告いただいた。当日は対面のみの開催であったが、三〇人以上の来場者があり、活発な議論がおこなわれた。

会場：東京大学史料編纂所 福武ホール大会議室(対面のみ)

講師：Dejanira Couto ドウジャニラ・コウト(パリ高等研究実習院)

Pratique des Hautes Études Section des Sciences Historiques et Philologiques, Paris)

コメントーター：大東敬典 東京大学史料編纂所

主催：共同利用共同研究拠点特定共同(海外史料領域)「本所所蔵在外日本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」

本関係史料の多角的利用のための翻訳研究」

共催：科学研究費基盤研究(B)「16世紀西日本港町の構造と相関―文献・考古学資料の国際・横断的分析による―」(代表者岡美穂子)

(文責：岡美穂子)

研究集会

ワークショップ「写真の技法識別と取り扱い・保存」

二〇二四年八月五～七日

二〇二四年八月五～七日の三日間、東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター・同センター古写真研究プロジェクト(代表：箱石大)・JSPS科研費・基盤研究(B)「幕末明治期古写真の調査とその解析・復元・保全を総合的に捉える写真史料学の構築」(代表：谷昭佳)共催、文化庁後援により、標記のワークショップを開催した。このワークショップは写真史料を実践的に取り扱うものとしては、日本で初めての試みである。

本ワークショップの開催趣旨は、博物館に勤務する学芸員等の専門職員を対象に、一九世紀を中心とする写真の技法識別、取り扱いおよび保存等について、写真を収蔵する機関に所属する担当者に求められる基本的な知識・技能を養う機会を提供することにある。また、写真の整理・保存と学術資源化に関する知識・技能を教授することで、写真の保存と継承において重要な役割を担う人材の養成を目指すものである。

本ワークショップは、実習科目を中心とする三日間の現地参加プログラムとして実施した。概論講義科目では二名の講師を招聘し、高橋則英氏(日本大学上席研究員)による「写真術の誕生と技法の変遷・その保存の意義」、地主智彦氏(文化庁文化財第一課主任文化財調査官)による「文化財(歴史資料)としての写真」の二講義が行われた。専門講義科目では、桑田恵里(史料編纂所)による「写真古典技法による制作の実際」、高山さやか(同)による「デジタル史料撮影の実際」の二講義が行われた。本ワークショップの中核である実技科目では、講師として白岩洋子氏(白岩修復工房)を招聘した。多様な写真資料をサンプルとした実習・講義が行われ、写真技法の識別から保存・管理に結び付けるまでのプロセスを網羅した内容となった。

初開催となる今年度の参加者は、本所古写真研究プロジェクトおよび科研グループに携わる古写真の所蔵機関・博物館等の専門職員から募り、八つの機関から各一名の識者の参加をえた。一方で、オンライン配信により一般公

開した概論講義科目については、全国四五の博物館・大学・研究機関、文化財および美術品修復工房等から、七六名と多数の参加をえた。

三日間のプログラムを通じて、文化財としての写真を取り巻く歴史的背景と現状を概観し、実践的な実習を行うことで参加者の写真資料取り扱い技術向上に寄与する有意義なワークショップとなった。今回のような取り組みが継続的に開催されることへの要望も数多く寄せられ、主催者としては、今回ご参加頂いた方々をはじめ、関係機関とのネットワークをしつかりと維持し、さらに連携を深めていくためにも、継続的に写真資料の保存と継承に関する研修を企画したいと考える。

(桑田恵里)

シンポジウム「デジタル化と歴史研究の未来」

二〇二四年九月七日

二〇二四年九月七日(土)、東京大学史料編纂所主催シンポジウム「デジタル化と歴史研究の未来」を開催した。共催は下記の通りである。

JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業(JPJ S〇〇三二〇三二二〇〇一)、JSPS科学研究費基盤研究(B)「日本近世史科学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」(二三K二一九六四)／同基盤研究(B)「長期歴史ビッグデータを用いた日本の政治機構と都市構造の永続性の分析」(二三K二五五一六)／同基盤研究(S)「史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立」(二四H〇〇〇一一)／同基盤研究(B)「幕末維新期史料研究の学術資源化推進と国際共有基盤の新展開」(二四K〇〇一〇八)／同基盤研究(B)「日本型人材選抜システムの定量分析」(二四K〇〇二六五)／同基盤研究(B)「近世日本経済のデータ駆動型分析に向けた基礎的研究…物価・賃金・金利、貨幣両替相場」(二四K〇〇二七七)

本シンポジウムは、科学研究費基盤研究(B)「日本近世史科学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて」(以下当科研)において開催してきたデジタルライジング研究会の成果に基づき、紙史料集とデジタルデータとの有機的結合のもとに、歴史情報を公開するありかたを考察

するために企画された。シンポジウムの構成は、報告四本とコメント、そして報告者からコメントへのリプライ、そして参加者から報告者・コメントへの質疑応答という形とした。報告は、東京大学史料編纂所助教の菊地智博氏・中村寛氏、及び神戸大学経済経営研究所准教授の高槻泰郎氏、同大学院経済学研究科講師(当時、現京都大学大学院経済学研究科准教授)の山崎潤一氏が行い、東京大学大学院人文社会科学系研究科教授の中村雄祐氏及び史料編纂所准教授の山田太造氏がコメントに立った。開催方法は、史料編纂所大会議室での対面参加とZoomミーティングによるオンライン参加とを併用したハイブリッド開催であった。なお、本シンポジウムの各報告・コメントの詳細については、当科研の成果報告書にも掲載されているので、そちらも参照されたい。成果報告書は東京大学学術機関リポジトリより公開されている。

<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2013415>

シンポジウムでは、当科研の代表者で、デジタルライジング研究会を主宰してきた杉本史子氏(公益財団法人東洋文庫研究部専任研究員)による趣旨説明が冒頭に行われた後、各報告へと移った。

まず菊地氏による「『編纂知』のDX―大日本維新史料『井伊家史料』・『松平昭休往復書翰留』編纂とデータベース構築の経験から―」では、史料集編纂の過程で編纂機関に蓄積されてきた様々な暗黙知・経験知を「編纂知」として把握し、編纂過程における編纂知の実例、さらにデジタルデータ作成における応用例を紹介し、「史料集編纂」の将来像への見通しにも言及した。まず紙史料集のデジタル移行や原史料のデジタル高精細画像公開、AIIOCRの精度向上といった現代歴史学を取り巻く傾向を整理したうえで、デジタルデータ自体も編纂物であり、史料集もデジタルデータもモノ実体を解釈した表現の一つであることを指摘する。そして、編纂知の具体例や現在編纂中の史料集におけるDX事例を紹介し、編纂知によって責任ある解釈を利用者たる人間や機械に対して提示していくことの重要性を示した。

続く山崎報告「社会科学から見た歴史データ」では、報告者自身の経験も踏まえながら、経済学が歴史やそのデータに関心を持つ理由を示したうえで、社会科学の側が利用しやすいものとして期待するデータを説明し、報告者が取り組んでいるプロジェクトを紹介して、経済学と歴史学、社会科学と人文

科学の協働の在り方を提言した。経済学が歴史学に関心を持つ理由として、第一には長期的なプロセスによって生まれてくる経済現象・事象を理解するために歴史を知ることが不可欠であること、そして第二には実証経済学において歴史がある種の自然実験の宝庫として扱われていることが挙げられ、歴史データの需要は高まっていること、しかしながら歴史学で求められるデータと社会科学が期待するようなデータとは形式面や表現においてどうしても齟齬が生じる事を指摘し、報告者が取り組んでいる寛政重修諸家譜と柳菴補任のデジタル化、構造データ化を紹介して、経済学・歴史学双方の協力によるデータ整備の好循環と研究蓄積への期待が示された。

休憩をはさんで行われた高槻氏による「経済史研究における基盤的数量データの公開・活用」では、山崎報告でも示された通り、実験室としての歴史に自然科学や社会科学が関心を高めている一方で、近世日本経済史に関する基盤的数量データのデジタル化が十分に進んでいない現状と、そうした情報をデジタル化するに際して解決すべき課題を共有した。近世日本経済史の基盤的数量データは多くが紙媒体の出版物としてまとめられており、デジタル化のうえ無償公開されているものは希少であること、他方で紙媒体にまとめられたデータも、紙幅という物理的制限のもと、原史料から摘記されたものが多く、原史料に戻らずそのデータだけが参照されてしまいがちなことを指摘し、紙幅という制約の無いデジタルデータへの期待の大きさと、またその更新や修正のしやすさを提示する一方で、データサバーの購入・維持管理に代表されるデータを支える費用的バックアップの欠如や、各データの課題の不十分さ、そしてそうしたデータ整備が研究者個人の業績に結びつかないといった問題が課題のままであることが示された。

最後の報告である中村寛「歴史資料のデジタル化を支える技術」では、歴史資料のデジタル化とそれを支える技術について、TEI (Text Encoding Initiative) 及びOCR (光学文字認識) を中心に取り上げながら、これらの技術の具体的利点や応用可能性について、史料編纂所のデジタル化プロジェクトを事例として考察した。TEIは、人文学分野におけるテキスト史料デジタル化の標準規格で、テキストの構造や内容、注釈、メタデータを詳細に記述できるという特徴を持っており、これを活用した史料編纂所の『蔣洲咨

文』デジタル化プロジェクトが、テキストのみならず、関連する地図や画像、固有名詞のリストなども一元的に管理し、視覚的に表示することが可能となった事例として示された。OCRは、紙の文書をスキャンし、その画像データからテキストデータを抽出する技術であり、大量の歴史資料を効率的にデジタル化することを可能にしているものの、歴史資料特有の異体字・特殊書体、複雑なレイアウトに課題が残っており、AIや機械学習を用いたOCR技術、物体検出モデルによるレイアウト認識による対応が必要となることが示され、デジタル化技術の進展は、歴史資料の保存・共有・活用を支える重要な要素となっているが、データの長期保存、信頼性、プライバシーや著作権の問題といった新たな課題に対応しながら史料を広く活用できる環境の整備が求められていることが指摘された。

コメントに立った山田氏は、「人文学における研究資源のデジタル化と持続可能性」と題して、人文学を取り巻く研究環境において急速に進展してきたデジタル化について、単なるアナログからデジタルへの変換にとどまらず、デジタル技術を活用した新たな研究方法や社会的仕組みを創出するデジタルトランスフォーメーション(DX)をも含むことを指摘し、デジタルデータの作成、データ利用環境の整備、データ作成者と利用者との間のギャップ、データ公開と持続可能性のそれぞれについて紹介し、人文学研究DXの実現に向けた課題とそれを克服するための取り組みの必要性が示された。

同じくコメントの中村雄祐氏からは、デジタル化の進展が歴史研究者のための「理想の文房具」開発に結実していることへの期待が示される一方、人文学の伝統的なモノグラフの今後や一般社会との関係性について課題が示された。人文系諸学で学問の中核を占めてきたモノグラフ叙述は、一次資料の精査を始めとした長期的な修練を必要とするが、学術書が苦境に立つ一方、膨大な時間・労力・資金が必要なデジタル化において分業化が促進される状況下で、どのようにモノグラフの伝統を継承していくのか、そしてデジタル技術を積極的に活用しているエンタテインメント業界での歴史需要との関係における相互対話の必要性といった課題が指摘された。

コメントの後、ラウンドテーブルとして、各報告者からコメントにリプライが行われた。菊地氏からは山田氏のコメントのデータ作成者と利用者との

間のギャップに関する現状の課題が示され、データ構造と版面表現とのギャップの解決の必要性が述べられた。山崎氏からは生データへのアクセスを可能とすることの重要性が述べられ、中村氏のコメントに関連して社会科学である経済学においてもモノグラフが必要であり、専門家の協業が重要になること、一般社会とのコミュニケーションの重要性は経済学も同様であるとの指摘があった。高槻氏からは、『社会経済史学』における電子附録の試みについての紹介があり、他方でデータの持続的提供には国家的支援が必要であることが述べられた。中村寛氏も、高槻氏のデータやツールの持続的提供への国家的支援の必要性に同意し、規格の標準化が必要であること、人文系データに特有の多様性を標準規格に落とし込んでいくところに人文情報学研究者の役割があると述べた。

これらリプライの後、質疑応答が行われ、菊地報告や山崎報告、高槻報告に関連して人名の多様さへ対応する必要性やその困難さについての指摘、中村報告に関連して構造化テキスト制作の重要性、他機関との連携といった課題に関する質問があった。さらに、全体にかかわる論点として、史料集作成者、データ作成者側が経験的に得た哲学をデータベース等のデータ提供に際していかに検証可能にしていくかという課題が提示された。データの作成をめぐるのは、歴史学の成果が社会科学その他の側からデータの提供元としかみなされない現状、データベースやデータ作成が業績と見なされない現状への意見が各報告者に求められたほか、原資料の明らかな誤記をデータとして提供することの意味などについて議論があった。

最後に、改めてシンポジウムを企画した杉本氏から挨拶が行われ、シンポジウムは終了した。本シンポジウムは、会場での対面参加者、オンライン参加者を合わせて八十一名もの参加者を得ただけでなく、歴史学や経済学にとどまらず、図書館やデジタルアーカイブに関わってきた方々のご参加を得ることができ、また予定の時間を超過して議論が行われ、大変に充実したシンポジウムとなった。

なお、本シンポジウムと関連するデータベースを最後に紹介する。

・神戸大学経済経営研究所「近世経済データベース」

<https://www.rieb.kobe-u.ac.jp/project/kinsei-db/>

・東京大学史料編纂所「近世史編纂支援データベース」

<https://www.wap.hi-u-tokyo.ac.jp/ships/w30/search>

・東京大学史料編纂所「幕末維新史料・横断検索システム」

<https://ishin.lab.hi-u-tokyo.ac.jp/>

・「蔣洲咨文」テキストビューア（倭寇図巻デジタルアーカイブ）

<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/collection/digitalgallery/wakozukan/tei/>

・東京大学史料編纂所・史料集版面検索 (HI Lab)

<https://dip.slab.hi-u-tokyo.ac.jp/>

・東京大学史料編纂所・史料集版面検索 Ngram Viewer

<https://dip.slab.hi-u-tokyo.ac.jp/ngram>

(立石了)

人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業人文学データシンポジウム
「人文学研究データに関する提供と利用のギャップ」

二〇二四年九月一八日

二〇二四年九月一八日、東京大学法文二号館大講義室一（オンライン併用）にて、人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業人文学データシンポジウム「人文学研究データに関する提供と利用のギャップ」を開催した。これは二〇二四年三月一二日に行った人文学データシンポジウム「人文学研究資源としてのデジタルデータ」に続く第二回のシンポジウムである。登録ベースではあるが、一六二名（現地参加五四名、オンライン参加一〇八名）だった。本シンポジウムは、日本学術振興会による「人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業」（以下、強化事業）に関連するイベントとして、また、国際会議ADH2024のプレシンポジウムとしても位置づけられる。人文学においても、オープンサイエンスに基づくデータ提供環境として整備が進む一方で、取得したデータを分類・分析していくデータ利用を前提とした研究環境も整備も進んでいることを鑑み、本シンポジウムでは、人文学データの提供環境と利用環境の状況を報告するとともに、人文学研究進展における提供と利用のギャップについて議論することを趣旨とした。

本シンポジウムでは、山田太造史料編纂所准教授が総司会として進行し、

まず、尾上陽介史料編纂所所長より挨拶いただき、次に山田より開催趣旨の説明があり、その後各機関における報告がなされた。それぞれの報告者等は次のとおりである。

- ・中村寛（東京大学史料編纂所）
 - 「東京大学史料編纂所における前近代日本史関係研究データの提供と利用」
 - ・高田祐一（奈良文化財研究所）
 - 「文化財の調査研究における情報提供と利用のギャップ」
 - ・橋本雄太（国立歴史民俗博物館）
 - 「大規模翻刻テキストの提供環境と利用事例」
 - ・上阪彩香（大阪成蹊大学）
 - 「研究と教育における人文学データの利活用」
 - ・佐藤健一（滋賀大学）「非負値行列因子分解の紹介」
- 第一回のシンポジウムと同様に、それぞれの報告内容は強化事業のウェブサイト (<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/di/>) より公開する予定である。
- 各報告の後、後藤真国立歴史民俗博物館准教授の司会によりパネルディスカッションを行った。話題としては、今回のテーマでもあるデータの提供者と利用者の間でのデータのあり方に関するギャップを中心として展開した。提供されるデータと利用したいデータの現状、データの作成者・管理者・利用者間でのコミュニケーション、データそのものの信頼性などが挙げられた。本シンポジウムでの利用者としてはデータサイエンスといったデータ分析を中心であった。次回以降のシンポジウムでは、データ作成から教育を含む利活用までのデータサイクルを中心とした人文学データのあり方について議論を行いたいと考えている。

（山田太造）

人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム

「研究データの利活用と流通を強化する」

二〇二五年一月三十一日
昨年度に引き続き、日本学術振興会（以下、JSPS）人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業フォーラム「研究データの利活用と

流通を強化する」を二〇二五年一月三十一日に開催した。二〇二四年度より開始したJSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業（以下、強化事業。課題番号:JPJS00320231001）は、二〇一八年度から二〇二三年度まで実施した「JSPS人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業」（以下、構築推進事業）の成果等を踏まえ、人文学・社会科学のデータ共有・利活用を促進するデータプラットフォーム等の基盤の充実・強化を図り、データ分析に基づく人文学・社会科学研究の発展、国内外の共同研究の促進等を目的として実施している。この実現のため、中核機関と拠点機関を置き、人文学・社会科学の研究に利用可能なデータを保存し、国内外において共有する活動を推進していく。中核機関として、史料編纂所は社会科学研究所とともにその役割を担っている。また、神戸大学附属図書館および奈良文化財研究所が拠点機関として、国立情報学研究所が本事業における情報システムの担当機関と認定された。

本フォーラムは、強化事業開始より約一年間の実績と取組を報告するとともに、人文学・社会科学に関わる研究データの利活用と流通の側面から研究データ基盤の強化について議論することを目的として開催した。東京大学福武ホールラーニングシアターにて開催したが、オンライン会議も併用した。参加者は、現地参加六八名、オンライン二四名だった。本フォーラムの総合同会である渋谷綾子特任助教のもと進行し、まず、開催の挨拶を玄田有史、東京大学副学長、さらに尾上陽介史料編纂所所長より頂戴した。続けて、強化事業概要の説明、および各拠点機関におけるこれまでの活動報告がなされた。それぞれの報告者等は次のとおりである。

・山田太造（東京大学史料編纂所）

「中核機関における取り組み」「東京大学史料編纂所における取組」

・横内陳正（東京大学社会科学研究所）

「SDデータアーカイブにおける取り組み:これまでの成果と今後の展望」

・跡部史浩（神戸大学大学院人文学研究科）

「神戸大学附属図書館の取り組み」

・武内樹治（奈良文化財研究所）

「報告4 奈良文化財研究所」

・朝岡誠（国立情報学研究所）

「国立情報学研究所の取組：人文学社会科学総合データカタログの整備と強化」

昨年度のフォーラムと同様に、それぞれの報告資料は、強化事業のウェブサイトにより公開されているので、詳細はそちらを参考にしてください（<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/di/news/22/>）。

パネルディスカッションでは、大向一輝准教授（東京大学大学院人文社会科学系研究科）により進行し、報告者および助川隆文部科学省研究振興局振興企画課学術企画室長がディスカッサントとして参加した。特に助川氏から、人文学・社会科学に関係する概算要求事項や関連事業等を含む文部科学省としての政策について紹介があった。その後、本フォーラムにおけるデータ流通の強化に係る課題と実現していくための取り組み方法など中心として議論を進めた。

今後本フォーラムのように強化事業に関わる取り組みと実績について定期的に報告していく予定である。データの活用・流通の強化については、改めて課題として取り上げられると考えられる。本事業での取り組みがその回答の一例とすべく事業を推進していきたい。

（山田太造）

JSPS科研費基盤研究(S)「史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立」キックオフフォーラム「日本史研究に関するデータフロー確立に向けて」

二〇二五年二月二一日

JSPS科研費基盤研究(S)「史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立」(24H00011、以下「本科研」)は、二〇二四年度より開始し、二〇二八年度まで行う予定である。本科研では、日本列島に起こったイベントを解明していく上で重要な資源である史料を、時代横断・地域横断といった観点で分析可能なデータとして史料を蓄積・管理・共有すること、日本史のみならず多様な研究分野にて利用可能とするため、(1)史料データセンシング手法の確立(2)データ駆動型データ分析基盤の構築(3)異分野融合研究環境の形成を実現し、過去から現在を、多々の分野をシームレ

スにつながるデータインフラストラクチャとして成長させ、日本列島記憶継承モデルの確立を目指す。科研費基盤研究(S)にて「日本史」をキーワードとする研究課題としては、二〇一八年度に採択された「木簡等の研究資源オーブンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開」(18J05231、研究代表者：馬場基(奈良文化財研究所))以来となる。

このフォーラムは本科研のキックオフイベントとして開催した。史料編纂所大会議室を会場としたが、基本的にはオンライン会議方式とした。事前登録者は九一名だった。本フォーラムでは、研究の全体像・計画、および、初年度の取り組み内容、さらには関連するプロジェクトについて報告した。また、日本列島記憶継承モデルの確立を目指していくため、日本史研究に関するデータフロー確立について議論を行った。報告者等は次のとおりである。

・山田太造（東京大学史料編纂所）

・金子 拓（東京大学史料編纂所）

・中村 覚（東京大学史料編纂所）

・馬場 基（奈良文化財研究所）

・森 信介（京都大学学術情報メディアセンター）

それぞれの報告資料は、準備ができ次第、本科研ウェブサイトから公開する予定である（<https://www.hi-u-tokyo.ac.jp/cdps/jmm/event/>）。

研究概要と取り組みの報告の後、パネルディスカッションを行った。このパネルディスカッションでは、関野樹教授（国際日本文化研究センター）により進行し、報告者がディスカッサントとして参加した。OCR技術を用いた原本・写本等の史料画像のテキスト化、異分野融合研究との関係など、本科研にて立てた三つの柱を中心として議論を行った。

このフォーラムのように、本科研に関わる取り組みと実績について定期的に報告していく予定である。本科研での目的である日本列島記憶継承モデルの確立を目指すべく、本科研における研究事業を推進していきたい。

（山田太造）

講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」

二〇二五年三月八日

二〇二五年三月八日（土）、東京大学史料編纂所・熊本大学永青文庫研究センター・東京大学史料編纂所二〇二四年度一般共同研究「熊本藩士上田久兵衛の総合的研究と関係史料の学術資源化」（研究代表者：今村直樹）の主催、JSPS 科研費23H00668・基盤研究(B)「永青文庫細川家文書「口書」の総合的解析による日本近世民衆史の研究」（研究代表者：今村直樹）・JSPS 科研費24H0321・奨励研究「明治維新において各地で形成された地域連合」の特質に関する基礎研究」（研究代表者：白石烈）・熊本史学会の共催により、講演会「熊本藩士上田久兵衛と幕末維新」を、熊本大学文学部本館A1講義室にて開催した。

開催方法は、現地参加とオンライン参加のハイブリッド形式とし、現地の会場設営・運営等については熊本大学大学院生の皆さんのご協力を得た。また、オンライン配信関係は、本所の菊地智博助教が担当した。

上田久兵衛（のちに休兵衛、休と改名）は、元治元年（一八六四）から慶応元年（一八六五）にかけて熊本藩の京都留守居役を務め、帰藩後は川尻町奉行などを歴任した人物であるが、明治十年（一八七七）の西南戦争に際しては、かつて町奉行を務めた川尻町民から懇請され、川尻鎮撫隊を組織して治安維持に当たったところ、明治政府から西郷軍に加担したとの嫌疑を掛けられ処刑された。

上田が遺した文書群は、その後も子孫たちの手によって大切に守られ、二〇〇一年に本所へ寄贈されて特殊蒐書「上田久兵衛関係文書」となった。そのうち、京都留守居役時代における主要な文書の多くは、宮地正人編・解説『幕末京都の政局と朝廷―肥後藩京都留守居役の書状・日記から見た―』（名著刊行会、二〇〇二年）で紹介されたが、その時点では未整理文書や追加寄贈文書もあり、文書群の全体像は把握し難い状態であった。

こうした中で、二〇二三年度から二年間、熊本大学永青文庫研究センター准教授の今村直樹氏を研究代表者とする一般共同研究が開始され、約九百数十点に及ぶ本所所蔵「上田久兵衛関係文書」とその関連史料を対象とする総合的な調査・研究が進められた。

本講演会は、学界でも十分に認識されておらず、地元の熊本でも認知度が低いままである上田久兵衛とその史料について、「上田久兵衛関係文書」の整理・研究歴と学術資源化の現状、朝幕関係の修復に尽力した上田の国事周旋活動、西南戦争時における上田の思想と行動などを主題として、共同研究で得られた成果の一端を、上田の地元である熊本の地から、市民や研究者に向けて発信することを目的とした。

当日のプログラムは、以下の通りである。

- ・ 司会 三澤純（熊本大学大学院人文社会科学学部教授）
- ・ 開会挨拶 尾上陽介（東京大学史料編纂所所長）
- ・ 趣旨説明 今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター准教授）
- ・ 講演

箱石大（東京大学史料編纂所教授）「上田久兵衛関係文書と幕末維新史研究」

白石烈（宮内庁書陵部編修課主任研究官）「肥後藩京都留守居上田久兵衛の国事周旋活動―いま一度、日本を立て直しようすべし―」
今村直樹（熊本大学永青文庫研究センター准教授）「明治維新後の上田休―廃藩置県・細川家・西南戦争―」

・ 質疑応答

参加者は、現地参加者が五八人、オンライン参加者が七八人、合計一三六人であった。講演終了後には活発な質疑応答がなされたことから、本講演会が地元でも忘れられつつある上田久兵衛への関心を高める機会となったように思われる。なお、本講演会については、以下の新聞各紙で報道された。

- ・ 「上田久兵衛 実像に迫る 熊本大で講演会」幕末の熊本藩士に光を「（熊本日日新聞）二〇二五年三月二日」
- ・ 「幕末維新时期に活躍した熊本藩士・上田久兵衛 熊本藩の政治的位置を捉え直す 熊本で講演会」（熊本大学新聞）デジタル、二〇二五年三月二三日

（箱石大）

研究集会「禁裏・公家文庫研究の現段階」

二〇二五年三月一二日

本年度にて東京大学概算要求事項「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト（二〇二〇～二四年度）が終了し、基盤研究(A)・(S)・学術創成などの大型科学研究費により、約二十七年にわたって継続してきたプロジェクトが区切りを迎える。これを機に、広く学術関係者に向けて、これまでの成果を振り返るとともに、その実現のための具体的な作業や意図を示して、今後の深化に向けての展望を探る目的で研究集会を開催した。本所主催、禁裏・公家文庫研究プロジェクトの担当で、オンラインにて開催し、七〇名強の参加があった。プログラムは以下のとおり。

所長挨拶

報告一 田島 公

「四半世紀を経て舞台が整った禁裏・公家文庫研究

—デジタル画像と蔵書目録を用いた前近代の「知の体系」の解明・

古典学の進展のために—」

報告二 遠藤基郎・芝崎有里子

「禁裏公家文庫史料画像公開でのバックヤードの取り組み

—研究利用に寄り添ったデータベースを目指して—」

報告の後の質疑のなかでは、宮内庁書陵部図書課、陽明文庫、西尾市岩瀬文庫の関係者からコメントも頂戴した。プロジェクトの事業遂行にご協力を賜った方々とともに感謝申し上げる。

(藤原重雄)

外国人研究員 研究成果報告

承久の乱と公家—武家の意識の形成

マカーティ・マイケル・バレット

サリスベリ大学・准教授

二〇二四年六月一二日～二〇二四年八月六日

西田友広先生の支援のおかげで、二〇二四年夏、博士論文を本に編集するため、史料編纂所を訪れた際、必要な一次資料と二次資料を入手することができた。特に、『大日本史料』や『大日本古文書』を含む資料を閲覧できた。この研究のおかげで、本書の第四章と第五章を全面的に改訂できた。これらの章は、当初の博士論文の中で最も弱点とされていた部分を引き継いでいると感じていた。そこで、研究期間とそのあと休暇期間中、編集するだけではなく、完全に書き直し、第四章と第五章の間に約百ページの新規資料を追加することができた。さらに、編纂所の資料を集めたことで、承久の乱の戦闘の進行状況を示す地図をデジタルと紙の両方で作成することもできた。この研究はいくつかの価値ある結果をもたらした。たとえば、『吾妻鏡』をはじめとする年代記が誤解を招くような形で提示していた問題のある戦闘の時系列に対して、鎌倉幕府軍の対応は、これまでの研究が想定していたよりも無計画で無秩序なものであったと主張している。この貴重な研究期間のおかげで、二〇二五年には本の改訂を完了できると確信している。

幕末・明治日本における歴史知識と無知の形成

崔正訓 ハーバード大学

二〇二四年九月一日～二〇二五年一月三十一日

本研究は、一八五〇年代から一九一〇年代にわたる時期の日本で形成された世界史知識、そしてその知識にもかかわらず（あるいは逆説的にもその知識によって）形成された歴史に関する無知を明らかにすることを目的とする。日本の西洋史学史と近代日本教育史については既に多くの優れた研究があるものの、幕末・明治期の世界史知識の拡散を、先駆的な歴史家（エリート）の貢献だけでなく、メディア空間で成功裡に伝播されたテキストと情報の流れとして捉えて究明した分析は少ない。本研究は、十九世紀の「西洋化」を、地域の教育現場と出版世界のダイナミクス、そしてエリート学者のメッセージに対する読者の体験に集中して解明しようとする。これは思想の研究として、テキストの周辺の社会の全体像を示そうとするブック・ヒストリーの観点からの試みである。また、本研究は、主に科学史学で試みられてきた

無知学のアプローチを、思想史・教育史に適用することにより、日本の「成功した」近代化の裏面を見つけようとする。

在籍期間中には、『和漢年契』（史料編纂所）・箕作阮甫『大西春秋』（国会図書館憲政資料室・箕作阮甫・麟祥関係文書（寄託）・那珂通世講『支那歴史』（東京大学国文学研究室）・外山高一旧蔵書・Thomas Babington Macaulay, Warren Hastings（東京大学総合図書館）など、幕末・明治日本における中国とヨーロッパに関する知識の生産と消費のグローバルな、そしてローカルな側面を明確にあらわす事例に関する史料を調査した。また、研究内容の一つである明治日本におけるウクライナの歴史に関する無知の形成に関する論議は、ウクライナ語に翻訳され、『クリティカ（Kritika）』二〇二五年一・二月号に掲載され、ドイツ語に翻訳されオンライン雑誌『デモクラティシヤ・サロン（Demokratischer Salon）』に発表された。史料編纂所在籍中の研究成果は、その以降進行している佐賀・熊本・福岡での調査の成果と合わせて、今後、博士学位論文として纏めて行きたい。

東京大学史料編纂所研究成果報告一覧

二〇二四年度

番号	書名	研究費名	担当者
1	日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて	科学研究費補助金基盤研究(B)	立石了
2	中世日本関係中国金石文一覧表(稿)ならびに解題	科学研究費補助金基盤研究(A)	菊地大樹
3	戦国期播磨国人文書集	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	村井祐樹
4	小川八幡神社大般若経調査概報二〇二二―二〇二三各論篇	共同利用・共同研究拠点(特定共同研究)	稲田奈津子

5	多可町立和紙博物館 寿岳文庫所蔵 寿岳文章和紙コレクション 史料紙調査研究Ⅱ	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	山家浩樹
6	大和宇智郡関連史料の研究資料	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	菊地大樹
7	木村喜毅関係古写真資料の調査と研究	科学研究費補助金基盤研究(B)	箱石大
8	中嶋待乳関係古写真資料の調査と研究	科学研究費補助金基盤研究(B)	箱石大
9	陽明文庫講座図録6	天皇家・公家文庫プロジェクト	藤原重雄
10	明清中国関係文書の比較研究―韓国所在史料を中心に―	共同利用・共同研究拠点(一般共同研究)	黒嶋敏
11	続々 賀茂別雷神社の所領と氏人	共同利用・共同研究拠点(特定共同研究)	金子拓
12	中世東大寺記録東大寺法華会・興福寺維摩会関係記録史料	科学研究費補助金基盤研究(A)	遠藤基郎